

始



紀元二千六百年奉祝會長崎縣支部



紀元二千六百年奉祝會長崎縣支部

特 231
758



紀元二千六百年聖典記念錄

昭和十五年十一月

紀元二千六百年奉祝會長崎縣支部



紀元二千六百年紀元節當日賜リタル詔書

詔書

朕惟フニ神武天皇惟神ノ大道ニ遵ヒ一系無窮ノ寶祚ヲ繼キ萬世不易ノ丕基ヲ定メ以テ天業ヲ經綸シタマヘリ歷朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ君民一體以テ朕カ世ニ逮ヒ茲ニ紀元二千六百年ヲ迎フ
今ヤ非常ノ世局ニ際シ斯ノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク思ヲ神武天皇ノ創業ニ馳セ皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ勗メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スヘシ

御名 御璽

昭和十五年二月十一日

勅語

茲ニ紀元二千六百年ニ膺リ百僚衆庶相會シ之レカ慶祝ノ典ヲ舉
ケ以テ肇國ノ精神ヲ昂揚セントスルハ朕深ク焉レヲ嘉尙ス
今ヤ世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判カル所ナリ爾
臣民其レ克ク嚮ニ降タシシ宜諭ノ趣旨ヲ體シ我カ惟神ノ大道ヲ
中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアラン
コトヲ期セヨ

十一月十一日紀元二千六百年奉祝會當日賜リタル勅語

勅語

爰ニ紀元二千六百年慶祝ノ臨ミ各國代表者竝ニ朝野ノ代表
者ト歡ヲ罄クシ樂ヲ偕ニスルハ朕ノ深ク懌フ所ナリ
今ヤ一大世變ニ際會スルモ平和ノ日ナラスシテ恢復セラレ萬邦
ト俱ニ其ノ慶ニ賴ランコトヲ望ム

はしがき

昭和十五年は、畏くも 神武天皇が皇祖肇國の大精神を體せられ、天業を恢弘して、大和の橿原宮に天位に即かせ給ひ、人皇第一代の聖皇と仰がれ給ひてより正に二千六百年に相當する。

皇統一系連綿として萬古に渝らず、寶祚の隆んなる天壤と與に窮りなく、一君萬民金甌無缺の國體は世界に其の儔を絶つ。今や皇威は八紘に輝き、國運は隆昌にして、而も彌限りなき發展の過程にあり。

この光輝ある紀元二千六百年を迎ふるに當り、遠く肇國創業の丕績を瞻仰し、歷朝の聖徳を敬慕し奉ると共に、我が國體の精華を普く中外に宣騰し、内は純忠至誠清新潑刺たる國民精神を昂揚し外は八紘一字の大理想の具現に邁進し、以て昭和聖代を壽ぎ奉らんことは一億皇民の齊しく希求翹望せる所たり。

仍ち 今上陛下御即位の記念日たる十一月十日の佳辰をトして、紀元二千六百年奉祝式典を、翌十一日に紀元二千六百年奉祝會を、共に 天皇皇后兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉り、菊花香る宮城外苑に於て、嚴肅壯大に舉行せられたり。この世紀の盛典に參列したる者は、畏くも 龍顏を拜し奉り聖壽の萬歳を奉唱し、剩へ優渥なる勅語を拜承して、無上の光榮に浴し、限りなき感激を覺え悉く

至誠奉公の信念を固めたのである。

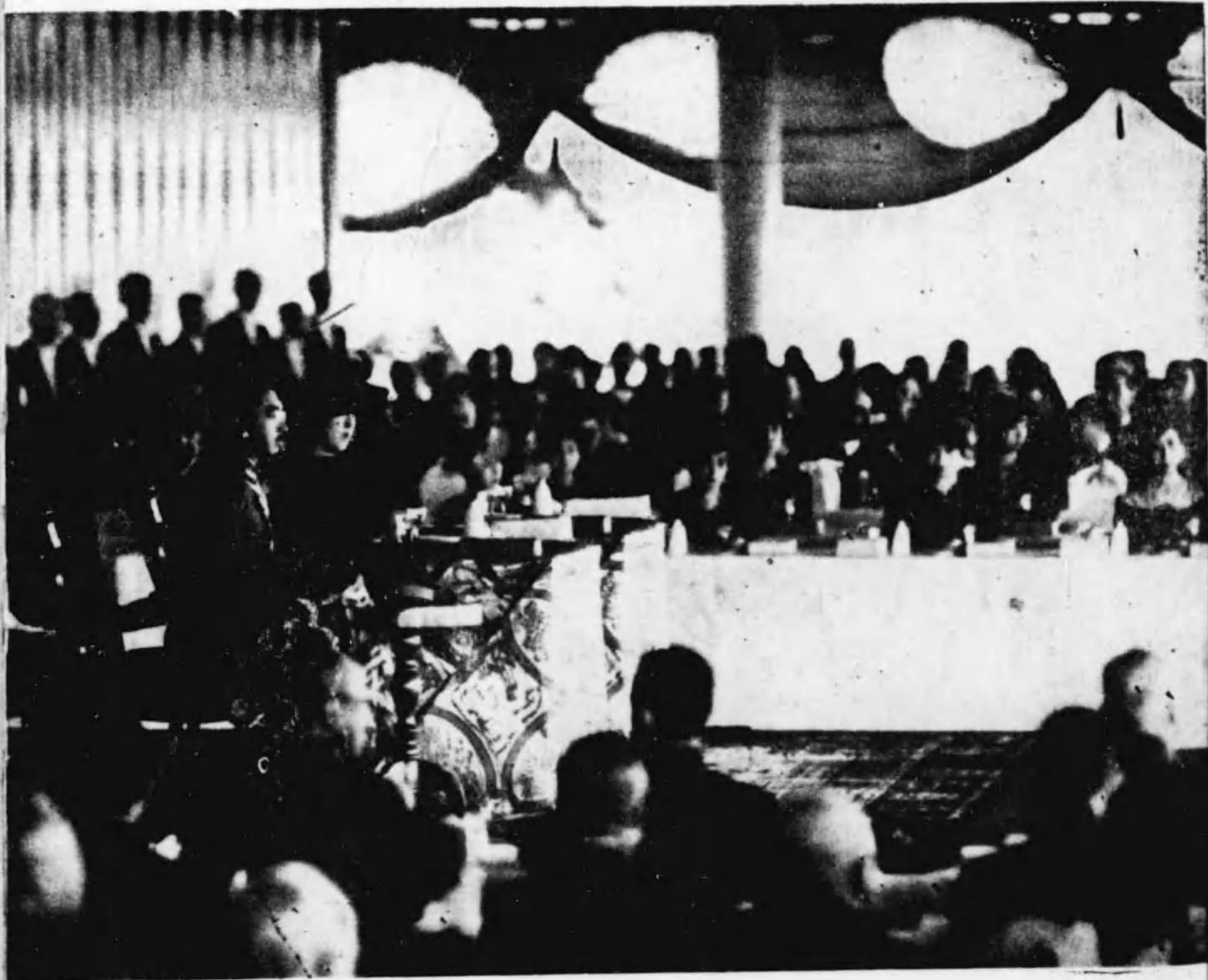
茲にこの曠古の盛典の次第と本縣選出參列者の光榮と感激の心情を録して、紀元二千六百年聖典記念録と命じ、以て關係者に頒つこととした。希くはこの光榮を長へに記念し、この盛儀を後昆に傳へ、國民精神昂揚の糧とされんことを。

昭和十五年十一月

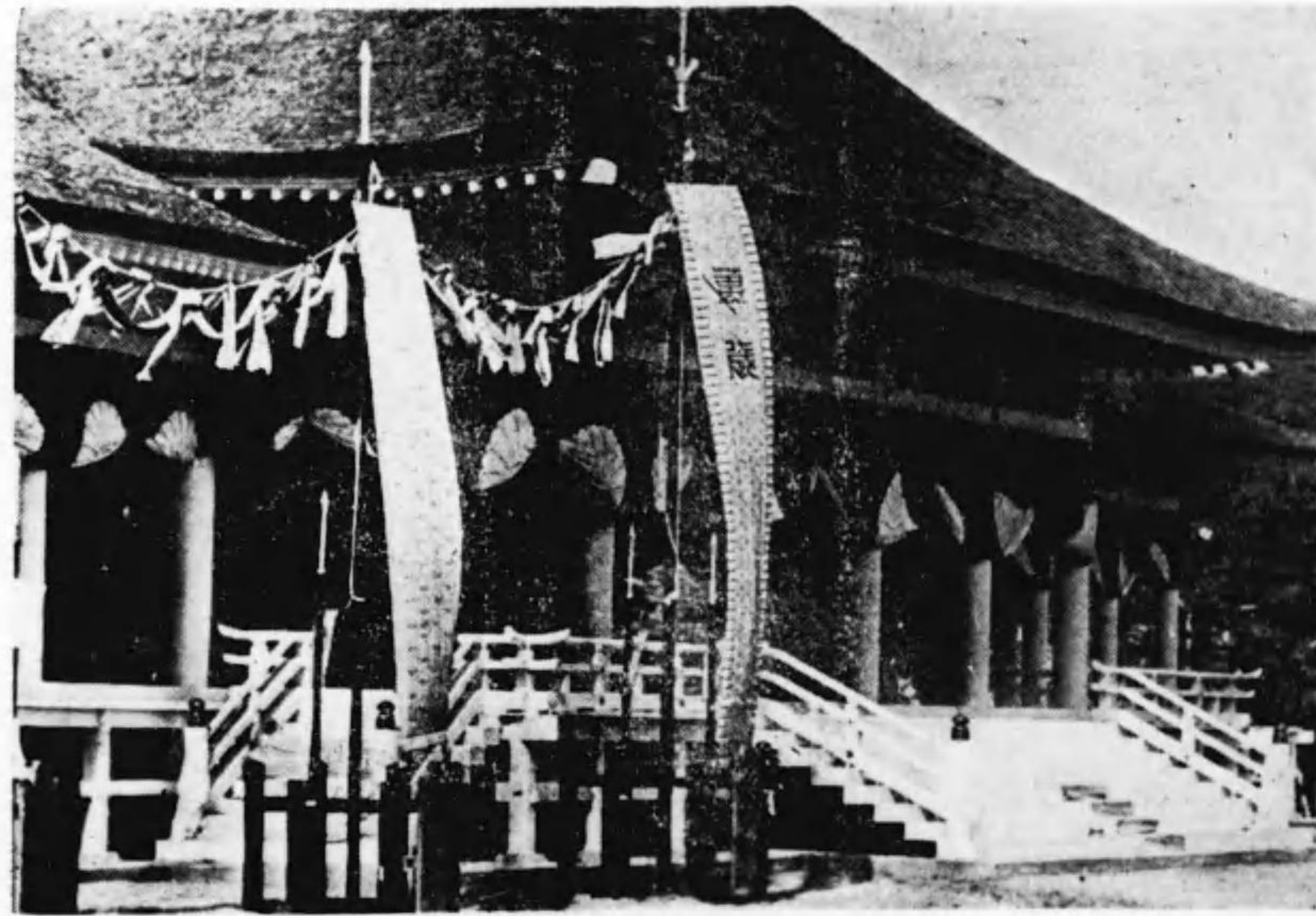
紀元二千六百年奉祝會會長崎縣支部

目次

紀元二千六百年式典次第	一
内閣總理大臣壽詞	二
紀元二千六百年奉祝奉次第	四
紀元二千六百年奉祝會總裁代理奉祝詞	六
外國使臣首席奉祝詞	七
紀元二千六百年式典及奉祝會會長崎縣參列者名簿	
一、縣市町村並縣會代表者	八
二、縣民總代	一四
三、各省關係分	一九
感想錄	二三



紀元二千六百年奉祝會
大饗宴に 畏くも
野戰料理を御前に奉祝
舞樂「悠久」を天覽
臺覽あらせらるる
天皇陛下
皇后陛下



殿 式



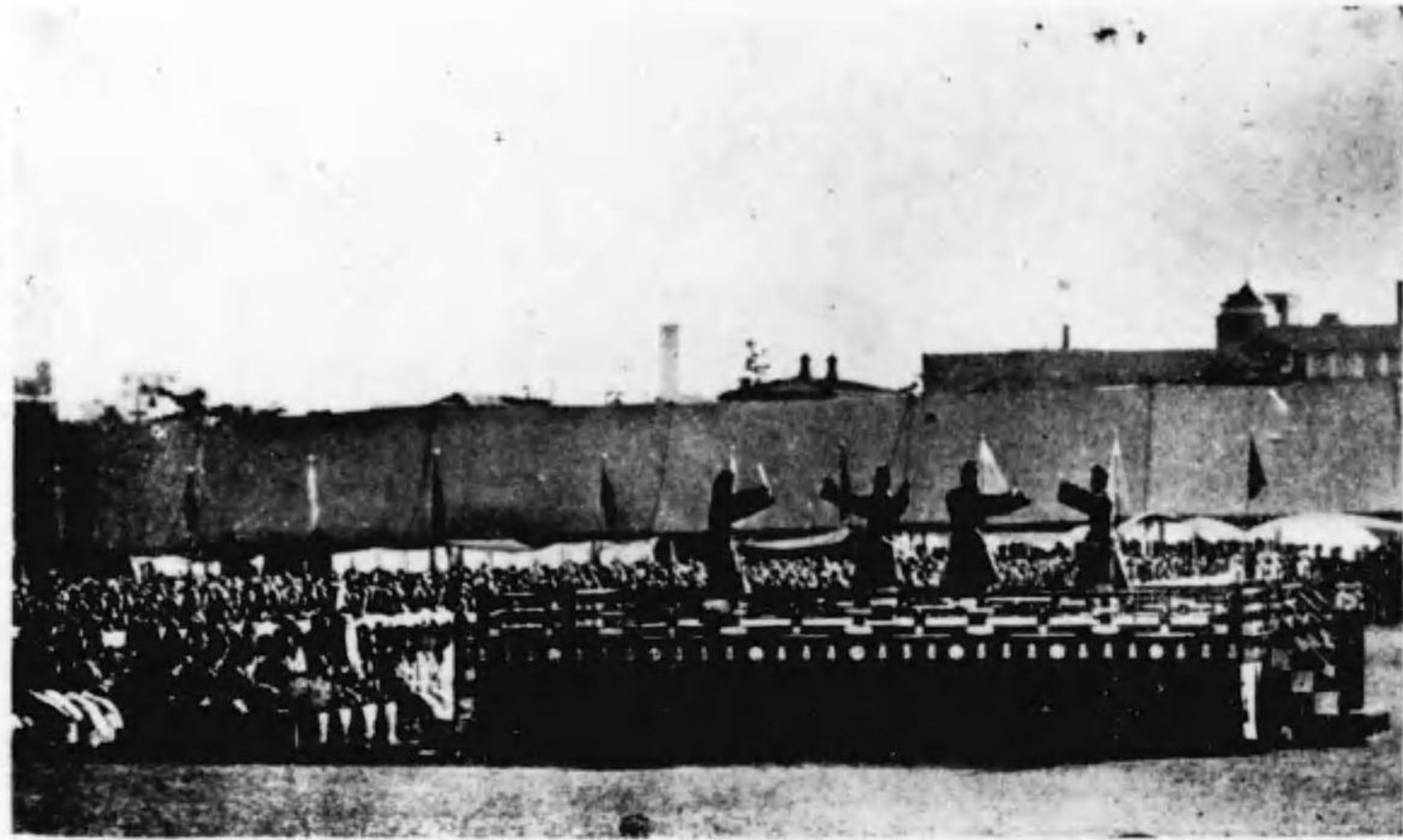
列行灯提祝奉の民市京東（左）



む進を外門倉田和車電花祝奉（右）



舞臺上に進まれ萬歳御發聲の高松宮殿下

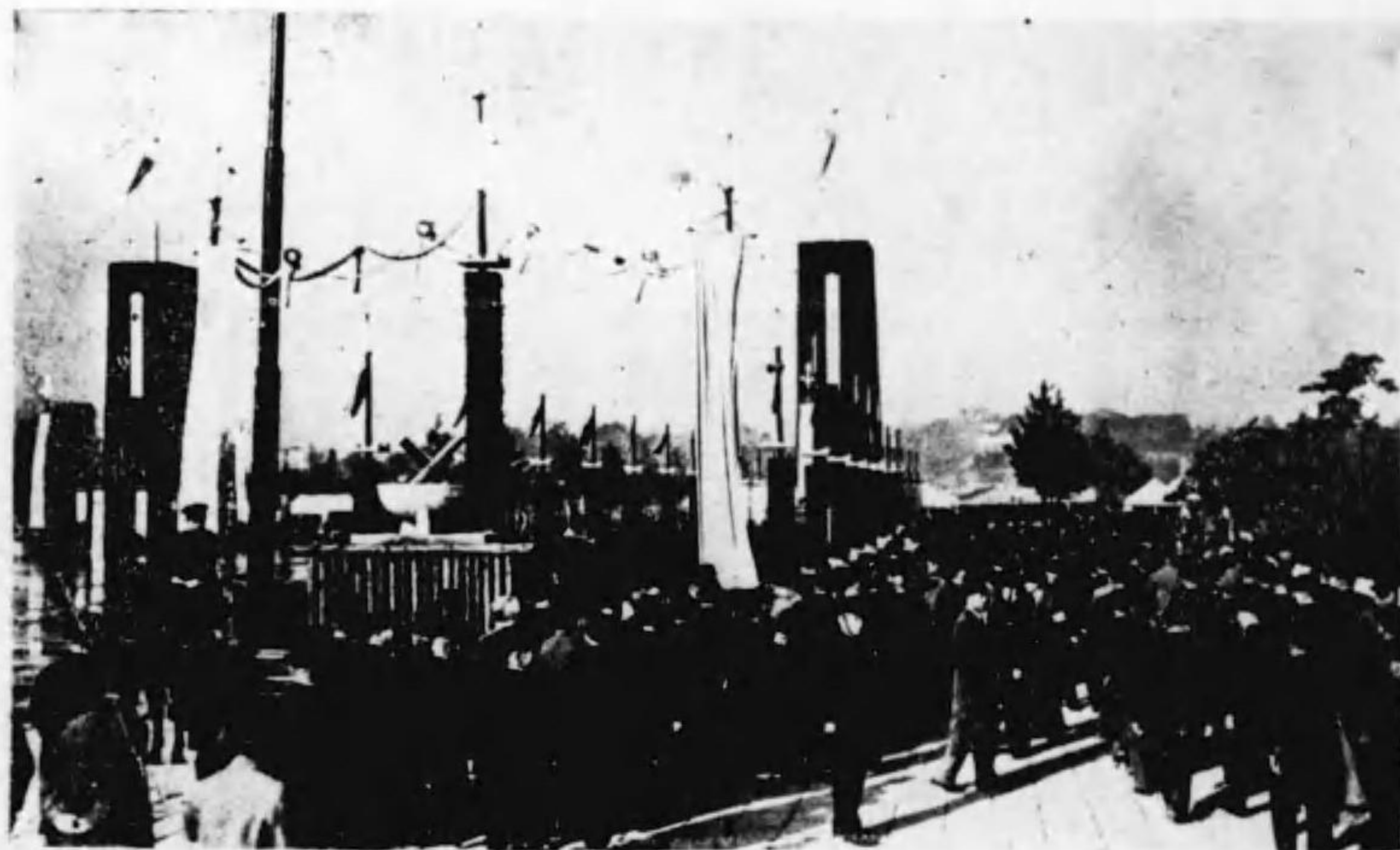


奉祝舞樂「悠久」



唱奉歳万の千五萬五表代國全の列參曲式 (上)

群の者表代方地るす入参に場式りよ門先場馬(下)



紀元二千六百年式典次第 (十一月十日)

一、整 列 (式典中全員起立)

一、天皇 皇后兩陛下 出御 奏樂「君が代」

一、諸員最敬禮



一、壽詞奏上

一、紀元二千六百年頌歌齊唱

一、萬歲奉唱「三聲」

一、諸員最敬禮

一、天皇 皇后兩陛下 入御 奏樂「君が代」

一、散 會

參 列 者 一 同
陸 軍 軍 樂 隊
海 軍 軍 樂 隊

參 列 者 一 同
陸 軍 軍 樂 隊
海 軍 軍 樂 隊

東京音樂學校生徒
陸 軍 軍 樂 隊
海 軍 軍 樂 隊
參 列 者 一 同

陸 軍 軍 樂 隊
海 軍 軍 樂 隊

内閣總理大臣壽詞

臣文應謹ミテ言ス伏シテ惟ミルニ

皇祖國ヲ肇メ統ヲ垂レ

皇孫ヲシテ八洲ニ君臨セシメ錫フニ 神勅ヲ以テシ授クルニ 神器ヲ以テシタマフ 寶祚ノ隆天壤ト窮リ無ク以テ

神武天皇ノ聖世ニ及ブ乃チ 天業ヲ恢弘シテ 皇都ヲ樞原ニ奠メ 宸極ニ光登シテ 德化ヲ六合ニ敷キタマヒ

歷朝相承ケテ益々天基ヲ鞏クシ 洪猷ヲ壯ニシ一系連綿正ニ紀元二千六百年ヲ迎フ國体ノ尊嚴萬邦固ヨリ比類ナシ 皇謨ノ宏遠四海豈匹儔アラシヤ臣文應誠懽懽首頓首恭シク惟ミルニ

天皇陛下聰明聖哲允ニ文允ニ武夙ニ

祖宗ノ丕績ヲ紹ギタマヒ宵旰治ヲ圖リ文教ヲ弘メ武備ヲ整ヘ 威烈ノ光被スル所昭明ノ化普率ニ治ク億兆臣民皆雨露ノ惠澤ニ浴ス方今世局ノ變急アルニ臨ミ或ハ六師ヲ異域ニ出シ或ハ盟約ヲ友邦ニ結ビ以テ東亞ノ安定ヲ確立シ以テ世界ノ平和ヲ促進シタマハントス洵ニ絶代ノ盛德曠古ノ大業一トシテ

皇祖肇國ノ 宸意ト

神武天皇創業ノ 皇謨トニ契合セザルハナシ臣等生ヲ昭代ニ享ケ此ノ隆運ヲ仰ギ感激并躍ノ至リニ

堪ヘズ曩ニ光輝アル紀元ノ佳節ニ當リ優渥ナル 聖詔ヲ拜シ恐懼措ク能ハズ臣等協心戮力誓ツテ

大訓ニ率由シ益々國體ノ精華ヲ發揮シテ非常ノ時艱ヲ克服シ八紘一字ノ 皇謨ヲ翼賛シテ宏大無

邊ノ聖恩ニ奉對センコトヲ期ス本日此ノ式典ヲ舉クルニ際シ

天皇陛下皇后陛下ノ 臨御ヲ辱クス臣等更ニ遠ク心ヲ肇國ノ淵源ニ馳セ思ヲ創業ノ雄圖ニ致シ感激

益々深シ臣文應乏シキヲ承ケテ臺閣ノ首班ニ居リ茲ニ帝國臣民ニ代リ叨リニ 天顏ニ咫尺シテ恭

シク 聖壽ノ萬歳ヲ祝シ 寶祚ノ無窮ヲ頌シ奉ル 臣文應誠懽懽首頓首謹ミテ言ス

紀元二千六百年奉祝會次第 (十一月十一日)

一、整 列

一、天皇 皇后兩陛下 出御 (全員起立)

奏樂「君が代」

參 列 者 一 同

一、諸員最敬禮

海 陸 軍 軍 樂 隊

一、國 歌「君が代」奉 唱 (全員起立)

參 列 者 一 同
海 陸 軍 軍 樂 隊

一、奉祝詞奏上

(全員起立)

紀元二千六百年奉祝會總裁
在本邦外國使臣首席

一、開 宴

紀元二千六百年奉祝會制定

(1) 紀元二千六百年奉祝舞樂

陸軍戶山學校軍樂隊作曲

宮 內 省 樂 部

(2) 吹奏樂「大 歡 喜」

陸 軍 軍 樂 隊

(3) 吹奏樂「紀元二千六百年頌歌行進曲」

帝國海軍軍樂隊編曲

海 陸 軍 軍 樂 隊

紀元二千六百年奉祝會制定

(4) 吹奏樂「奉 祝 讚 歌」

海 陸 軍 軍 樂 隊

一、奉祝國民歌「紀元二千六百年」齊唱

全 國 學 生 生 徒 代 表

一、萬歲奉唱「三聲」 (全員起立)

參 列 者 一 同

一、諸員最敬禮

一、天皇 皇后兩陛下 入御 (全員起立) 奏樂「君が代」

海 陸 軍 軍 樂 隊

一、散 會

紀元二千六百年奉祝會總裁代理奉祝詞

六

紀元二千六百年奉祝會總裁代理 臣宣仁謹ミテ言ス伏シテ惟ミルニ
神武天皇

皇祖ノ神勅ヲ奉シ天壤無窮ノ 寶祚ヲ踐ミ給ヒシヨリ列聖相承ケテ
陛下ノ御宇ニ逮ヒ今年恰モ紀元二千六百年ニ當レリ

陛下斯ノ盛時ニ際シ特ニ 宮中ニ於ケル紀元節ノ祭典ヲ重クシ 明詔ヲ發シテ臣民率由ノ大道ヲ示
シ 恩赦ノ令ヲ下シテ遍ク仁澤ヲ布キ又

神宮

山陵ヲ 親拜シテ孝敬ヲ申ヘ陸海ノ軍容ヲ 親閱シテ士氣ヲ勵マシ給ヘリ

聖慮深厚洵ニ惶懼ニ勝ヘス臣等慈ニ令辰ヲトシ恭シク

天皇陛下 皇后陛下ノ臨御ヲ仰キ紀元二千六百年奉祝ノ會ヲ行フ瑞雲靄霧トシテ宸闕ノ上ヲ繞リ和
氣洋洋トシテ禁苑ノ外ニ溢ル普天率土手ヲ額ニシ聲ヲ同シウシテ此ノ盛事ヲ謳歌セサルナシ願レ
ハ世界ハ今曠古ノ變局ニ臨メリ

陛下武ヲ異域ニ用ヒテ東亞永遠ノ安定ヲ冀圖シ盟ヲ友邦ニ結ヒテ宇内恒久ノ平和ニ寄與シ給ハント
ス

聖謨宏遠洵ニ感激ニ勝ヘス臣等和衷協同 皇猷ヲ贊襄シ時艱ヲ匡濟シ以テ

天恩ノ萬一ニ報イ奉ランコトヲ期ス臣等生ヲ昭代ニ享ケテ此ノ昌期ニ遭ヒ歡天喜地ノ至ニ勝フル
ナシ恭シク表ヲ上リ賀ヲ陳ヘ以テ 聞ス臣宣仁謹ミテ言ス

外國使臣首席奉祝詞

陛下

大日本帝國建國ノ歴史的記念日ノ莊重森嚴ナル祝典ニ參列スルノ光榮ニ浴シ諸外國使臣ハ感激措ク
能ハズ茲ニ一同ヲ代表シ謹ミテ深厚ナル謝意ヲ表シ奉ル

今次祝典ハ誠ニ大日本帝國ノ光輝アル歴史ト傳統ノ悠久性ヲ象徵シ之ヲ四海ニ昂揚スルモノナリ
本日此ノ曠古無比ノ盛典ニ際シ在京外交團員ハ

陛下及大日本帝國國民ニ對シ最モ恭敬ニシテ誠實ナル祝意ヲ表スルト共ニ 陛下 皇后陛下 皇太
后陛下及皇室ノ康寧ト繁榮ヲ悃禱シ大日本帝國ノ國運愈々隆昌ヲ加ヘ益々人類ノ文化ト福祉ノ増進
ニ貢獻スル所アランコトヲ祈願シテ已マザルモノナリ
謹ミテ奏ス

七

紀元二千六百年式典及奉祝會參列者名簿（順序不同）

一、縣、市町村並縣會、代表者

長崎縣知事	平敏孝	長崎縣建築技師	木下涼
長崎縣總務部長	白戸半次郎	長崎縣道路主事	淺野淳
長崎縣經濟部長	菅澤肇	同 地方警察技師	末次秀三郎
同 商工課長兼人事課長	西尾森太郎	縣社龜山八幡神社社司	岡澤磐門
同 庶務課長兼時局課長	田中唯重	長崎縣土木課長	尾崎義一
長崎師範學校長	上田剛	同 都市計畫技師	富安鑿助
長崎縣地方農林技師	前田將	長崎縣會議長	鈴木重次
同 衛生技師	永田梅男	長崎縣市市長	井野次郎
同 體育課長	中谷正知	島原市市長	小浦總平
同 土木技師	中村又一	諫早市市長	植木元太郎
同 學校營繕技師	伊藤四郎	西彼杵郡茂木町長	木下義介
長崎圖書館長	増田廉吉	同 蚊燒村長	原口寅吉
長崎職業紹介所長	畑島好松		有吉九十郎

西彼杵郡高島村長	島久雄	西彼杵郡崎戸町長	近藤要輔
同 高濱村長	本田伊勢松	同 江ノ島村長	一瀬戈一
同 野母村長	三浦源五郎	同 平島村長	永野健次郎
同 脇岬村長	渡部高市	同 瀬戸町長	本田榮松
同 爲石村長	福丸定之	同 松島村長	小鳥居周作
同 川原村長	大宮虎松	同 雪浦村長	福田米夫
同 喜々津村長	山本公之	同 神浦村長	永田三四郎
同 大草村長	富永百太郎	同 黒崎村長	松永次吉
同 伊木力村長	瀧口三一	同 三重村長	安村近太郎
同 時津村長	横山政美	同 式見村長	森留次郎
同 村松村長	關廣瀬	同 福田村長	山田逸記
同 長浦村長	志田清一	東彼杵郡三浦村長	堀口近六
同 龜岳村長	犬塚卓爾	同 鈴田村長	吉崎仁右衛門
同 大串村長	大串盛多	同 大村町長	福田伊五郎
同 瀨川村長	山本鷹次郎	同 萱瀨村長	高瀬喜久次
同 面高村長	吉田寅太郎	同 福重村長	山田竹次郎
同 黒瀨村長	入江市郎	同 千綿村長	尾崎勝吉

東彼杵郡彼杵町長	佐藤九十一	南高來郡土黒村長	伊東徳郎
川棚町長	中村不二男	大正村長	本田文雄
下波佐見村長	高月信吉	守山村長	村山彌藤治
宮村長	秦與	山田村長	西岡穰
折尾瀬村長	吉永武之	愛野村長	中尾英一
早岐町長	口石敬義	小濱町長	佐藤金助
江上村長	志方進	北串山村長	北尾節郎
崎針尾村長	長谷川秀志	南串山村長	久米健治
北高來郡森山村長	片田江駒太郎	加津佐町長	山口牛六
田結村長	小柳松榮	口之津町長	中村金十郎
戸石村長	元永繁雄	南有馬町長	田中末藏
古賀村長	鍛塚郁郎	北有馬村長	柴田義則
深海村長	川内宗八	有家町長	本田秋生
小江村長	武富龜太郎	堂崎村長	坂上與三郎
湯江村長	山崎宜之	布津村長	下田實
江ノ浦村長	松原穆	深江村長	松本源八
南高來郡三會村長	蒲地慈眼	北松浦郡大島村長	大浦隈男

北松浦郡平戸町長	岩井敬太郎	北松浦郡福島村長	山本明
生月町長	増山儀作	鷹島村長	服部格一
中野村長	寺田傳五郎	小佐々村長	濱村四太郎
獅子村長	尾崎秀雄	佐々村長	久家六藏
紐差村長	北大三郎	吉井村長	野村淳
中津良村長	山口長作	世知原町長	片山要
津吉村長	青崎寛重	中里村長	北原永逸
志々伎村長	山口直之助	大野町長	太田早苗
黒島村長	杉山矢之助	皆瀬村長	久保又市
小値賀町長	川口惠吉郎	柚木村長	杉村誠一
平村長	川向勘十郎	南松浦郡福江町長	松尾緑郎
神浦村長	月川綱次郎	奥浦村長	松下太郎
南田平村長	福田多八	崎山村長	小林七郎
田平村長	浦川數之助	本山村長	西野松之助
志佐町長	守山重樹	大濱村長	田中松太郎
調川村長	柴田半治	富江町長	松尾菊馬
今福町長	村本啓一郎	玉之浦町長	藤田諸平

南松浦郡岐宿村長	飯田 泰	壹岐郡石田村長	山口陸左門
久賀島村長	藤山 戈藏	同 初山村長	柴山貞之平
奈留島村長	宿輪 靜磨	下縣郡嚴原町長	若槻長三郎
日ノ島村長	入江 德平	久田村長	長 信樂
濱浦村長	古賀 範之	豆酸村長	原田 通夫
青方村長	寺田 甚吉	佐須村長	齋藤 榮
魚目村長	道津源四郎	雞知村長	依 龜壽
北魚目村長	中元 文平	船越村長	大東仙太郎
奈良尾村長	中島 秀勇	仁位村長	梅野 嘉善
武生水町長	末永 長通	奴加岳村長	阿比留喜與志
渡良村長	三富 瑞衛	上縣郡仁田村長	古藤 優
柳田村長	植村庄十郎	佐須奈村長	山田 薫
鯨伏村長	原 周藏	豐崎村長	修行 清作
勝本町長	吉田 覺太郎	峯村長	阿比留彌左衛門
箱崎村長	立石松三郎	壹岐支廳長	長島 増次郎
那賀村長	秋山 東	長崎縣屬	森 輝雄
田川村長	長島 重治	同 縣屬	小方 勳一

長崎縣屬	白濱 重吉	長崎縣巡查	南 福市
同 縣屬	永田 庸彦	同 築技手	田原 春吉
南松浦支廳長	山口 菊衛	衛生技手	真崎喜代七
長崎縣技手	松本 盛茂	長崎縣衛生主事補	坂上 新藏
同 縣警部	田中 豐吾	防疫獸醫	坂上 新藏
同 縣警部	赤崎 忠義	防疫監吏	野口 清
同 縣警部	富永伊之丞	同 學校營繕技手	加藤 虎壽
同 縣警部	竹下濱之助	同 縣技手	藤野 米夫
同 縣警部	此本 勇	長崎勞働紹介所長	上田 泉
同 縣警部	原 楨清次	長崎縣拓務主事補	大串 清好
同 縣警部	石本 甚助	同 社會事業主事補	奧平 泰之
同 縣警部	辻 四郎	同 農林主事補	龜川 信人
同 縣警部	犬塚 勇	同 農林主事補	松尾 俊二
同 縣警部	米倉鶴太郎	同 農林主事補兼農林技手	坂田 佐八
同 縣警部	國武 忠男	同 農林技手	森 東一郎
同 縣警部	一瀬 前次	同 農林技手	井上 昇
國幣中社諏訪神社禰宜	山本 安藏	同 農林技手	野田 幸吉

長崎縣農林技手	小森繁六	長崎女子師範學校書記	柴田末吉
同 商工技手	山田驥走	長崎幼稚園保母	浦菊代
同 土木技手	右田勝衛	宇久青年學校教諭	島中辰藏
同 道路技手	渡邊儀一	縣社溫泉神社社司	志岐島根
同 同	檀野三太郎	長崎縣屬	藤戶光次
同 土木書記	岸川政夫	同	關次男
長崎縣立對馬中學校教諭	內村直太郎	同	福地力
長崎縣立島原中學校同	吉田惟男	同	柴田正明

二、縣民總代

正五位以下有位者總代	篠原哲十郎	勳四等功四級以下帶動者總代	朝永乾造
同	草野義一	同	永元榮一
同	西 遞次郎	褒章受領者總代	澤山精八郎
同	石田清太郎	同	田代弘藏
勳四等功四級以下帶動者總代	木藤克巳	長崎中學校長	春日重泰
同	佐々野達	佐世保中學校長	堀口太一

長崎高等女學校長	梅田廣治	自治功勞者	白川助太郎
鶴鳴高等女學校長	原田アサ	同	山田甚平
大村實業青年學校長	森永正雄	同	中村長八郎
小佐世保尋常高等小學校長	中尾榮太郎	新聞通信事業功勞者	
勝山尋常高等小學校長	早田隆次	島原每日主筆	平富重
島原第一尋常高等小學校長	林 銑吉	島原新聞社長	清水治代
嚴原尋常高等小學校長	久和清	佐世保軍港新聞總務	北島綱一
福江尋常高等小學校長	松谷源次郎	佐世保日日主筆	興柁菊四郎
長崎盲聾啞學校長	多比良義雄	佐世保新報支配人	森田輝海
佐世保市會議長	篠崎綠吉	長崎民友工場長	花田寅造
島原市會議長	清水作兵衛	長崎日日主筆	大森萬龜太
自治功勞者	本土德衛	佐世保新聞主幹	柳井春男
同	月川熊夫	神職會代表者	
同	山田辰三郎	村社高天神社々掌	水野光太
同	黑板勝澄	縣神職會理事	本田多聞
同	迎顯義	鄉社橫瀨神社々司	
同	萩原太郎治	縣神職會理事	中部悅良
同		警防團代表者	

三菱重工業株式會社社長崎製鋼所長

中村道方

川南工業香燒島造船所運搬工組長

末永沙吉

長崎縣青年學校教員養成所長

檀上謙爾

長崎縣開成學園長

橫田三之助

縣民代表

稻松志可太

同

平房子

同

早水金二郎

同

白戶喜美子

同

古賀次八

同

關山嘉平

同

末次常太郎

同

鶴田與茂市

同

楠本源市

同

香月廣次

同

松園良三

同

正五位以下有位者總代

同

青年學校長總代

同

所得稅審查委員

同

長崎商工會議所會頭

同

紀元二千六百年奉祝會評議員

同

佐世保商工會議所會頭

同

北村德太郎

同

堀池鎮雄

同

佐藤清吉

同

今泉壽吉郎

正五位以下有位者總代

同

同

同

動四等以下帶勤者總代

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

長谷川義夫
阿比留國次郎
吉村德一
平原善吉
藤崎三九郎
時枝友作
松本松之丞
藤田敏治
梶藤二
岩本健一郎
今泉壽吉郎
神宮長見
佐藤清吉
堀池鎮雄
高橋剛男
山田應治
北村德太郎

三、各省關係分

長崎機關區長 三谷熊太郎

長崎保線區長 石川袈裟次郎

長崎縣畜產組合長 比江島師孝

長崎稅關長 青木正映

長崎稅關監查部長 川上親文

同 第二課長 片伯部竹次郎

同 會計課長 福井六郎

佐世保稅務署長 池邊恰熊

平戶稅務署長 安里昌輝

福岡地方專賣局長 加藤宣次郎

福岡酒精工場長 坂上善右衛門

福岡地方專賣局島原出張所長 多田吉彌

島原市古町二、二七二 德永俊雄

長崎移住致養所醫官 小野恭三

陸軍少將 安原瀧藏

熊本遞信局海事部長 大河原雄吉

長崎遞信出張所長 內村八郎

長崎郵便局電話課長 荒木馨

湯江郵便局長 水野俊雄

長崎無線電信局長 松本重雄

佐世保郵便局電信課長 喜多進鷹

長崎電信局第一通信課長 林俊之

長崎郵便局庶務課長 長島英雄

津吉郵便局長 柿本紋次郎

西彼杵郡神浦郵便局通信手 栗戶虎雄

島原郵便局遞信手 關口義平

遞信省工務局長 小笠原丸船長

長崎港定繫小笠原丸機關長 江副孝夫

同 東洋丸船長 鶴見嘉一

同 小笠原丸船長 淺田守智

同 東洋丸遞信技師

長崎市西上町一二	三浦順太郎	長崎控訴院書記長	古川惠助
長崎控訴院長	草野豹一郎	長崎控訴院檢事局書記長	豐田專次
長崎地方裁判所長	岩松玄十	長崎市今町五五	堤牧太
長崎地方裁判所檢事正	白井清左門	長崎控訴院書記	田中秀吉
長崎控訴院部長	岩淵彰郎	長崎控訴院檢事局書記	佐藤邦治
同	本郷雅廣	長崎地方裁判所書記長	高以來壽一郎
同	武富義雄	同 檢事局書記長	藤井庄次郎
同	藤山富一	長崎刑務所作業課長	榮田彌三
長崎控訴院判事	白石要	長崎市馬町四〇	吉村安次郎
長崎控訴院檢事	松永志逸	佐世保區裁判所監督判事	關成章
同	松井善太郎	長崎刑務所作業技師	前田靜雄
長崎區裁判所監督判事	大野初熊	同 所長	牛島麟
長崎地方裁判所部長	渡邊嘉兵衛	長崎市夫婦川町四〇	男爵 西嶋助繼
武生水區裁判所判事	田中小四郎	北松浦郡中里村	栖林林二郎
嚴原區裁判所判事	馬場源太郎	長崎醫科大學學長	角尾晉
佐世保區裁判所檢事	合志淵藏	同 教授	清水由隆
長崎地方裁判所檢事	市川季熊	同	平井金三郎

長崎醫科大學教授	竹内清	同臨時附屬醫學專門部教授	宮川孝夫
同	古屋野宏平	長崎高等商業學校教授	伊東勇太郎
同	高瀬清	同	伏見義夫
長崎高等商業學校長	只見徹	同	勝呂弘
長崎醫科大學教授	高木純五郎	同	松野賢吾
同	影浦尙視	同 事務官	武田歲太
同	池田和人	活水女子專門學校長	岡部珪藏
同	林雄造	長崎醫科大學附屬醫院	森田健吾
同	大倉東一	傷痍軍人小濱温泉療養所長	宮城重信
同	淺野金兵衛	長崎市新中川町五四	平田周二
長崎高等商業學校教授	國友鼎	海軍 大佐	一ノ瀬英太
長崎醫科大學名譽教授	武藤長藏	佐世保京町郵便局長	海軍少佐 藤木利三郎
長崎高等商業學校講師	目良勝真	佐世保水交社々監	海軍少佐 福迫太市
壹岐郡武生水町三九	北村包彦	西海中學校長	海軍少將 菅沼周次郎
長崎醫科大學教授	辻村秀夫	佐世保市太田町二ノ六	豐島精太郎
同	植田高三		
同 藥學專門部教授	小野直治		
同 臨時附屬醫學專門部教授			

附記

右參列者ハ本縣代表並ニ縣ニ於テ輸送ヲ斡旋シタル各省關係者ナリ

三三

感想錄

紀元二千六百年式典に參列して

長崎縣知事 平

敏

孝

畏くも 天皇陛下皇后陛下の行幸行啓を仰ぎ奉り、光輝ある紀元二千六百年奉祝の式典を舉行せらるる一億蒼生待望のこの日、瑞雲棚引く宮城の外苑、二重橋前廣場の晴れの式場には代表五萬有餘胸とどろかせつつ相集ひ、宇内の歡喜と無限の感激を籠めて聖紀を壽ぎまつる曠古の盛儀は、いと嚴かに肅然と舉行せられ、皇國無窮の隆昌を祈念するこの盛典に列するの光榮に浴しましたことは、只々恐懼感激の極みでありました。

君が代は千代に八千代にの國歌の奉唱は式場に溢れ、近衛首相の感激の壽詞は高らかに奏上せられ、莊嚴なる紀元二千六百年頌歌の調べ、餘韻なほただよふ中に近衛首相發聲の聖壽萬歲に和して諸員心から壽ぎ奉る齊唱は、天地に轟きわたり、萬世搖ぐことなき國体の精華を發揚せる悠久二千六百年、皇國日本の姿をまのあたりに見る、この盛典に參列致しまして、皇國臣民の無上の榮譽と至大の慶福とを、身に泌みて痛感致しました次第であります。

吾等臣民は、この湧き出づる宇内の歡喜と新たなる無限の感激を以て、只管聖旨を奉体し、粉骨碎身聖業翼賛の至誠を致し、以て肇國の大義を世界に宣揚して、八紘を一字たらしめんことを夙夜御軫念あらせられ給ふ宏大無邊の聖慮に副ひ奉り、皇祖皇宗の御神靈に對へ奉らなければならぬと衷心より御誓ひ申し上げる次第であります。

長崎税關長 青木正映

曠古の盛典に參列するの光榮に浴し、感激寔に深いものがあります。あの日は兩日共天氣晴朗で風もなく實に麗かなよい日でありました。國民の代表五萬餘の人々が、水を打つた様に靜肅に頭を下げて、御勅語を拜し、又 兩陛下の出御入御を御迎送申上げた瞬間の心持は何とも説明致し兼ねます。殊に御勅語を賜はる 天皇陛下のお力強い御聲を遙に耳に致しました時と、君が代奉唱、萬歲三唱の際は只々萬感胸に迫つて感涙頬を流れるのを如何ともする事が出来ませんでした。「嗚呼、自分は日本人に生れてよかつた。有難かつた」の一念で胸が一ぱいでした。家族や親族知己に祝典の模様を傳へ、又頂戴した品々を披露しましたが、到底私の心持を充分傳へる事が出来ませんでした。そして自分一人がこの光榮に沿した事が勿体ない程に感じて居ります。

式典參列の爲、往復共指定列車に便乗致しましたが、參列者だけの専用車ですから、車内の氣分も申分ありませんでした。意義深い旅行が楽しく出来ましたので、祝典の印象が一層嚴肅味と有難

さを増した感じが致します。殊に食事其他に付、縣の掛りの方の行届いた御世話に一層愉快な旅行が出来まして感謝に堪へません。

今回の御催は單なる祝典でなく、此の非常時下に特に國民の國家意識を深めしめる事を目的とした遠大な意圖を藏するものと存じます。従つて國民の代表として選ばれ此の光榮に浴した以上、私は此の非常時に當り、人一倍職域御奉公を念とし、國民同胞に率先して皇國の爲微力を盡さねばならぬと深く覺悟致した次第であります。

長崎縣醫師會代表 淺田新太郎

神武天皇橿原の宮に即位し給ひてより、悠久茲に二千六百年、舉國此の佳き年を壽ぐ曠古の式典に參列するの光榮を荷ひましたことは、誠に有難き極みでありまして、家門の譽れ之に過ぎるものはなく、又此の榮譽は永く子々孫々迄傳へ度いと存じて居る次第であります。

「式典當日は天氣好かれかし」とは一億同胞の齊しく念じてゐるところであります。十日、十一日の兩日共、まこと陽光燦々たる行幸日和で、ここにも神國日本の神助、天佑と云ふものが感じられ、有難く思つたことであります。式場は實に森嚴にして清淨の氣が滿ち渡つてゐました。大内山の松の緑を背景にして、嚴かに、端然と、おほらかに、浮び出でたるが如き寢殿造りの式殿、白く染め抜かれた菊花の御紋章も鮮かな紫色の幔幕、階段の左右に戈の光り燦然と立竝ぶ旛、さうし

て秋晴の空には、うらら日を双翼に受けた鳶が金色に輝きつつ、或は高く或は低く舞ひ飛んでゐました。咳きの聲一つ聞えない太古の如き静寂のひととき、やがて静かに湧き起る君が代の吹奏裡に兩陛下出御遊ばされたのでありますが、龍顔一入御麗しく拜せられ、御稜威は正に平伏すばかり、まこと崇高の氣に打たれたのであります。現つ御神の大前に於て君が代を奉唱致しました時、又玉座に向つて双手を舉げて、天にも届けよとばかり、萬歳を奉唱し奉つた時は、自ら湧き起る感激に胸迫り、眼頭の熱くなつて來るのを如何ともすることが出来ませんでした。更に長くも陛下の朗々たる玉音を拜聴致しました時は、ただひたぶるに有難く、嚴肅の餘、歡喜の涙胸に溢れ、「御民我れ……」の思ひ、ひしくと湧き起るのを覺えたのであります。十一日の奉祝會には重ねて龍顔を拜し奉ることを得、忝くも、玉座に御箸を舉げさせ給ふ御有様を拜しつゝ、奉祝の酒饌副饌を戴き、御酒の味も亦格別にて、日本臣民に生れたる有難さ、誇らしさを愈々深く感じました。莊重典雅な舞、雄渾華麗なる陸海軍樂隊の吹奏樂、全國男女學生代表の奉祝歌「紀元二千六百年」の力強き齊唱等、凡てが印象的で、私共に取つては忘れ得ないものであります。

今日の聖典に參列して、まのあたり盛儀を見奉り、更に思ひを二千六百年の昔に馳せ、一系無窮の寶祚を思ひ、隆んなるかな皇運、偉大なるかな神國日本と云ふ感じを、今更ながら深く致しました。さうして此のうまし國に生を享けたることの幸福をしみじみと感じたのであります。參列せる多數外國の使臣達は、金匱無缺の我が國体の縮圖、繪巻物とも云ふべき此の感激的情景を如何に見、如何に感じたことでありませうか。

時局益々多難の秋、私共は、此の感激、此の喜びを胸にして、一層奉公の誠を致し、以て聖旨に應へ奉らんと、愈々決意を堅めた次第であります。

感 激 譜

郷軍有功章受領者代表 朝 鍋 信 一

草莽の微臣圖らずも聖紀の祝典に列するの光榮に浴し、生ける驗しありと榮ゆる御世を壽ぎ奉り感激の極み言ふ所を知らざる次第である。式典、奉祝會を連ねて二日間拭ふが如き秋晴、大内山の翠一きは色濃く瑞雲棚引き亘り、日本人ならでは味ひ得ざる有難さに、我人共に胸躍る感に興奮したが、集合場に於ける統制振りは我長崎縣が第一であつた事はわれ等の誇り、新体制の具現として愉快なる極みである。式典の莊嚴は云ふも更なり、奉祝會に於ける高松宮殿下の「臣宣仁」と仰せられたる御言葉、さながらに神の御姿と見奉る御舉止、御心よりほとばしる萬歳の御發聲、今にして追憶するも感激の涙溢るゝを禁じ得ぬは參列の人々誰しもが思を等しうする所であらう。

自分は又式典祝典終了後の十三日郷軍代表者として宮中に於て列立拜謁の光榮に浴し、重々の榮譽に恐懼して退京した。一君萬民臣民翼賛を如實に顯現された此の祝典、選まれて一億の臣民中より此の盛儀に列したる光榮、子々孫々に傳ふべき語り草とし、陛下の股肱たるの本分を全ふすべく私に誓ひ、謹んで竹の園生の彌榮を祈り奉る。

曠古の祝典に参列して

下縣郡雞鳴尋常高等小學校長 阿比留國次郎

二八

昭和十五年九月二十日書留の速達郵便が届きました。開封致しますと、紀元二千六百年式典並奉祝會の御案内であります。一億國民の代表として選ばれる五萬餘の祝典参列者の中に、數ならぬ身で光榮に浴する事とは、思ひも寄らぬ私で御座いますから、其の瞬間呆然として只々感激で一杯で御座いました。暫くして我に返り、指示に従つて、参列手續を完了致しましたが、關係書類の到着は鶴首して待たれたので御座います。其の後幾多の學校行事は次から次に終了して、十月下旬となりましたけれども書類は到着致しません。或は手續に不備の點があり、選に洩れたのではないかと案じながら、他の方面を調べますと、誰もが待つてゐるとの事でありました。十月二十七日、本校體育大會開催中に、富田祝典委員長閣下からの書留郵便が届きました。待ちに待つた祝典關係書類であります。續いて本縣知事官房秘書課長殿からも輸送其他關係書類が届けられました。十一月八日午後七時感激列車を博多驛で待ちますと、やがて列車は到着致しました。祝典参列者専用列車の第一車から第七車までが本縣分でありまして、私は其の第五車で東京に送られる事になりました。各驛々では「此の列車は祝典参列者専用車でありますから、一般の方は乗車出来ません」と擴聲され、ホームに黒山をなす客は皆目迎目送する、車中での役員各位の御配慮に感謝する。感謝感激の

渦、所謂感激列車は九日午後七時三十五分東京驛に着き、一同は帝都の人となつたのであります。驛には本縣選出代議士各位を始め、對馬會の方々、多數のお迎へを受け、感激の裡に各宿舍に案内され、蓋轂の下で安き眠りに就いたのであります。

明くれば十一月十日、式典の日であります。齋戒沐浴して宮城を拜し、支度して、日比谷公園内の集會所に達しますと、既に空前の盛観であります。各府縣の参列者が隊伍肅々として宮城外苑の式場に繰込む途上にも、今日の盛儀を拜觀せんとして、雲集せる人垣は歩道の一方を埋め盡して居ります。やがて式場に到着致しましたが、長崎縣は玉座に向つて左側中央、大分縣の後方、宮崎縣と相並んで着席致しました。見渡せば、さしも廣大なる宮城外苑の整備され、然も簡素にして莊重なる裝飾、宮城の濃き松の緑を背景とした、式殿の御建築、五萬餘の地方参列者と奉唱學生を以て埋められた感激に満ちた式場、天地も感應しますかと思はれる好天氣で、一點の雲もなく、瑞氣四海を壓し、肅然たる光景には、言ひ知れぬ感激、一入身に迫るものがあつたので御座います。開式を宣せられますと、感激に満ちた式場は愈々靜肅、總員起立、「君が代」奏樂の裡に、仰ぎ見る式殿に御軍服姿の 聖上陛下は 皇后陛下と御共に御出まし、最敬禮を以てお迎へ申上げましたが、天照皇大神の御出現を思浮べ、神武天皇の御即位當時の莊嚴さが忍ばれまして、辱けなく勿體ない極みで、胸は一杯になり、「君が代」奉唱の際は身を忘れ、感激の涙が溢れたので御座いました。千載一遇の盛儀に列し、龍顔を拜し奉り、陛下の御勅語、玉の御聲を親しく拜して恐懼措く處を知らず、只々頭の下る許りで御座いました。近衛内閣總理大臣閣下の壽詞奏上の際も、言々

句々、ひし／＼と身に迫るものがあつたので御座います。陛下の御前で、聖壽の萬歳を奉唱致しました、あの瞬間の心持は筆舌のよく盡す事の出来ない感激で御座いました。

翌十一日は奉祝會の日であります。定刻外苑の會場に向ひましたが、途上拜觀者の人波はいやが上にも増し、盛觀を極めて居りました。此の日も好天氣でありましたが、やがて大内山の上空に瑞雲たなびき、鳶が悠々輪を畫いて、盛儀を壽ぐ光榮は譬ふるものもありませんでした。此の日も奉祝詞に續いて、勅語を賜はり恐懼感激したので御座いますが、高松宮殿下が「臣宣仁」と奉祝文を奉讀遊ばされた時は、總員期せずして頭が下り、涙を新に浮べたので御座います。開宴に移りましてから、兩陛下の御前で御饗宴を賜ひました時の感激、又學生の奉祝歌齊唱の時、絶えず其の方に御會釋を賜はつた事など思ひ浮べまして、かゝる盛儀は前古未聞の事で御座いますから、兩陛下には代表六萬の民草を親しくみそなはし、お喜ばしさ如何ばかりであらせられるかと恐察し、只々涙のせき出づるを禁じ得ませんでした。

私は此の有りがたい聖代に生れ合はせ、この世紀の國家的盛典に列し得た、身の幸福を思ふ時、古歌其の儘に、陛下の御前に一身を捧げ奉らんと覺悟を新たに強くしたので御座いました。私はこの光榮の日を忘れず、匪躬の誠を致し、聖旨に副ひ奉らん事に黽め、夙夜淬礪率先躬行して、師表たるの範を示し、以て誘掖啓導の實を舉げん事を期するもので御座います。最後に、この光榮に浴すべく、私をお選び下さつた方々、並に中央に於て、又地方に於て、參列者の爲に、何くれ心身を勞せられた諸役の方々、及び帝都にて、東京始まつての人出だと言はれるあの混雜に、些の故

障なかれかしと、警護下さつた警官各位の御心勞に對し、満腔の謝意を表したいと思ひます。

紀元二千六百年式典參列記念録

尼崎 政太郎

謹で案するに、本年は神武天皇御即位紀元二千六百年に相當、皇統無窮の皇祖を仰ぎ奉る民草の歡喜充ち滿つ紀元の佳節に、優渥なる大詔渙發、臣民翼贊の大道を昭示し給ふ、恐懼感激に堪へず。此昭代に生を享くる者の幸福何ものか之に加かん。會々八月中頃、相浦警察署經由、縣廳より電話あり。衛生功勞者として、縣民總代として紀元二千六百年式典に參列せしめらるゝが、參列出來るかとの御尋に、夢かとはかり驚喜、有難き恩命に接す。萬難を排し、誓て參列致す旨答へ置きしに、九月中頃、近衛公爵より内閣總理大臣と奉祝會長の名を以て式典に參列すべく案内に接し、愈々曠古の盛儀に參列することを得るは身に餘る光榮なりと、一家一門歡喜して晴の日を待つ。次で祝典委員長より、式次第書參列者心得乗車證參入證等の送附あり。更に縣知事官房秘書課より、臨時列車乗車其他萬般に涉り詳細指示を受け、準備全く整ひたり。

十一月八日出發、肥前山口驛に於て長崎發臨時列車に移乗、此に縣參列者一同と共に互に其の光榮を語り合つ、翌九日夕刻東京驛に安着す。

明くれば十一月十日式典の當日は天氣彌が上にも晴朗、所定の時刻、日比谷公園市政會館前に集

合、喜びの挨拶を交換、参列記章を受け、一團となりて式場に向ふ。東入口馬場先門より参入、式場附近に至り、一同先づ宮城を奉拜し、肅々として式場所定の位置に参入着席す。見渡す限り莊嚴極りなし。午前十一時前囀鳴たる喇叭の聲、綠濃き大内山に廻す。スワ 兩陛下出御よと威儀を正す。間もなく 兩陛下には儀仗隊の奉迎を受けさせられつつ便殿に入御。十一時十分式場に臨御。

仰ぎ拜するだに神々しく勿体なさを覺ゆるのみ。満場水を打たる如き靜肅さ、近衛首相恭しく御前に参進、式典開始の旨を奏上、 兩陛下には立御、諸員の最敬禮を受けさせられ、一同君が代を奉唱す。 兩陛下の御満悦は申すも賢し、参列者一同の感激筆舌の盡す所にあらず。近衛首相更に参進、一億國民の代表として壽詞を奏し奉る。其莊重なる一言一語マイクを通じ、参列員は元より、全國に放送せらる。畏くも 天皇陛下には玉音朗々優渥なる勅語を賜ふ。陛下の御前に親しく御聲を拜す、有難しとも勿体なしとも、申上ぐる言葉なし。近衛首相三度御前に参進、恭しく天皇陛下の萬歳を奉唱、全参列員天地も搖げとばかり三唱し奉つた。親しく 陛下の御前に萬歳を奉唱することは夢の如く尊き限りである。斯くて諸員の最敬禮を受けさせられ、首相式典終了の旨を奏上、 兩陛下には便殿に入御、午前十一時半諸員奉送裡に式場發還御あらせられたり。一同は各宮殿下、大官等退場後各縣毎に整然退出、集合所にて明日の心得を受け、各自散會したり、時に午後零時すぎ。今日一日の大役を了し、歡喜に充ちつつ宿に歸へる。

十一月十一日、今日は又昨日にまさる上天氣、愈々勇み立ち、所定の集合所に集り、記念章を受く。長崎市選出西岡代議士の好意により、長崎縣参列者全員市政會館屋外階段に整列、記念撮影を

爲し、式場に向ふ、途次宮城を奉拜し、式場に入る。零時すぎ入場を終り、襟を正して開式を待つ。一時五十分宮城内に起る喇叭の音を聴く。 兩陛下出御と拜し奉る。二時五分 兩陛下式場玉座に着かせ給ふ。近衛會長御前に参進、開式の旨を奏上、此處に晴れやかな慶祝の一大盛儀は始めらるるのである。 兩陛下には立御、諸員の最敬禮を受けさせらる。君が代を奉唱す。次いで總裁宮殿下御代理高松宮殿下には 陛下の御前に御参進、奉祝詞を奏上、特に臣宣仁謹みて言すと結ばせ給ひし刹那の其の畏き御聲はマイクを通じて場内隈なく、又全國に放送せらる、参列諸員は申すも畏し、全國民の感激は愈々高潮したことを思う。次に外國使臣首席米國大使の奉祝詞奏上、終つて陛下には畏くも亦た勅語を下し賜ふ。玉音朗々拜するもの感激、目頭の熱するを覺ゆ。二日間に涉り、勅語を拜する五萬五千の参列員誰れか 皇恩の廣大無邊なるに感奮興起せざるものあらん。尊しとも賢しとも申しやうなき有難さ、頭の下るを覺ゆるのみ。次いで饗宴開始、陽光燦たる野天の饗宴は總べて野戰料理の箱詰め、外に畏くも箱入御記念品あり、拜すれば 兩陛下の御前にも亦た同様の御膳部が用意せられある。今こそ祝へ紀元二千六百年、畏くも 兩陛下には参列諸員と共に御盃を舉げさせ給う。さりととも 聖恩の辱けなきに更に感激に咽びつつ祝し奉る。此間中央階下の舞樂台上には、奉祝舞樂の演舞始り、金銀色燦爛たり。續いて陸海軍軍樂隊の奉祝音樂演奏、全國學生生徒代表三千名の奉祝國民歌紀元二千六百年等力強く奉唱。終つて總裁宮御代理高松宮殿下の御發聲にて参列諸員一同 天壽の萬歳を三唱し奉る。近衛會長御前に参進、奉祝會終了の旨を奏上。 兩陛下便殿に入御、午後三時すぎ諸員奉送裡に會場發還御あらせられたり。

此處に二日間に渉る曠古の盛儀は滞りなく終了。參列諸員は暫し身動きだにするものなく、御後を奉拜するのみ、嗚呼有難き限りにぞある。拜領の御品と共に永く子々孫々に傳へ、以て絶好の記念となさん。終りに往復臨時列車に、集合所に、式場に、各般に渉り具に御世話下されし縣吏員各位の勞を謹謝し、筆を擱く。

天 本 愛 儀

世界に於て唯一無二の國體を有する大日本帝國は、今年紀元二千六百年を迎へて、宮城外苑の大廣場に盛大なる記念式典を擧げられました。不肖何の幸ぞや、生を聖代に享けて而かも此の祝典に參列するの光榮に浴しました。

清楚なる式場に敬虔なる雰圍氣漲り、畏くも 兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉りました時は、全く莊嚴そのもので只々恐懼感激が胸に迫り、何とも申し上げやうはありませんでした。

玉音朗々たる勅語を拜するに及びまして 天皇陛下におかせられましたは孝を樹つるを以て國訓の大綱とし給ひ、常に其の範を垂示し給ふものなることを拜察申し上げ、誠にありがたく感極まり熱涙の滂沱たるを禁じ得ませんでした。

遠き神代に、神の訓へ給へる寶祚の天壤と窮りなき、國運の隆昌限りなきも誠に故あることでありまして、畏しとも畏き極みであります。



謹みて聖壽の萬歳を奉唱した次第であります。

式場を退いて熟々自己の既往に於ける業績を回顧致しまするに、明治十八年濟世利民を志して天本六神丸を發售し、明治三十九年社會事業を創設し、昭和七年大日本忠孝會を結成し、本年は恰も皇紀二千六百年の輝かしき年を迎へ得ましたれば、之を記念致しまして庶民住宅を建設し、又母子寮を開設することに致しました處何れも夫々緒に着き、次第に發展の曙光を認むることとなりました。とはいへ皇恩の宏大無邊なるに對し奉りましては大海の一滴にも及び申さず誠に恐懼の至りであります。

併しながら今後とも假令微力の者とはいへ、赤誠を以て天與の自己の職域を守り、一人でも多く社會大衆の爲めに利便を興ふことを得ましたならば、或は皇恩の萬分の一に報い奉る所以ではあるまいかと、倍々社會事業の爲め粉骨碎身の誠を盡すべきことをお誓ひ致しました次第であります。

聖典參列感想

雨 森 一 郎

今回圖らずも皇紀二千六百年の御盛典に參列の光榮を荷ひ、畏くも咫尺の間に 天顔を拜し奉り又親しく玉音を洩れ承り、剩へ數々の御殊遇を辱う致しましたことは、草莽の身分として眞に恐懼感激に堪へない次第でありました。

十一月十日、昨日迄の雨空が一點の雲もなく霽れ渡り、宮城外苑に設けられた廣大森嚴なる御式場は寢殿造りの御殿を正面に菊花の薫り旂旗の閃き彌が上にも神々しく、眼近に仰ぐ大内山の翠黛と共に茲にも神國日本の尊き姿を思ひ合はされたのでありました。

かくて皇族各宮殿下妃殿下を始め奉り、文武百官列國使臣並に國民各界各層の代表無慮五萬數千名の參列者が、夫々所定の席に着き、敬虔靜肅の裡に御親臨を御待ち申上げたのでありますが、一時少し過ぎ、天皇皇后兩陛下の御英姿を正面玉座に拜し申上げた一瞬、言語に盡し難い謹嚴莊重の感にうたれ、御前に席を汚し奉ることの恐れ多い感を深くしたのであります。次で近衛首相が恭しく壽詞を奏上されましたが、首相の一言一句は悉く我が國民が皇室に對し奉る忠誠の迸りでありまして皇國に生を享けたる者のみが識る感激であります。首相の壽詞に對し、天皇陛下には畏くも御勅語を賜ひ百僚衆庶と慶祝の典を擧ぐることを嘉尚せられ有難き優詔を拜したのであります。聖慮深遠唯々皇恩の萬一に酬い奉らんとの一念あるのみでありました。然も此の時初めて、大御言を拜し奉りまして私としては生涯忘れることの出来ない肝銘であります。斯くて首相の發聲に和して、陛下の萬歳を奉唱致しましたが、此の時ばかりは世界に轟けとばかり腹の底の底から興奮と熱誠の大聲を張り上げたのであります。

翌十一日、前日に引續き日本晴れ、新に模様替された祝賀會場は、一見和やかな雰圍氣を感じたのであります。華美驕奢などといふ情景はどこにも無く、只管雄渾清楚の御旨を拜しまして一同恐懼致した次第であります。然して今日も亦、兩陛下お揃ひにて會場に臨御あらせられ、再度、龍

顔を拜し奉るの光榮に浴し、又畏くも御僕並に副僕を戴き、更に御記念品として列聖珠藻、聖徳餘光の二書帙を拜受し、重ね重ねの御聖恩唯々有難き極みでありました。

然して此の日は畏くも、高松宮宣仁親王殿下が、奉祝會總裁宮殿下の御名代として祝辭を奏上遊ばされましたが、金玉の御聲の中に「臣宣仁」と仰せ出されし御言葉を拜し、今更ながら一同感涙に咽び、熟々一君萬民の我が國體の尊嚴さを感じたのであります。殿下の御聲は電波に乗り普天率土の我が同胞の耳朵に如何ばかり強き反響を與へ下さつたことでありませう。思へば神武建國の當初より萬世永劫に亘る皇國の眞の姿が、今茲二千六百年の大典に際し、皇弟の宮の御言葉により、儼然と大義名分を拜承し奉りましたことは、返す返すも有難いことでありました。更に申すも畏き極みながら、至尊の御身を以て參會者一同と俱に御機嫌麗しく御晝餐の御箸を御取り遊ばされました大御心の有難さであります。義は君臣にして情は父子の如しといふ御仁慈をまぎ／＼眼のあたり拜し奉りて感銘殊の外でありました。

また高松宮殿下の御發聲にて、陛下の萬歳を三唱致しました時は、流石に光榮と感激に身も震え聲も震え、歡びの涙を禁ずることが出来なかつたのであります。

さて此の十日十一日の兩日に亘り、諸外國の大公使を始め盟邦の國民も多數光榮に浴して居たのであります。夫等外人の眼に耳に、我が大日本帝國の現實の姿が如何様に映つた事でありませうか。今や聖戰四年、一視同仁の御聖徳を以て、大東亞共榮圈の確立に、八紘一字の皇謨御達成に、振古未曾有の大聖績を顯現遊ばされ、萬邦具さに御稜威を景仰する今日此の時、恰も此の大盛典に

際會し、一億一心覺悟を新にして天壤無窮の皇運を扶翼し奉らんとすることは、臣下として無上の光榮であり感激であり、萬邦に對し大いなる誇をさへ禁すること出来ません。

み民われ生けるしるしあり天地の

榮ゆる時にあへらく思へは

古歌の意は萬古を貫く我が國民の感激でありませうが、昭和聖代の民草こそ一層其の感を深くするものであります。

不肖衰朽の身を以て無窮の恩澤に浴し、曩には戰歿した四男正のため長くも靖國社頭に於て御親拜の行幸を拜し、今又許されて今次の盛典に列り、二女幸子亦奉祝唱歌隊員の引率者として光榮に浴し、一家の面目此の上もなき次第であります。

茲に謹んで聖恩の辱きを拜謝し、只管

聖壽の萬歳と、皇室の彌榮とをお禱り申上げ、及ばすながら老骨に鞭打ち、子孫を戒めて滅私奉公臣道實踐に萬全を期し度い念願であります。

島原郵便局 粟 戸 虎 雄

私は紀元二千六百年の記念奉祝式典並に奉祝會に參列の光榮に浴し、今更ながら、皇國に生れた幸福と其の有りがたさに感極まつて云ふべき言葉を知らず、其の忝なさは永遠に胸底に銘記し、寸

時も忘るることの出来ない感激にうたれて居るものであります。

そもそも國號日本を思ふとき、太陽を國旗となす信念を省察するとき、光輝ある我帝國々体の骨子は、我等の尊嚴極まりなき皇室の御系統が眞に天壤無窮にましまして、國家が 天皇の御爲めに存する日本國体なることを認識し、一秒いければ一秒、一日生れば一日、心を大君に盡し奉り、即ち足場の防衛は 天皇の御爲めにして、國防の本義は實に 天皇御守護に存することを思ひ、天皇陛下萬歳を日夜自己生活に具現し奉行し、聖慮に副ひ奉り、八紘一字の大理想實現に微力のあらむ限りを盡し、身を慎み軌道を踏み、脱線的行爲を戒め、一意専心皇室に對し奉り、忠勤を勵まねばならぬと堅く誓ふものであります。

西彼杵郡蚊燒村長 有 吉 九 十 郎

曠古の聖儀に當りて、思ひ設けぬ御召の光榮に浴し、出征軍人の門出の如く内祝して郷里を發す。其の間、長き旅路の疲れをも知らず、只々聖儀を想像して東京に着く。

十一月十日、此の日や天晴れ、氣麗らかに、昨日の氣遣はれし天候に引き替へ、一點の雲も無き快晴。大内山の翠の樹々に群れ立つ小禽も、陽光を浴びて今日の佳き日を壽ぐものゝ如し。五萬五千有餘の參列者は肅として聲なく。愈々 兩陛下の臨御を仰ぎて開式せらる。總理大臣の壽詞に對して、玉音朗々、有り難き勅語を賜はりし一瞬、血潮高鳴り、只々涙こぼるゝのみ。而して、我身

にして我身に非ざるが如き、言ふ能はざる感に打たる。

又、翌日の奉祝會に於ては、御饌を賜ひ、臣下と共に杯を傾けさせ、喜びを共にし給ふ。その聖恩の無邊なるに感泣し、天地の榮ゆる時に會ひたる身の光榮に感激す。

有り難き賜饌は之を家苞にして家人郷黨に分ち、以て、公私生活の中に感激を新にし、部落常會其の他の會合ある毎に聖恩の宏大を傳へて、幾度か感涙に咽ぶ。

今や非常の世局に當り、大政翼賛臣道實踐の歩を進めつゝあるの秋に際し、一億一心、滅私奉公公益優先等は、只、皇國民たるの無言の感激の中に實現せらるべきものなるを深く省み、公務に携はりて國家總力の一部に與る光榮に感謝しつゝ、老を忘れて、奉公に迫力を加へ、窮みなき皇室の萬歳を祈るのみなり。

二千六百年のことほぎに

召されし我は生けるしるしあり

大君をおろかみまつる今日の日の

幸にうれしき涙こほるゝ

大みことかしこみまつり老の身も

つくささらめや常ならぬ秋

君と臣豊御酒酌みて國祝ふ

外國人も仰き見るらむ

所 感

平戸 稅務署長 安 里 昌 輝

開闢以來國体に渝りなく、萬世一系の 天皇を奉戴し、國基搖ぎなく、國運隆昌の一途を辿つて茲に神武天皇御即位紀元二千六百年を迎へ、一億民の無限の歡喜と感激を表現する曠古の式典及奉祝會に參列し、親しく 兩陛下の臨御を仰ぎ、萬歳を奉唱し、剩へ優詔を拜し得た事は、洵に一生一代の光榮であり、之れ以上の感激はありませぬ。

殊に兩日とも、實に清澄快晴な奉祝日和であつた事は、御聖徳が天にも通じたのだと深い感銘を受けました。

五萬有餘の全國代表者肅として咳一つ聞えず、あの嚴肅の中に眞に日本の姿を感得し、我が國体の尊さを体認したのであります。

勅語を拜したあの瞬間並に國歌齊唱、萬歳奉唱及近衛首相の壽詞奏上の時の感激は全く胸一杯でありました。今も尙當時の光景は眼前に彷彿し胸の躍るのを覚えます。

思ふに、我が國の如く肇國以來萬世一系の 天皇を奉戴し、世界に冠絶せる國体の精華を發揚し悠久なる歴史を持ち、而かも斯の如き國運の隆昌を致したる國は世界廣しと雖も他に類例を見ない所である事は、私が申す迄もないのであります。舊き國が次第に理想を失ひ保守退嬰に陥ると共に

衰微を來し、之に代つて、新しい國が積極進取の潑刺たる生氣を以て擡頭することは實に歴史の示す興亡の鐵則であります。然るに我國に於てのみ歴史は極めて古く而かも常に生活力が若々しく旺盛、あると云ふ事實を見るのは、抑々何が故であるかと考へて見ますと、恐れ多い事ながら、歴代の天皇が天地の公道に基いて大政を行はせられた事が國史に顯はれた我國の斷えざる向上發展の根本原理が存するものと拜察するのであります。

天地の公道は畢竟萬物をして各々其處を得しめると云ふことでありまして、之を國內の關係に就いて云へば、政正しくして國民生活を安定し、社會正義を確立し、億兆各々其分に應じて皇運を扶翼し奉り、私を捨て、公に奉ずる事に歸着するものと考へます。又之を國際關係に當て嵌めますれば、萬邦協和共存共榮の大精神の下に、眞に國際正義、正しい意味に於ける世界平和の確立に力を致すと云ふことに歸着すると思ふのであります。此の廣大無邊なる仁愛の御精神こそ歴代皇祖皇宗の御遺訓として紹述し給ふ統治の根本であり、肇國以來我國史を一貫する八紘一宇の天業を恢弘するの基礎であると拜察する次第であります。而して萬物をして其の處を得しめ給ふ仁愛の御精神を奉戴致しまして、之を全うするが爲めに、全國民が其地位其職業の如何を問はず、擧つて天業を翼賛し奉る事が所謂萬民輔翼であると思ひます。天地の公道に基いて統治し給ふ大御心が臣民の心に反映して、自らなる渴仰隨順の念を湧き出さしめ、其結果、萬民が聖旨を奉体し、之を徹底せしめる事に努めざるを得ない様になるのであります。之が萬民輔翼に外ならぬと思ひます。この萬民輔翼を基礎とする所に、我國政治の要諦が存するものと存じます。

我國史の展開の跡を顧みますれば、天皇に於かせられては、皇祖皇宗の御遺訓を御紹述遊ばされ、臣民に於ては、私を去つて公に奉じ、忠誠以て皇運を扶翼し奉り、この大精神が一貫して、今日に至つた事は明白にして一點の疑ひを存せざる所であります。我國が古き歴史を有しながら、常に新しい生活力に溢れ、不斷の發展を遂げつゝある原因は實に此處に存するものと確信するのであります。國運の進展が常に國体に對する自覺と併行する事は、歴史が如實に證明する所であります。有事の秋に際しまして、何よりも先づ、日本精神の昂揚が叫ばれるのは洵に當然のこと、云はねばなりません。即ち、國家の大事の前に、國內の凡ゆる階層が協力一致して義勇奉公の誠を盡す事が、實に我國本來の姿であると思ひます。

今日我國は東亞新秩序建設の聖業に、國家の總力を擧げて邁進しつゝあります。苟も虚心坦懐に事態を観察する者は、何人と雖も、東亞に相隣する日滿支の三國が東亞保全の共通使命の下に結合すべき必然の關係にあることを疑ひ得ないであらうと思ひます。従つて、此三國が東亞新秩序の建設なる、共同の目的の爲に、善隣友好共同防共經濟提携の實を擧げる事は極めて自然の状態であり蔣政権の誤れる政策に依つて、之れが實現を妨げられ、東亞發展の進路が阻止せられ來つた事は、今更顧みて、全東亞の爲め遺憾の極みであります。今やかゝる不自然な妨害を除き、東亞をして其本來の姿に立歸らしむべき時機は到來したと思ひます。

十日と十一日の兩日に下し賜ふた勅語には、偏に世界の平和が一日も速かに恢復することを念ぜられ、而してこの目的の爲め、我が國民が惟神の大道を中外に顯揚し、以て人類の福祉と萬邦の

協和とに寄與する努力をなすべきを命ぜられてゐます。列國の使臣をも前にせられて、あの勅語を賜つた。陛下の御深慮に、畏れながら更に一段の強き感激を覺えたのであります。

私はこの佳き年、佳き日に生れあはせた幸福を深く感ずると共に、益々一億一心となり、聖旨の萬分の一に對へ奉らむと固く決意してゐる次第であります。

ためしなき此大御代に生れあひて

今日のよろこひなにとたとへむ

天地の神もそろひてまもるらむ

くもひとつなき今日の大空

之れは十日の式典と十一日の奉祝會に詠みました感想であります。

終りに、今回の御盛儀參列に付いて、縣御當局の一方ならぬ御配慮を辱うし、衷心感謝厚く御禮申し上げます。

門司鐵道局長崎保線區

線路分區長 石川 袈裟 次郎

十一月十日、十一日の兩日、東京宮城外苑に於て舉行せられました、皇紀二千六百年奉祝式典並に奉祝會に、私如き者を國有鐵道従事員の代表者の一人として指名せられ、この光輝ある盛典に參

列するの光榮を與へられました事は、私の身に取つて本當に勿體なく只感泣するばかりであります。往復の列車共有位高官の方々と同席を許され、且縣廳の方々には列車内は勿論、宿舍の御世話萬般に亘り御配慮下さいました事、是又有難く存じました。

兩日共鐵道省内に集合、指導者の引率の下に式場に入場するや、其の式場の端嚴にして靜肅さ、實に壯麗嚴肅なる式典奉祝式である。

陛下の出御を待ち奉る間の敬虔な氣分は參列者全員皆同じであつたらうと思ひます。

陛下の御前で聖壽の萬歳を奉唱致しました、あの時の心持は言葉で言ひ現はす事の出来ない感激でありました。

兩陛下の行幸啓を拜しながら、私共が御盃を頂きました事は終生忘るる事の出来ない光榮であります。奉祝式典、奉祝會の兩日とも晴天にして雲一點なく日本晴なりしに、奉祝會終了後の十一日の晩になり降雨となりしは、是偏へに

陛下の御稜威に依るは申す迄もなく、大日本帝國の榮光に天も感激せしものゝ如くでありました。私はこの有難い聖代に生れ合せ、この世紀の國家的盛儀に列し得た身の幸福を思ふ時、一層國鐵の職域に赤誠を捧げ、以て粉骨碎身臣道完遂に邁進する覺悟であります。

大前に山もさげよと萬代を

たゝへし時の聲は残り

紀元二千六百年祝典に参列して

石川又一郎

十一月十日、大内山には瑞氣漲り、カラリと晴れた大空には一片の雲翳もない、紀元二千六百年式典の行はるる日、帝都は正しく日本晴れである。

参列者五萬二千餘人、總起立最敬禮の裡に、君が代の奏樂聞え、

天皇皇后兩陛下には神々しく臨御遊ばさる。我等は近衛總理大臣の奏する壽詞の一言々に感激を深くし、堅く臣道實踐の誠心を誓ふ。殊に御勅語を拜する時、廣い廣い式場は肅然として音なく、我等は恭しく頭を垂れて、只管 龍顔を心眼に浮べ 玉音を心耳にきき、恐懼感激涙を以てお受けしたのである。總理大臣の發聲にて萬歳を奉唱する時、全國津々浦々、或は滿洲支那其他の諸外國に在る一億同胞の悉くが、此日此時刻に 皇基悠久二千六百年の感激をこめて、聲の限り 聖壽の萬歳を奉唱しつゝある事を想ひ、溢れ落ちる涙を禁する事が出来なかつた。

第二日の奉祝會當日も亦空は高く奇麗に晴れわたり、大内山の上には、今日の佳き日を祝ふかの如く鶯が悠々と舞つてゐる。

高松宮殿下には、畏くも皇弟の御身を以て、我等一億臣民に代らせられ、天皇皇后兩陛下の御前に奉祝詞を奏上、皇運扶翼を誓ひまつらせ給ひたる事は、我等感激の極であつた。殊に一旦壇

を下り給ひ、更に階を登らせ給ふて、天皇陛下萬歳を奉唱遊ばさるる時、我等の感激は頂點に達し、身もしびるるばかりであつた。

開宴ともなり、天皇皇后兩陛下を始め奉り、各皇族殿下文武百僚及一億同胞の各界代表外國使臣等に至る迄、一同に饌を開き、祝酒を手にする君臣和樂の悦びを眼のあたりに見、自ら其一人である事を知つた時、私は皇國日本に生をうけたる有難さと此光榮に浴したる喜びを痛感した。

大君の御前に於て、共に拜する莊重典雅な奉祝舞樂、二千六百年の古に於て、我等の祖先は今日の如く皇祖の御前に於て、今日の如き舞を奏し、私の如き感激に身をふるはした事だらうと思ふ。

要之、此二日間は参列者全員は感激と歡喜の連続であつた。そこには何等の理窟もなしに、唯悠久日本の國体の眞の姿を観る感激であつた。

紀元二千六百年式典並ニ奉祝會参列所感

海軍大佐 一ノ瀬 英 太

歴史を詳しく知らざる吾としては、紀元何百年何千年式典等の如き催しが、曾て有りしを聞かず其れ丈け此の二千六百年式典は有史以來の最も意義深き盛典と言ふ可く、亦吾人が祝ひ得る聖代を迎へ、之れに遭遇し得たことは國家の隆盛を慶賀すると同時に、一億國民の等しく心底より壽ぎ奉るところにして、特に 今上陛下の御即位の佳日を以て舉行せられたるは、最も意味深長且つ皇統

の彌榮を物語り、全國民舉つて參列を希はざるものなきは當然と言ふ可きものにて、然かも參列者は各方面代表五萬五千名に限定せらる。然るに何の幸運か、此の參列者の末席に列するを得、一生一代無上の光榮なるのみならず、家門の名譽にして感慨無量のものあり、感謝と感激に満ちつゝ、臨時列車にて上京せる次第なり。九日夜沼津熱海附近、列車内より靜かに天を仰げば曇天、低氣壓の接近せるを覺え、些か明日の天氣氣掛りになりしも、其の日は身を淨め、天候好轉を念願しつゝ、寢に就く、然るに明る十日式典當日も、其の翌十一日の奉祝會の日も打つて變つて晴天續き、所謂日本晴、寒からず暑からず風さへ無く、天祐と言ふか皇威と稱ふるか、神助厚遠なるを感謝しつゝ、集合所たる海軍省に急ぐ。式典會場に入場する者は何しろ五萬餘名、相當混雜は免れざるものと思ひの外、流石に一億國民の代表たり、序列整然一絲亂れず、各自自重緊張せる面持にて、能くも集めたりと思はるゝ菊花、各様の流の中に簞ゆる、新に出來た端麗なる御門、更に樹立せる奉祝旗翻々たる中を通り、各省各縣各々定められたる定席に着席し、寂として聲なく、唯々陛下の臨御を今や遅しと待ち奉る。

會場

斯かる間に定刻前に至れば、重臣顯官並に外國使臣等相次で殿上に參入、暫くして皇族方の台臨せらるゝを拜す。其の光景たるや未だ曾て斯の如き壯嚴極りなき場面に列席の光榮に浴したる経験なき吾としては、何とも言葉に言ひ盡せぬ莊重さを感じ、唯々今日の式典滞りなく終了するを祈る外なかりき。聽て君が代の奏樂裡に式場中央に御英姿を拜し奉りたる瞬時、玉体より靈氣四方に燦

然と輝き渡るを覺え、嗚呼我が眞に神なるか嗚呼君なるかを覺えしめ、我々の最敬禮に答へ給ふた時、御前に於て君が代を齊唱し、又双手を舉げ心行く迄萬歳を叫ぶを許させ給ふた時、義に於ては君臣情に於ては父子、眞に我が親なるかと敬慕の念愈々禁する能はざりき。又式典に於ける近衛首相の壽詞、奉祝會に於ける奉祝會總裁御代理高松宮殿下の奉祝詞は共に我が國体を明徴にし、神武の昔を偲び、歴代天皇並に今上陛下の御盛徳を讃へ奉り、且つ我が國民の御奉公を誓ひ奉りて餘す所なし。殊に高松宮殿下の御音聲明朗嚶々なる眞に感銘の外なく、奉祝舞樂悠久は神代の様を想起するに充分にして、式典に於ける陸海軍樂隊の演奏、音樂學校生徒の紀元二千六百年頌歌の齊唱奉祝會に於ける陸海軍樂隊の奉祝音樂、全國學生代表三千名の奉祝國民歌の齊唱等祝意を表するに十二分にして、兩陛下に於かせられても最と御満悅の御事なりしならんと拜察し奉るのみならず吾人臣民も誠に神境に遊ぶの心地せり。特に感激に堪へざるものは、一度ならず再度迄も、朗々たる玉音を以て優渥なる御勅語を拜し奉りしことにて、實に我皇國の大理想を詔述し給ひ、且つ我等の嚮ふところを明示し給へるは有難き極みなり、一億國民の感激と悦び何にか譬へ得んや。

終了後

斯くの如くにして何等滞りなく、此の目出度き吉日は過ぎ去りしも、此の思ひ出では忘れんとしでも忘れ得べきにあらず。東方遙拜の時も、國旗軍艦旗を拜するにつけても、思ひ浮ぶは式典祝典に拜せる天皇皇后兩陛下の御英姿なり、御勅語なり、誰か臣民として國に報ゆるの志を益々堅くせずして濟む可きか、時恰かも眞に未曾有の難局に遭遇す、然かも前途は遠遠にして、陛下の詔

ひし萬邦協和、我が國家の隆盛は一に繫つて我一億國民の双肩に有り、臣道を実践すると否とに有り、翻て顧みれば我官界と言はず民間と言はず、果して反省す可きことなきや。此の紀元二千六百年を誠心を以て慶祝すると共に、此の記念事業の最大なるものとしては、皇國民一億總て心氣一轉日本主義に還元、良心の命に従ひ、言ひ且つ實踐することに在り。之が聖旨に答へ奉る唯一の臣道なり。此の期をトし舉國一致滅私奉公公益優先を誓ひ度きものなり。

終りに 陛下の御安泰、皇室の御繁榮を祈り奉り、國家の隆盛を祈りて止まず。

紀元二千六百年式典參列の感

長崎縣視學 一 瀬 前 次

みたまわれいけるしるしあり天地の

榮ゆるときにあへらく思へは

との古歌そのまゝに、唯恐懼感激の極、一代の光榮と幸福感にうたれるのであります。

諫早驛頭にて「式典參列者専用車」と記された臨時列車が到着した瞬間、早くも曠古の御盛儀を偲び奉り、車中すでに緊張を覺ゆるのであります。

肇國のその日以来、繼ぎ繼ぎて今日に至る、悠久紀元まさに二千六百年十一月十日。空に一點の雲もない日本晴、晩秋の爽氣身に泌みて淨らかな朝、眼前に拜する二重橋、大内山の翠松、唯莊嚴

感激の極みであります。

青白二色の幔幕をめぐらされた式場内寢殿造の莊麗なる式殿を仰ぎつゝ、

天皇皇后兩陛下の臨御を仰ぎ奉つて、舉行される曠古の式典開始を今か今かとばかり待つ五萬五千の民草、寂として聲なく、身あたかも 神代の昔に在るの感を深くしたのであります。

陸海軍軍樂隊の國歌吹奏の中に、 兩陛下臨御遊ばされ、總員最敬禮、目のあたり 尊顔を拜し唯感涙と共に奉唱する君が代、天地もゆるがす聖壽萬歳の奉唱、殊には欲慮優渥なる勅語を下し賜つた一瞬、唯忝けなく恐懼にひれ伏し、深き感激に咽んだ感銘はととも筆や言葉に表はし得ないのであります。

十一日の奉祝會に於ては、高松宮殿下恭しく御前に進ませられ奉祝詞を奏上遊ばされたのであります。が、「臣宣仁謹ミテ言ヌ」との御聲を拜聴した時、「はつと」胸にこみ上げて參りました。

あゝ、凜と透き徹るあのお聲、金枝玉葉の御身をもつて一億民草に代りて、皇謨の雄大をたゞへ聖代の彌榮を祝し給ふ殿下を拜し、あゝもつたいない有難いと胸一ばいでありました。

此日參列者一同食饌をいたゞいたのであります。

後刻新聞にて承りましたが、 兩陛下の御召しのものも民草と同じ野戰料理なりしとの御事で、もれ承るだに畏き極みであります。全く君臣和樂の饗宴の光榮に浴したのであります。

全國の學校から晴れの代表として參列した男女學生々徒三千人の若人が奉祝國民歌の齊唱の時には、 陛下には龍顏殊に麗しく拜され、齊唱隊の方向を御覽遊ばされた時には、身を教育の道に奉

じてゐる私には「何と云ふ有難い事だらう」と若人達の光榮に思ひを寄せたのであります。今や聖戰第四年の非常時局下に、此の盛儀に列するの光榮を得たる諸外國の使臣武官等は何と感じた事であらうか。

末の世の末の世までわか國は

よろつの國にすくれたる國

悠久の誇りと歡喜に感激措く能はぬのであります。

職を教育に奉ずるもの唯一死以て臣道實踐、聖旨に副ひ奉らねばと、深く強く心に期するところがあるのであります。

長崎縣聯合男女青年團代表 井手 助 五郎

一億國民の祝意を凝結させた政府主催の十一月十日、紀元二千六百年、肇國の其の日以來繼ぎく、今日に至る、聖戰四年にして迎へたる記念祝典は、この歡喜を祝ふ世紀の日、銃後も前線も一億赤子の上に燦たる榮光と共に齎らされた。

本縣百三十萬縣民を代表する二百三十名は、十一月八日午後三時三十分、長崎驛前に集合を了し地方事務官西尾森太郎氏總指揮の下に、七班に編成され、待つ事十五分にして四時に至るや、我等の期待と歡喜を託した式典列車はホームを離れた。(中略) 翌九日午後七時三十分東京驛着。市街

は總べて奉祝の色濃きを見うける。一應指定の宿舍に投宿。豫想される一喜一憂の十日は靜に明けた。今日の快晴は實に曠古の祝典のために、帝都に與へた太陽の賜餐であつたと思ふ。一天雲なき日和だ。全國を代表する名士等は定刻前、日比谷公園豫備集會所に集合を了する。我が長崎縣代表は先づ四列縱隊に整列し、馬場先門より歩武肅々順次參入した。

畏くも 天皇皇后兩陛下の臨御を仰いで莊重嚴肅に舉行される。禁苑の綠を背に、杉皮葺の屋根も神々しく聳へ立つ式殿には、この朝、兩翼から廻廊をめぐつて、瑞雲模様の淡青色幔幕が張りめぐらされ、式殿正面には菊花の御紋章燦然たる紫の幔幕、玉座後方には四曲一双の金屏風がまぶしく立てられてゐる。式殿左右には萬歲旛を初め、日象月象八咫鏡金瑠の各旗幟と日輪を象る旗柱が林立し、森嚴の氣みなぎる。

今一億を代表する五萬三千の代表者が襟を正して水を打つたる如き嚴肅さ、不肖私もこの光榮に浴し、唯恐懼感激、我にあらざる心地に打たれた。二千六百年の昔に於ける肇國の大典は、今日の盛典に變りない感激と歡喜が沸いた事を追想せしめる。襟を正して光榮の一瞬を待つうち、開會の時迫るや、マイクを通ずる合圖によりて一同起立。

天皇陛下には御軍裝に各種勳章御佩用、皇后陛下は御洋裝にて臨御。龍顏を拜し奉る。一億臣民を代表する近衛總理大臣の壽詞奏上の聲が朗々と流れてくる。これこそ二千六百年來日本の一貫した理想と我等一億の諸聲である。玉音朗々優渥なる勅語を降し賜ひ、國民の嚮ふところを明かに示させ給ひし事は洵に一億國民の恐懼感激の極みなり。民草井手は長崎縣男女青年團を代表して馳せ

参じましたと恐れながら心中で御奉告申し上げたが、涙一杯浮んで 龍顔を拜し難くなつた。近衛首相はマイク前に立つて、恭しく「天皇陛下萬歳」を發聲、全参列者は大地を揺がす如き萬歳を三唱し奉つた。陸海軍の皇禮砲般々と轟く。この時正に國民奉祝の時間、全國津々浦々の民草、戦線の將兵、海外にある同胞まで、一億の聲高らかに首相の發聲に唱和し 聖壽の萬歳を奉唱したことであらう。君が代合唱の時は私幾度となく臉をしぼつたのである。私のみでなく全員さうであらうと思ふ。この諸聲こそ八紘一字の理想の聲と思つた。陸海軍々樂隊の頌歌奉唱終り、全員最敬禮のうち 兩陛下は還幸啓あらせられた。我等は今日此の世紀の國家的盛典に對し、敬虔嚴肅の至情を以て永久に御祝申上げると同時に、この盛儀に會するの光榮を得ました我等一億國民は、遠く想を肇國の古に馳せ、光輝ある二千六百年の國史を顧み、愈々宏大無邊の皇謨を扶翼し奉らなければならぬと深く心に銘するのである。今日曠古の祝典に列し、滿腔の感謝の意を捧げ、聖壽の萬歳を壽ぎ奉ると共に、今や内外極めて多事多難なる時局下に於て、益々確固不動の決意を堅持し、大政翼賛の臣道實踐の實を擧げたいと存じます。

悠久なる哉歴史の流盛儀の光

身にうけて共に傳へん永久に

菊薫る今日この感激をいかにせん

共に頌たん一億へ

肇國の昔も今も異りなき

今日の佳き日の神々しさよ

一億の心一つにより合せ

今一筋の大繩にせよ

光榮に浴して

長崎縣學校營繕技師

伊藤 四郎

昭和十五年十一月十日、昨日まで雨模様にて、紀元二千六百年式典の佳き日が案じられてゐたけれど、この日も次の奉祝會の日も殊の外の日晴れにて、一點の雲もない蒼空を仰ぐ事の出來たのは、今更に神國日本の然らしむる瑞祥と、感激を新たにされた次第であつた。

日比谷公園假集合場に参集したのが午前七時半、緑の参列記章を胸に、各地方團體が府縣別毎に整列、隊列を組んで宮城外苑の式典場に行進する、モーニング、フロックコート又は國民服のカーキ色が入交りて蕭々と馬場先門入口に向つて行進が續けられた。

午前十時、五萬數千の日本領土の津々浦々から馳せ集つた同胞によつて埋めつくされた、この式場は約八千坪とか聞き及ぶ。ヒットラー ユーゲントの代表が長崎縣、佐賀縣の左側前方に着席して光榮に浴してゐる姿を見て、大和民族の感激をどんな氣持で眺め得た事であらうかと、考へず居られなかつた。

式殿はと見れば屋根は杉皮葺入母屋造で、翼廊を持った寢殿造、朝日を浴びて浮んでゐる。正面に六本の圓柱が立並び、上部桁から菊花の紋章を染め抜いた紫色の幔幕が、左右廻廊を廻つて張り巡らされてあり、正面欄間の中央に萬歳額が懸けられてある、本殿中央には金色輝く四曲一双の金屏風を背として、玉座が遙かに拜された。

かくする間に時は経つて、午前十時五十分頃、喇叭の音と共に御召車はしづかに二重橋上を軋つて、式場に臨御遊ばされた。民草の前に、兩陛下御揃ひにて行幸啓遊ばされるといふ事は全く例の無い事と承つて、益々此の光榮に浴する事の出来た事、遙かに御健かにおはします御影を拜し得て眞に勿体ない氣持と、一身の光榮ばかりでなく一門の光榮と深く深く銘記する次第であつた。

場内の擴声器によつて起立最敬禮の號令が掛つた。一瞬ピリツとした感じ、兩陛下が出御遊ばされたのだ、續いて君が代合唱、思はず心から進める聲、涙のにじむ様な氣持で、兩陛下の御前に奉唱したのだ。續いて近衛首相壽詞を奏上、それがマイクを通じて一語一語感激にふるへるのであつた。次いで畏れ多くも

勅語を賜つた。畏れおほい事に、御力強く御豊かな御聲が遙か遠く列末に列する私共の耳朵に拜する事が出来た。この間全く身の引締る様な氣持であつた。感泣と申すべき言葉の体験と云はうか、その刹那の氣持は何んと言ひ現していゝか解らないのであつた。

この時、東京音樂學校生徒の紀元二千六百年頌歌が齊唱せられ、高く低くそのリズムの廣がる中に、何となく感慨無量のもものが湧き出づるのであつた。それは二千六百年の昔、神武天皇の橿原に

即位式を擧げさせられ、臣民の前に佳節を御祝ひ遊ばされた遠い昔の事を想像し、かくもありしかなどと偲ばれ、又皇統連綿として、皇國の世界に比類なき有がたきこの日本の姿を思ひ、尙悠久として榮えまつらん事を祈り、永久に忠誠を盡すべき誓ひが自然と湧き出づるが如き感慨を覚え、澄み渡る大空を思はずふり仰いで、その餘韻に力強い息吹きを感じたのであつた。

次いで近衛總理大臣の發聲に従ひ力一杯、天皇陛下萬歳を三度び奉唱した。この聲こそ一億蒼生の津々浦々に至る迄、世界に、天に、ひゞけとばかり力強い國民の聲であつたであらう。式は皇禮砲のひゞきの中に閉式が奏上せられ、この曠古の式典は莊嚴の裡に目出度閉ぢられた。

翌十一日の奉祝會は前日と同じく燦々とふりそゞぐ秋晴れの日和、參列者一同が忝けなくも兩陛下の御前に盃を擧げて祝ひ奉る光榮ある日であつた。

午後一時五十分頃、兩陛下臨御あらせらるる間の一時を、昨日の式典と比較して眺められる様な心のゆとりが今日は出てゐた。何となく華かな氣分が漲つてゐる様であつた。昨日の嚴肅さに引きかへて殊更に思はれるのであらう。周圍の幕も、青白が紅白に替へられ、奉祝會旗も碧空になびき五色の旗も翻々と立並び、殊に式殿前の舞樂臺は、朱塗りの欄干が華かに秋陽に映じて、金色の金具はまばゆい程にきらめいて映つた。今日は陸海軍の儀仗兵もなく、何となく和かに思はれた。行幸啓遊ばされるや、全員起立、最敬禮、君が代奉唱、次いで奉祝詞を、總裁宮殿下御代理として高松宮殿下が奏上遊ばされた。

御聲はマイクに依つて會場に莊重にひゞき渡り、又ラヂオの電波に乗つて全國にも放送されし由

眞に畏き極みにて、私共此の御詞を拜聴し、感激に涙の落つる思ひで一杯であつた。

次いで在邦の外國使臣代表、米國グレー大使の奉祝詞あり、今日も亦

勅語を賜つた。眞に畏れ多い事であつた。次いで祝宴に移り、先づ舞樂が始つて、奈良時代の武士の風俗をした舞人が雄壯に演ずるのであつた。次ぎに吹奏樂が陸海軍樂隊に依つて、奉祝國民歌紀元二千六百年の歌が全國學生生徒代表三千名に依つて奉唱せられた。力強き若人の聲は天地にどよめき、此の時畏くも 龍顏殊の外麗はしく左の方に御向き遊ばされた様に拜し得て、思はず身の引きしまる感激を覺えた。

私共は畏くも 兩陛下と同じ野戰料理を頂き、盃を舉げ、現代に生れ合せた幸運と、鴻大な聖恩に心から有難さを覺えた。君臣和樂と申す可きか、眞に家族國日本の親しみに満ちた姿と拜察したのであつた。

高松宮殿下の御發聲の下に、萬歳を三唱し奉り、 兩陛下の入御と共に目出度奉祝會を終つたのであつた。

兩日を通じて、眞に歡喜感激極りなく、今聖戰の眞只中に此の式典に參列の光榮に浴し、且つ遠く神武の昔に思ひを致し、我等が先祖の忠節を辱しめない様、且つ又建國以來未曾有の國難に臨み一君の下萬民一致協力、國威を伸張し、即ち盡忠報國の誠を捧げん。此の難關を突破するの決意を固くし永久に忠誠を誓ひ奉るものである。

感激のかずかず

長崎高等商業學校 伊 東 勇 太 郎

九日の夕方静岡から沼津へ駛る車窓から見ると、暗雲空に立ち塞がり、富士の靈峰は寸膚も見せず、明日の天氣はどうだらうと氣遣はれたが、何等の天幸！ 式典の十日と奉祝會の十一日は、文字通り一點の雲なき快晴、式殿の上に、萬歳旛、日月旛の上に、綠色濃き大内山の松樹の上に、光榮に輝く參列者一々の顔の上に、暖かい秋の陽はさんさんと降り濺ぎ、天佑神助の治ねき御國柄を目のあたり見せられる歡喜と光榮とに胸は愈々高鳴るのであつた。宮城の松の森の上に鳶一羽悠然として輪を畫くのを仰ぎながら思ひつづけた。

萬歳旛、日月旛の鋒の上に

二千六百年の陽は燦として輝けり

宏大なる式場に、 兩陛下の出御を御待ち申上ぐる二時間のあひだ、五萬五千に餘る參列者は、肅として聲なきが如く、莊嚴にして而も淋しみを藏せざる、内容豊かな沈黙が領してゐた光景を見て、若し之が西洋などの場合であつたならば、どんなに喧轟を極めることだらうと、大君の事としあらば靈感に撲たれて莊重な心持になり、おのづから慎み靜肅を保つ我國民獨特のたしなみ、是は一體どこから來るのであらう、國體と、歴史と、教育の力の偉大さに轉た感動に勝えざるものがあ

つた。

六〇

やがて開會に近づくと、昇殿を許された方々が肅々として式殿の左の方から殿上の上つて來られるのが見られた。初めは女性の方々であつた。皇族がたであらうか裾模様の黒の和服を召してゐられる。この御國ぶりなる服装が、悠久の肇國をことほぐ今日の式典に極めてふさはしく、又なく床しく淑しく氣高きものに思はれた。右の方に眼を移すと、こちらにも軍装の男子と和服の女性と、金色燦たる外國使臣と丈高き洋装の婦人とが、たがひちがひにはいつて列立した。

君が代の奏樂裡に、兩陛下臨御あらせられ、金屏風を背に立たせ給ふ御姿を拜して、かたじけなさに涙こぼるる感動であつた。

天皇陛下が御坐け遊ばすと、皇后陛下が御坐け遊ばす。天皇陛下が御立ち遊ばすと、皇后陛下が御立ち遊ばす。その間の御呼吸、早過ぎず遅過ぎず。申すも畏き極みながら、洵にゆかしき夫婦隨の範を垂れさせ給ひし、國母陛下の御坤徳の高さに感涙禁じ得ざるものがあつたのは私一人のみではなかつたことと思はれる。更に、玉音を拜し得たことは一生の光榮であり感激である。

陛下の御前にて「君が代」を奉唱し「萬歲」を三唱したことも初めての、又稀なることであり、胸の奥から唱へ奉つたのであつた。

十一日の奉祝會に、總裁宮御代理高松宮殿下の奉祝詞の玉の御聲の清らに澄んだ御美しさ、若々しい御聲の微かに感激にふるひ給ふて尊くも難有かつたことと「臣」と稱せられたことのかたじけなかつたこととは、ラヂオを通じて全國津々浦々まで響き渡つたことであるから、茲に改めて申す

までもないであらう。

前に供へられた酒饌は家郷に戴き歸つて故山の父老親戚故舊にも光榮の一端に與らせたといは一同の感懐であつたが、畏くも陛下と宴を共にし奉るこの千歳一遇の幸運に一杯を擧げ、聖壽の萬歳を禱り奉り、君臣和樂の歡にあづかることを無にしては勿體ないことであるから、副饌の賜をいただきながら、燗瓶の口を抜き、杯に三盞、一盞毎に陛下在す玉座に向つて高く捧げつつ、萬歳を禱り感激にむせびつつ頂戴したのであつた。

宮内省樂部によつて奏せらるる二千六百年奉祝樂は、高尚古雅であるうちにも快活と歡喜のリズムを會場一杯にみなぎらした。舞は到底見えないだらうと慮れてゐたが、それは杞憂で、前の參列者の頭並の高さの舞臺に、奈良朝時代の武官の赤地錦の服装に笏を持った四人の舞人の姿は大きくくつきりと浮び出て、玉座に向つて笏を捧げたり、手を擴げ足を揚げて舞ふ踊は、莊重で典雅で且勇壯なものであつた。今でもラヂオ舞樂を聞くとあの時の舞の姿が眸裡に閃めく。吹奏樂「大歡喜」「紀元二千六百年頌歌行進曲」「奉祝讚歌」は軍樂隊によつて奏せられる洋樂で、その間も宴はつづくのであつた。續いて全國學生生徒代表の國民歌「紀元二千六百年」の齊唱は、前日の式典の際の東京音樂學校生徒の「頌歌」の齊唱もさうであつたが、聞き馴れてゐた歌だけに、なつかしく身に沁みる感じであつた。

第一日の式典が濟んで、歡喜の參列者の群に揉まれて馬場先門を出ると、見物の群衆で一杯なのを見て驚いた。御濠を隔てて、見えぬ式場を眺め遣りながら、せめても場内の盛儀を偲ぼうといふ

熱情に燃えて集まつたのであらう。それにつけても、式典参列に選ばれた者の光榮と幸福とが今更のごとく一入感じられるのであつた。その午後銀座の通は今まで見たことのない大きな群衆でこつた返してゐた。夜は花電車を待つ群衆が到る所の町角を埋め盡してゐた。

二千六百年祝典に参列して

西彼杵郡式見村

稻松志可太

ただ感激の言葉より外なし。遙かに

玉音を拜聴したる時には、大君のためにこそ死なめの歌詞を思ひうかべて眼頭の熱くなるのを覺えた。

式典に参列して

西彼杵郡龜岳村長

犬塚卓爾

肇國以來の國家的盛事たる紀元二千六百年の式典に参列の光榮に浴しました、私共の全身全靈は皆之れ誠歡誠喜感謝感激の極みでありまして、其の尊さは到底筆舌で申し盡す事は出来ませんが、

茲に謹んで筆を執る事に致します。

一、町村長として終生の光榮

町村長の職にある私共を、町村民代表として、其の光榮あらしめて頂きました事は、實に終生無上の光榮でありまして、恐懼感激の至りであります。將來町村長としての修養に努め、更に町村民力の培養、國民的練成の向上に精進し、國力充實の礎を成す堅實なる町村の振興に勵み以つて高恩の萬分の一に酬ゆべく渾身の御奉公を申し上げたい決心を愈々強くして居る次第であります。

一、式典参列専用車に乗車して

往復共に式典参列者専用の特別列車でありましたが、國民として臣民として町村長としてかやうな優遇を忝うした前例がありませんか、只管感恩の念に咽ぶのみでありました。

一、嚴肅なる式場に

指揮者の命に應じて隊伍を整へ、宮城外苑の式場内、定め的位置につきました。大内山を前に拜しながら、威儀を正して肅然と盛典の開始を御待ち申上ぐる、其の間、日本人としての萬感胸にこみ上げました。

一、式典開始さる

十一時八分陸海軍軍樂隊の國歌吹奏のうちに總員起立、最敬禮で御迎へ申し上げ兩陛下正面の玉座につかせられました。崇高の氣式場に充ち満ちました。我が皇國でなければ

見る事の出来ない神秘的の静肅さでありました。外國人の參列者も我が君臣の情誼に感動し、紀元二千六百年式典のよつて來れる意義が更に明かに感得されたものと思ひました。

一、式典の感激

近衛首相紀元二千六百年式典を開始致しますと奏上し、敬虔な總員の最敬禮、感激籠めて全員「國歌」を奉唱、兩陛下には立御あらせられ給ひて、之れをお受け遊ばされました。

陛下の大御前に國歌を奉唱致しました、其の感激は今に表現する事の出来ない崇高其のものでありました。近衛首相双手高く

天皇陛下萬歳を發聲、諸員三たび之れに唱和致しました。恭しく大御前に壽詞を奉つて悠久無限の皇運を高鳴る胸一杯慶祝申し上げた臣民、私共の萬歳の聲は全く尊き日本精神の發露であり、空前の國民的感激の熱聲であつたと申すより言ひ現はす言葉がないので、實に感激の極みでありました。

生を我が國に享け、然かも聖代の國民たるの至幸至福を感得し、愈々忠誠を全うせんとする心を強くし、其の感激に終始する決心であります。

一、有難き勅語を拜して

百武侍從長の奉る勅語書を御手に、玉音朗々と有難き勅語を賜はりました。私共參列者は其の

一瞬、忝なきに心打たれ、寂として頭を垂れ、深き感動に咽ばぬものとてありませんでした。後に勅語を拜讀謹讀致しまして、戦時下の國民たる私共は、東亞共榮圈の確立と世界新秩序の

建設、高度國防國家の整備に邁進すべく、國家の方針即ち新政治體制の下に國內體制の充實、換言すれば臣道を全うして大政を翼賛し奉るため、國運隆昌の基礎たる下部組織の整備と國民の練成に専念するは、正に之れ私共町村長に與へられたる當然の任務なりとの信念の下に御奉公するのが、皇恩に酬い奉るものなりとの覺悟を一層強くして居る次第であります。

一、有難き記念品を拜受して

列聖珠藻 聖徳餘光

拜讀謹讀して、日本國民としての信念の確立に努め、機會ある毎に町村民指導訓練に資するは申すまでもなく、大切に保存して永く家寶として子々孫々に傳へ、其餘徳を仰がせる事に致したいと思ふのであります。

二千六百年の記念章は必ず四大節に佩用し、式典參列の感激を其の都度新に致したいと思ふのであります。其の他の記念品も大切に保存し、意義深からしむるは申すまでもありません。

一、終了後に於ける感想と覺悟

奉祝記念式典により、神武天皇御即位以來悠久二千六百年、連綿たる巨大なる皇國の國史が世界に輝き、奉祝の因つて來れる意義を明かにし、然して又金甌無缺、世界に冠絶する國體の精華が愈々四海に遍く、皇國日本の永劫への輝かしき國運の隆々たる事を世界に明示したものと信するのであります。更に又非常時局下にある、我が國勢と國力と民力の餘裕綽々たる實情を世界に暗示するに大なる効果があつたものと確信して居るのであります。

皇國に生を享け、この盛儀に參列するの光榮を得ました私共は、特に想ひを肇國の昔に馳せ、光輝ある國史に顧み、皇恩に感謝し、宏大無邊の皇謨を扶翼し奉る臣道實踐の國民練成に粉骨碎身、努力せん事を期して居るのであります。

聖紀の式典に列して

長崎市長 井野次郎

皇紀二千六百年の式典並に奉祝會參列の光榮に浴した感激は、生くる日の限り、常に我が胸に甦り、尊い思ひ出となつて、忠誠以て皇恩の萬分の一に報い奉らねば止まぬ至情を湧き起さしむるであらう。想へば白雲の一つだにない晩秋の空から銀箭のやうに降りそゞぐ日ざしの中に、大内山の緑はひとしほ濃く、宮城外苑の式場には寢殿造りの式殿が神々しく建てられ、中央には一際高く玉座と拜せらるゝ處に四曲一双の金屏風が燦然と輝いてゐる。

菊花の御紋章を染めぬいた紫の幔幕、太古を偲ぶ日像月像八咫鏡等の旛旗、寔に莊重と謂ふか、森嚴の極みで、思はず頭の下るを覺えた。やがて十時四十八分、大内山の奥からかすかな喇叭の響が聞えた。只今宮城御出發の御時である。

參列の光榮に浴した五萬有餘の國民代表は肅然と襟を正し、心ををどらせ固唾をのみながら、兩陛下の臨御を御待ち申し上げた。咳の聲一つだになき谷底のやうな靜寂の式場に「起立ッ」と

マイクが叫んだ。ハツと立ち上ると同時に陸海軍軍隊の君が代が靜かに奏でられた。

紫紺の御洋裝神々しき 皇后陛下には妃殿下方を従へさせられ靜々と出御、玉座の右側に御立ち遊ばされた。五萬餘の參列者等しく息をのむ一瞬、正に十一時、

天皇陛下には陸軍御軍裝にて側近者を従へさせられて出御、玉座の御椅子につかせ給ふた。いまぞ五萬の國民代表は至尊の御姿を咫尺におろがみ、龍顔ひとしほ麗はしき御稜威に思はずひれ伏すばかりであつた。

やがて至尊の大御前に「君が代」を奉唱する歡びの時が來た。生れて六十餘年「君が代」を奉唱すること數知らぬ程であるが、これ程の感激を以て歌ひまつた事が嘗てあつたであらうか。とゞめなく頬を傳ふ涙、聲をあげて泣きたい程の強い、感激が心の底からこみあげて來るのをどうすることも出來なかつた。

間もなく近衛首相は 玉座の直前に進んで壽詞を奏上された。神代の昔天照大神が天の岩戸にお隠れ遊ばされた時、大神の大御前に祝詞を申し上げられたのは天兒屋根命である。又神武天皇が橿原の宮で御即位の大典を擧げさせ給ふた時、天皇の御前に壽詞を奏せられたのは天兒屋根命の御孫天種子命であり、その子孫が今日の近衛公である。天照大神の直系の御血統を傳承せられたる

今上陛下の御前に天兒屋根命の子孫たる近衛公が御よろこびの詞を申し上げられる、實に何とも申しやうのない有難き氣持がする。皇統連綿たる君と共に臣も亦百代の臣たるを懷へば、國民の誰もが今更のやうに、我が國體の尊さに感泣せずには居られないだらう。

ついで 長くも優渥なる勅語を拜し奉つた一瞬、忝けなきに胸は迫り五體はふるへて、溢れ出る感激の涙をどうすることも出来なかつた。

玉の御聲を拜し奉り、感極つて嗚咽する聲があらゆるにも聞こえるのであつた。

嗚呼この限りなき聖恩に聲をあげて泣き得るものは、我等日本人のみに與へられたる大きな誇りである。此時「遠すめらぎのかしこくもはしめたまひしおほ大和」と奉唱隊の聲が、さながら肇國悠遠の彼方より響いて來る様である、何と云ふ力強き民族の頌歌であらう。莊嚴の氣は彌が上にも式場にあふれた。やがて首相の發聲で「天皇陛下萬歲」を奉唱すること三度、感激にうるむ眸には畏くも

兩陛下が赤子の歡呼に應へさせ給ふ御姿が拜せられ、胸は高鳴り、皇土に生を享けたる歡喜を今更ながら深く銘記したのである。

今日は(十一日)前日國民感激の式典を終へたこの大式場はその姿を一變して慶祝一色に染め替へられ、再び 兩陛下臨御の光榮に輝き、莊重にして而も歡喜溢るゝ大饗宴場となつた。

此の日總裁御代理高松宮殿下には玉座の御前に御參進、金枝玉葉の御身をもつて一億の民草に代り、皇謨の大業を稱へ、悠遠二千六百年聖代の彌榮を祝され給ふたのであるが、凛々として場外までも透き徹る御聲はわれらの胸を強く貫いた、中にも御自身の御事を「臣」と仰せられるのを幾度か承つたのである。御弟の宮であらせられながら「臣」と仰せらるゝことの忝けなき、誠に一君萬民の國體の尊嚴なる姿をまのあたりに拜する思ひで、今更感激を新にした次第である。

かくて祝宴が開かれ 兩陛下におかせられては、懼れ多くも御饌並御酒も參列者と同じく野戰料理にて、共に玉盞をあげさせられ、民草とその歡びを偕にせられ給ふたのである。この無上の光榮に我等は唯々感涙に咽ぶのみであつた。誠に和やかに力強き君臣和樂、萬國に誇る大盛宴であつたのである。思へば遠い二千六百年の昔、神武天皇御即位の大典には、我等の祖先が今日と同じ感激と歡びを抱いたに違ひない。脈々二千六百年、我等はその歡び、その感激、その理想をそのまゝに御代のつき／＼に受けついで今日に及んだのである。而して今や毅然として大東亞の安定權を把握する皇國のゆるぎなき姿を現じ、その悠久を誇る祝典に列して、新しき世紀の朝ぼらけを讃へると共に愈々臣道を實踐し、未曾有の時局を打開し、一日も早く聖慮を安んじ奉らんことを更に決意した次第である。

紀元二千六百年式典に參列して

今 泉 壽 吉 郎

陛下の赤子として世界無比の皇國に生を享けたる無上の幸福を歡喜するのみにて、動もすれば本分たる臣道の實踐を怠り、唯だ君恩を冒瀆せる草莽の身なるに拘らず、過ぐる大正、昭和の大典に方り重ねて地方の大饗を賜りしさへ我身絶後の光榮として感激に咽び居たりしを、曩に擧げられたる輝く二千六百年の大式典に、夢想だにせざりし國民代表の一人として召さるるの光榮を荷ひて滿

身感激に燃えて上京し、式典と奉祝の二日間に亘りて、神々しき 兩陛下を拜して恐懼感激、何時しか險熱して涙にじむを禁じ得ざりしは、蓋し五萬何千かの參列者全員皆然りしことと思ふ。

郷に歸りては今猶ほ當日の光景眼裡に恍惚たるものあるを覺ふ。安んぞ此無邊なる天恩の萬分一だに酬い奉るを得んや。自今此盛典を劃期として、出ては大政翼賛の臣道に精進し、入ては毎年十一月十日を我が家門無二の光榮記念日と定め、謹て聖恩を感謝し、子孫相傳へ以て盡忠報國の赤誠を捧げしむるの家憲となす。

今 村 豊 光

神武天皇橿原の宮に皇居を定め給ひしより悠久二千六百年、千歳一遇の此の有難き御代にあへらく思へば、我等臣民齊しく無上の光榮、最大の歡喜とする處なり。

然るに今回測らすも方面委員を代表し、奉祝祭典に參列の恩命を忝うしたるは微臣の餘榮又家門の譽れこれに過ぎず。

瑞雲みなぎる大内山のほとり、新らたにしつらへたる式場に、皇族殿下を初め奉り外國の使臣高位顯官其他五萬五千餘人、かく多數なる參列者一糸亂れず分時違はず、所定の場所へ着席したるは立案者のかく迄組織的なる誠に感心の至りに堪へず。

肅然たる森嚴の氣自らにして満ち満ちてうち、 天皇后兩陛下御同列にて出御、尊き 龍顔を

遙に拜し、いとも莊重なる君が代を奉唱、近衛首相の壽詞、第二日目高松宮殿下の祝詞、かすかに承はる勅語、君民和樂の祝宴、式は次々に進み、聖壽の萬歳を唱和し、初めて我に還り、日本臣民たるの誇り身にひしひしと迫り、只々恐懼感激、宏大無邊なる皇恩に對し奉り、振古未曾有の重大時局下、微力を捧げ、粉骨碎身、萬分の一に酬い奉らんことを祈念致したる次第なり。

長崎辯護士會長 岩 松 繁 篤

昭和十五年十一月十日十一日の兩日に涉り、紀元二千六百年奉祝式典に際し、召されたる者は友邦使臣並に昇殿有資格者、官公吏、有位帶勳者、道府縣市町村長、在外同胞、神官、宗教、教育事業、商業家、各議員、農工其他功勞者、愛婦國婦、醫師、司法書士、辯護士等の五萬有餘に及ぶ。如此は正に之れ同胞一億國民集合体の縮圖にして、恰も代表關係に於て、全國民が召されたるに異ならず。尙ほ會長近衛公の式辭、總裁高松宮殿下の賀詞が式場にて爲され、況んや 天皇后兩陛下は御同列にて出御あらせられて、序で全員最敬禮の裡に、優渥なる勅語を降し賜へり。斯かる盛事は古來未だ曾て其例あるを聞かず。

次日御下賜の酒肴は野戰料理と承る。之を拜するや、思ひは前線將兵の上に及び、實に感慨無量なり。式場での御饗は衆と俱になし賜ふ、聖慮の程恐察致すだに畏し。列聖珠藻、聖德餘光の御下賜により、將來賤の伏家にも、吟詩唱歌の聲を聴くを得ん。嗚呼御同列の御臨場、式場での勅語降

下同じく御饗等、一として之れ聖代の恩澤たらずんばあらず、臣繁篤亦た許されて席末を汚し、光榮之に過ぐる無し、謹て誌す。

紀元二千六百年式典に参列して

縣民帶動者代表 岩本健一郎

悠久二千六百年、天壤とともに窮まりなき、我が日本の榮光を壽ぐ帝都の夜は明けたり。天は晴れて瑞雲たなびき、地は安泰にして慶祝の歡呼に充ち満ちたり。日本は、吾等は、今ここに新しき聖紀の朝を迎へたるなり。今日の佳き日、今日ぞ曠古の式典、吾も五萬有餘の参列者の一人に加はる光榮に浴して、歡喜に胸をふるはせつゝ菊花の道を通つて、宮城外苑の式場へ、肅々と進みぬ。仰ぎ見るに、大内山の老松翠いや濃く深く、秋の佳き日の御空に、高くゆたかに舞へる鳩の群さへ天使の如く、いと尊く感じられぬ。

青空にくつきり浮びし杉皮葺、黄白色、寢殿造りの式殿の御前に立てられたる十六旒の長旗、金色に光り輝き、幔幕に圍まれし一萬三千坪の式場は歡びに溢れたる参列者に満たされ、出御を待ち奉る、嚴肅の氣心にみち、咳き一つ聞えぬ静けさなり。

大内山の奥より、かすかなる喇叭の音流れ來たる。やがて 兩陛下には静々と出御あらせ給ふ。吾等五萬四千の國民代表は、至尊の御姿を咫尺にをろがみ奉りたり。龍顏ひとしほ御麗はしく拜

せられ、たゞ感激感涙の外なし。最敬禮裡に、君が代を奉唱し終るや、近衛内閣總理大臣は、玉座の直前に進んで、恭しく壽詞を奏上せり。感激に打ふるふ聲を勵まして、天壤無窮の皇運を讃へ、聖壽の萬歳を壽ぐ、その聲は吾等一億民草の心をこめし赤誠の表現なり。

畏くも 天皇陛下には待從長の捧持する勅語書を御手に詔を下し賜ふ。玉音朗々とその力強き御語調を眼のあたりに拜し奉り、只感泣に咽ぶのみなり。この時音樂學校生徒の齊唱する紀元二千六百年頌歌の歌聲が湧き上りたり。肇國悠遠の神國を讃ふる力強き吾が大和民族の頌歌なり。やがて参列せる五萬有餘の諸員は、近衛首相の音頭に和して、聖壽の萬歳を奉唱すること三度、マイクを通じ、津々浦々までも轟き渡れかすと、聲を限りに奉唱せり。その聲は何と歡呼にとよめきし聖紀の一瞬でありしか。思ひを遠き肇國の悠遠に馳せ、比類なき我が建國の體制と、宏大無邊の皇恩を仰ぎ奉り、一段の感激に打れたるなり。あゝ何と榮ある吾が身なるか。

やがて百一發の轟々たる皇禮砲轟き渡る中を還御せさせ給ふ。かくて莊嚴なる世紀の式典は愛でたく了へたるなり。

續く日本晴の奉祝會には再び 兩陛下の臨御を仰ぎ奉り、國歌を奉唱し、五萬餘の参列者の感激譬へんかたなく、歡喜場内に溢れたり。高松宮殿下の奏上遊ばさるゝ奉祝詞の長き御聲はマイクを通じて、場内に隈なく、吾々参列者の感激高潮その極に達せり。再び優渥なる勅語を賜ふ。畏くも朗々たる玉音を拜し承る一瞬、胸は感激に高鳴り、我が皇國に生を享けし歡喜をいや深く感銘したるなり。殊に歡びの饗宴を終へ、高松宮殿下の御發聲にて 陛下の萬歳を咽喉も裂けよと唱和し奉

りしときの感激は筆舌の盡すところに非ず。やがて 兩陛下には諸員奉送裡に還御せさせ給ひぬ。かくして二日に亘る曠古の盛儀は一億萬民慶祝裡に滞りなく了りたり。

惟ふに肇國以來、年を重ねること二千有六百、上御歴代の御仁愛に浴し、下忠孝の赤心を捧げて、天壤無窮の皇運を扶翼し奉り、君臣融合、國礎未だ曾て搖ぎしことなく、茲に昭和の聖代を迎へ、聖紀を壽ぐ千載一遇の盛典に遇へる吾等の幸福と歡喜は何に譬へん。然るに今や我が國は空前の大難局に際會し、世界は未曾有の妖雲に閉ざされ、出帥すでに四年、聖戰目的の完遂は容易ならず、引いて東亞共榮圈確立の前途はなほ遼遠の大業ならん。吾等はこの非常時局下に、この盛典を迎へし嚴肅なる意義を感得すべく、即ち 皇祖御創業の八紘一字の御理想を追慕し、天業恢弘の國民的覺悟を新にし、世界の大空に雄飛勇躍するの堅き決意に燃えざるものあらんや。吾等臣子の一人として、この聖典に參列したる歡びを分ち合ふと共に、進んで各自の職分を全うし、滅私奉公の誠意を披瀝して、臣道實踐の實績を昂揚し、以て國運の發展に寄與することを誓ひ、この感激とこの感涙を、今より百年千年後の子孫の上に及ぼし、今日の榮光を仰慕せしめんことを痛感するものなり。

謹んで國運の隆盛を祈念し、聖壽の萬歳を壽ぎ奉る。

菊薫る關八洲や日の御旗

盛儀に列して

八十四翁 植木元太郎

皇紀二千六百年、何といふ佳き歳に生れあはせたことであらう。そのことが既にかぎりなき悦びであり、奇縁である。それも單なる數量的の二千六百年ではない。實に金甌無缺皇統連綿の二千六百年である。大和民族發展の二千六百年であり、肇國精神不變の二千六百年なのである。かく考へて見ると、全國民が擧つて歡喜拊舞するのも、亦當然な事ではあるまいか。

況して菊花薫る晩秋の佳き日に、宮城外苑に於て、畏くも 兩陛下の臨御を仰ぎ、親しく國民の代表が相集ふて、記念式典が催され、又奉祝の盛儀が開かれると言ふのであるから、之れに列するの光榮に浴した吾々の感激は、又格別なもので、到底名狀すべきよしもない。國民の總代表として近衛首相を先頭に、聖壽の萬歳を奉唱した吾々の聲は、津々浦々全國民の聲となつて、世界に響き渡つた事であらう。此の光景に接した者は、よし萬葉の歌人ならずとも「御民われいけるしあり」の歡聲はおのづから湧き起るのである。余も亦今更ながら皇國民たるの矜持を禁ずる事が出来なかつた。仍つて此の胸中を、恭しく表現すべく一詩に託して見た。

建國二千六百年 金甌無缺帝基堅

八紘一字皇謨大 四海同舟聖德宣

萬歲聲中仙樂起 五雲彩裏旭旗鮮

威光烈々如天日 照到南蠻北狄邊

余は安政四年の誕生である。従つて孝明、明治、大正、昭和の御四朝に亘り、涯りなき皇恩に浴して、今回の盛儀に出遭ふたのであるから、其の感激は到底若き方々には理解して戴くことは出来まいと思ふ。只余一人のみの獨占ではないかとまでに感ぜられて、誇らしくも又有り難き極みであった。舊幕時代の社會狀勢も、臆氣ながら今に尙余が認識の裡に残つてゐる。維新の風雲にも際會した。爾來星霜幾轉變、今日の大御代に及んだのであるが、その辿り來つた迹を顧みて此の盛儀に臨んだ時、餘りにも國運展開の偉大さに、只々嬉し涙に咽ぶのみであつた。

明治維新の難關は、未だ弱齡にして十分に其の苦楚を知悉しなかつたけれども、相應の體驗はした。乃ち今日の所謂新體制の味は十分に覺えてゐる。更らに日清日露の兩役に於ては、當時の國力國勢に對照して、洵に未曾有の國難であつて、余も亦縣會若くは國會に在つて、直接その苦難を嘗めたのであつた。然るに今回の事變に至つては、其の規模といひ、其の性質といひ、之れ正に世界歴史の一大轉換である。而も此の大業を引き受けて既に四年、一億一心微動だも見せぬ、國力の飛躍的發展は今更ながら、悠久二千六百年、惟神の皇道が此の事變を通じて彌々展開せられ、眼のあたり君臣和樂霽々たる此の光景に浸つた時、老骨の身にも脈々として感激の血潮が湧きかへるのであつた。支那の聖賢は「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」と言つて居るが、君臣一徳、皇道具現の此の實狀を見せたならば、果して何と言ふであらうか。余は此れにて、何時でも安心して瞑目

することが出来ると思つた。

尙又吾等が心強くも嬉しく思ふ事は、聖壽のなほ春秋に富ませ給ふことである。君が代の奏樂裡に親臨しました、あの御若々しき御姿、仰げば遠く神代より、御降臨遊ばせしか、と疑ふばかりの神々しさ、思はず「現つ神我が大君」と口ばしるのであつた。而も之れを輔翼し奉る近衛首相も若くして堂々たる風丰、金枝玉葉高松宮殿下も御年齢いとも御若く、その凛々しき御姿、眼のあたり拜しては、「古き國日本よ、而も若々しく新しき國日本よ」との感懐に恍惚たらざるを得なかつた。

更らに我等の恐懼感激に堪へなかつた事は、盛儀の兩日に亘つて有り難き勅語を賜はつたことである。而も之を玉音そのままに拜した事である。其の宏大無邊の叡慮、陛下が如何ばかり肇國の大精神、八紘一字の皇謨御紹述に、御専念遊ばすかを拜察し奉る時、有り難しとも忝なしとも言ふべきすべを知らぬのである。たとひ南蠻北狄と雖、此の皇恩には感泣せぬ者はないであらう。乃ち第一日には「我カ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアラントヲ期セヨ」と御諭しになつた。第二日には、「今ヤ一大世變ニ際會スルモ平和ノ日ナラスシテ恢復セラレ萬邦ト俱ニ其ノ慶ニ賴ランコトヲ望ム」と仰せられた。何といふ寛仁の叡慮であらう。之れを拜し彼れを懷ふ時、吾々には爰に一層責任重加の感を深くし、余の如き老夫既に衰へて、復た能く爲すことなしと雖、斃れて後已まんことは、余が平素の信條である。大いに感憤興起、臣道實踐の決意を固め、分に應じて大政翼賛の實を擧げなければならぬと深く心に誓ふのであつた。

式典の感激

長崎縣師範學校長 上 田 剛

七八

目映きまでに晴れ渡つた晩秋の空、大内山の松の木の間より禁闕の薨が紺碧に一線を劃して拜せられる。私共は今式場の南端に近く、宏大無邊な人の波に没しながら、沁々参列の身の仕合を感じるのである。

私は本縣代表の先頭に居たので、外國在住者總代のすぐ後の席に着いたのであつたが、滿洲蒙疆は固より支那南洋の人々まで、今日を晴れと威儀を正して居る有様を見て非常の感激を覺えたのである。八紘一字の大業は已に此の聖紀節に顯著であつた。

陛下の出御を待ち奉る間の敬虔な氣持は、到底追懐の及ぶ所でないが、其の間、八十四歳になられる島原市長が、止むなく休養所に退かれるのを見て、御前を畏む翁の心中察しやられた。私と同列の熊本縣代表、之も老齡の方であつたが、口から泡様のものを吹きながら、死んでもよいと頑張つて居られる様子であつた。私は其の氣持にも同情が出来た。かゝる高齡の方々が、一期の譽と、此の式典に参列せられたのであるが、年齢こそ違へ五萬餘千の代表の心は皆同じである。

伸び上れば或は拜めたかも知れないが、遠く隔たる身には、只低頭して心眼に御姿を拜する外はなかつた。微かながら御聲、御聲と申上ぐる事が出来なければ御音を、親しく此の耳に拜聴し奉

つたかしこさ、「玉の御聲のかゝるうれしさ」と詠まれた歌は、正しく私の感激其のものである。

古歌に「包まば袖も綻びぬべし」とあるが、かほどの喜びを胸に藏すは勿体ない。私は早速我が親愛なる生徒諸子に打電して喜を頒つたのであるが、彼等が我が事の様さに此の光榮を祝ふであらう事を想見し、私の歡喜は正に常人の數百倍であつた。

思へば紀元二千六百年は、單なる時間的觀念ではない。我が民族が幾多の試練を経て護り來つた國體の表現である。正に是れ生々休まず、無窮に向つて發展する絶大な生命力である。時恰も世界の變局に際會し、東亞に漂へる秩序を修理固成するのが我國の使命であつて、肇國の大業は今正しく繼承の半途に在りと云ふも過言でないのである。神武東征の御事は申すも長き事ながら、百難不撓の大勇あらせ給はずば、どうして八十醜鼻帥を従はせられる事が出來たであらうか。今日の時に當つて、千辛萬苦は寧ろ我等の望む所である。

見渡せば五萬三千、場を埋むる人々の顔は感激に輝いてゐる。私はこゝに國民を代表する貴い「盛り上げる力」を見た。一君萬民、大政翼賛の新體制は、此の場に溢るゝ精神の具体化でなければならぬ。私は退いて、一個職域奉公の「盛り上げる力」となると共に、願くば微力を教育の聖業に傾倒し、億民をして正しく強く「盛り上らせる力」となつて、臣道實踐の誠を致したいものと固く誓つた次第である。

七九

曠古の盛典に列して

長崎縣立對馬中學校 内村直太郎

一系無窮の寶祚を承け給ひてよりこゝに二千六百年、この佳き年を迎へて、一億の民草ひとしく歡喜に胸ふるはせ、光榮に眸を輝かせて待ち奉りたる曠古の盛典、紀元二千六百年記念式典は、畏くも 天皇 皇后兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉りて、今上天皇陛下御即位禮の佳辰に當る十一月十日秋清涼の宮城外苑古式床しく、新裝完く成れる式典場に於て、いとも嚴肅莊大に舉行せらる。まことに民族生成の巨大なる歴史的一齣とやいはむ、遍くふりそぐ八紘一字の光を浴びて天津日嗣の大稜威をおろがみ奉ること、獨り參列者の恐懼感激たるに止まらず、亦實に一億同胞歡天喜地の極致といふべし。

秋空の一碧清嚴の氣に掩はれたる麗日佳辰、仰げば瑞氣棚曳く大内山、寢殿造秀麗に聳ゆる典雅そのものの式殿、秋陽に高く燦として光芒を放つ銀色の鉞、そよ風に翻る華麗なる朱色の長旗、さては奉祝の歡喜を一杯に孕む幔幕の流れ、いづれ尊嚴優雅ならざるはなく、眼をあぐれば式殿中央に輝く 玉座並御座柄として日月の如し、掃き清められたる玉砂利は神代の如く清淨なる氣を放つこゝ式場に生けるしるしの感激こめて列する者五萬有餘、つんざく感動と燃ゆる新しき希望とを懷きて聲なく肅々として襟を正す。

ゆるやかに時は移りて午前十時四十七分、二重橋近く莊重なる喇叭の音微かに響く、今ぞ 兩陛下の出御を仰ぐ時、五萬有餘參列者の瞳は凝つて崇高さに胸詰まる。御軍裝御凜々しき 天皇陛下御洋裝御神々しき 皇后陛下、目の邊りに仰ぎ奉るその御尊さ、感激は刻々に高まる。またも起る軍樂隊の國歌吹奏、 兩陛下には式殿に出御、靜かに 玉座並御座に着かせ給ふ。近衛首相式典開始奏上、諸員最敬禮、全員國歌齊唱、 陛下の御前に歌ひ奉るこの君が代の莊嚴、澎湃として五萬餘たゞ一に和す、壯大なる調べのうちに、龍顔いとも御歴しく拜するわが大君の尊さ御氣高さ、全國民の赤誠をこめて首相の奉る壽詞は一億の歡びと覺悟とを披瀝して莊重に流れ出づ。玉音朗々國民の嚮ふところを昭示せさせ給ふ優渥なる勅語、風に靡く草の如く最敬禮にひれ伏す五萬有餘人滿場たゞ渾然たる感動の融和一となつて、たゞ想ふは、われらが生を享けたる皇國日本の尊さ美しさあるのみ。身を正して立てど、眼は涙にくもりて見え胸は搏つ鼓動に躍る。頌歌終り、威容を正したる首相の天にも通れと奉唱する「天皇陛下萬歲」感激はつひに絶頂に達し、われ知らず進る萬歳の奉唱、高くあがる雙の手、盛儀に參列の御民われら今生けるしるしありて、享けたる世紀の歡び思ひつゝ、宏遠悠久なる聖壽の萬歲を宇内に轟けとばかり聲をかざりに唱和し奉る。かくて諸員最敬禮のうち天機御麗しく還幸啓あらせらる。

感激と興奮との連續に夜は明けて、式典日和にもますばかりの秋晴れ燦たる麗日、昨日の莊重典雅なる飾付けは華麗絢爛鮮やかなる装ひとなり、式殿前に朱の勾欄輝く舞臺を設け、參列者の卓上には白布包みの食饌まばゆきまでに竝ぶ。

折しも大空高く轟く號砲は、兩陛下宮城御出門の時刻を報ず。大内山の翠濃き邊りより遠く微かに響く君が代の喇叭に、諸員起立、鹵簿肅々と進ませ給ふ御模様を臉に浮べ、參列の赤子凝然として動かさず、一旦着席したる諸員は君が代の奏樂と共に再び硬直して起立す。兩陛下出御、遙に仰げば畏くも御眼鏡のちらりと光るを拜し奉る、恐懼胸躍るを禁する能はず。近衛奉祝會長參進、奉祝會開始の旨奏上、こゝに愈慶祝の盛儀開始さる。忽ち起る君が代の奉唱、波濤の如き五萬有餘の奉唱莊重に終れば、暫しは風も動かさず咳嗽も聞えず、たゞ靜寂あるのみ。突如このしゝまを揺り動かして場内擴聲機より流れ出でたるは、畏くも奉祝會總裁秩父宮殿下御代理高松宮殿下の御肉聲豊かにわれらの頭上に溢れ、朗々として御淀みなく奏上遊ばさるゝ奉祝詞、中に臣宣仁と仰せらるゝ御一言を拜し、われら胸扶ぐらるゝ思ひ、尊さの極みならずして何ぞ。續くグルー米大使の奉祝詞奏上の後、ああ再度賜はる優渥なる勅語、御雄渾極りなき玉音はひれ伏すわれらの上に颯々と御力強くも遍く拜し奉る。畏くも一段と御力強く御結びあらせられたる御餘韻に全員はまたもはつと深く頭を垂る、瞑目暫し、遠つ皇祖の御全靈いまこそ大空の限りなき深きを御飛翔ありて悠久二千六百年の讃頌に群れ給ふか、感激に胸迫り眼曇りて舌言を成さず。

畏くも兩陛下の御前に御饌並御酒奉供、參列諸員亦杯を擧ぐ。舞臺上には奉祝舞樂「悠久」演奏せられて興を添ふ。臙脂の袍、白絹の袴、奈良朝武人のきらびやかなる裝束つけたる四舞人は、くさぐさの奏樂につれ「末の世の末の末までわが國はよろづの國にすぐれたる國」の歌方に和して、颯々袖を翻し、閃々秋陽を截る太刀の舞を舞ひおさめて、幽玄陶酔の境地を現出すれば、續い

て起る奉唱團の齊唱は最後の嵐を呼びて奉祝の氣頂點に達す。次いで高松宮殿下御發聲の聖壽萬歲に全員聲高らかに唱和し奉り、諸員最敬禮裡に龍顏御麗しく還幸啓あらせらる。

かくて前後二日間に亘る盛典に、親しく一億國民奉賀の赤誠を受けさせ給ふ。まことに君民一體の慶典、曠古の盛觀なりといふべし。參列の赤子齊しく龍顏のいよいよ御麗しく、玉體のますます御壯んなるを、目のあたり拜し奉りて、皇運の無窮なるを想ひ、抃舞惜くところを知らざるなり。悠久二千六百年、時に隆替なしといひ難きも、苟くも事あれば必ず君民一體の精華を發揮し時艱を克服して、皇基曾て動かさず、上御歴代の仁愛と下忠厚の民俗と、天覆ひ地載せてここにこの昭代を迎ふるに至る。今この盛典に會して緊迫せる内外の情勢を願望するとき、今更に生を皇土に享けたる慶福に感銘せざるものあらむや。

されど今世界は擧げて狂瀾の渦中にあり。新秩序の旗幟高く翳し、艱難を乗り越え更に進まむ新日本、嘗に歴史の古くして尊きを祝するのみにして可ならむや。よくこの非常時局下にこの慶典を迎へたる嚴肅なる意義を體得せざるべからず。世界は今や未曾有の轉換期に際會し、皇國亦その總力を擧げて東亞新秩序の建設に邁進しつゝあるの時、恰もこの光輝ある紀元二千六百年を迎へたるは國運の前途に赫々たる光明を齎すに示唆を與ふるものにあらざるなきか。

聖戰既に四年、目的の完遂尙容易なりといふべからず。三國條約の成るあるも、東亞共榮圈の確立、前途尙遠遠の大業なりといふべし。しかもこれを神武天皇御東征の御苦艱に比し奉れば、今直面せる時局の如きは真にいふに足らざる所なりとす。この祝典は具さに遠皇祖御創業の御理想を追

慕し、天業恢弘に國民的覺悟を新にするの機會たらしめざるべからず。

國を擧げて、斯くばかり大なる歴史的盛典の行はせられたること、これを以て嚆矢とせむ、しかも聖戰酬なるの時際會したる。事は最も深き意義を含蓄するものとして國民齊しく肝に銘記すべきなり。水を見ては源を思ふ譬の如く、悠久二千六百年、寶祚の無窮なると萬邦無比なる我が皇國の歴史を顧み、更に無限永劫に發展すべき國運の將來を思念し、現に遭逢せる未曾有の國難を一大試練としてこれを突破するの覺悟と勇氣とを神明に誓ふべきなり。

身微賤以て曠古の盛典に列するの機會を得たる、その光榮その感激極まるところなし。今やこの覺悟を新に深くせざるべからざるの秋、感激と興奮とは永久に醒むる時あらざるべし。

曠古の盛典に列して

梅野邦太郎

神武天皇が橿原の宮に於て、即位の大典を擧げさせ給ひてより、悠久こゝに二千六百年、國運は益々隆昌にして、建國以來未曾有の國威伸張の機に臨んでゐる。國民誰かこの佳き年を迎へ得たるを喜ばない者があらうか。

此のめでたき年を祝福すべき曠古の式典並に奉祝會は、十一月十日十一日の兩日宮城外苑に於て舉行せられた。一億國民代表として此の盛儀に參列する光榮に浴するもの五萬餘名、布衣の臣たる

私も其の一人にして洵に感激の至りであつた。

天氣は兩日共に一點の雲なき日本晴、さすがに神國日本なりとの感を深くした。

式場は廣大にして、正面の式殿には紫縮緬の御紋章付幕が高く張り廻され、左右には奉祝紀元二千六百年の文字も鮮かなる錦旗が飾られ、何とも名状しがたい神々しさであつた。

長くも 兩陛下には兩日とも臨御遊ばされ、式典には近衛内閣總理大臣の壽詞奏上についで、又奉祝會には高松宮殿下の奉祝詞奏上についで、優渥なる勅語を賜はりしが、玉の御聲を拜したる時は、眞に感激の極に達し身も心もをのくばかりであつた。

祝賀の饗宴には、前線將兵を偲ぶ野戰料理と家寶として子々孫々に傳ふべき記念品とを戴き、恐れ多くも 兩陛下の御前に於て、盃を擧げて寶祚の無窮を祝ひまつる光榮には、ただく感泣の外はなかつた。

第一日は近衛總理大臣の發聲により、第二日は高松宮殿下の御發聲によつて、參列者一同天地を搖がす如く 聖壽の萬歳を三唱した。

此の盛儀に於て受けたる非常なる感激は、私の終生忘れ得ざる所であつて、益々臣道の實踐に努め、滅私奉公以て 聖恩の萬分の一に報いん事を期す。

今やわが國は聖戰正に三年有餘、大東亞共榮圈の確立より世界新秩序建設への理想實現に奮闘しつつあるのであるが、此の理想を完全に實現し得るか否かは實に國運隆替の岐るる所である。一億國民は此のめでたき年を慶祝するに方り更に此の重大時局をよく認識して益々協心戮力、如何なる

困難に遭遇するとも決して屈することなく、一路邁進して以て所期の目的を達成するの覺悟を新たにらしむべきである。

紀元二千六百年式典に參列して

長崎勞働紹介所長 大 申 清 好

大東亞新秩序の愈々建設せられんとする世に生を享けて、輝く榮譽の今、我等は時恰も悠久二千六百年を壽ぐ曠古の盛典を行はせらるゝ聖代に巡り合せ、更に畏れ多くも 天皇后兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉りての晴れの式典に列せしめられ、數々の光榮に浴する此の身は只々聖恩の有難さに感泣するばかりなり。

宮城外苑瑞雲たなびく日本晴れの輝しい式典の朝、豫備集会所に集りし各府縣代表凡そ五萬餘の赤子は、いとも幸ある今日の晴れの參列に面をかがやかせながら興奮そのもの、禮装に身をかため記念章を胸間にひらめかしながら、肅々として式場に入る體を見て、いよ／＼身うちのひきしまるを覺ゆ。

やがて啾唳たる喇叭の響はあたりをはらふ、兩陛下の御出門なるべし。奏樂君が代始まる中に御殿の玉座に出御あらせらる。一同最敬禮、今日あたり至尊を拜して正視するに餘りにも畏れ多くおのづから頭は下る。一同國歌を奉唱し、近衛總理大臣は壽詞を奏上す、一億一心聖壽の無窮を

祈念し奉る言言只嚴にして誠あり。

天皇陛下に於かせられては此の日長くも參列者一同に勅語を賜へり。場内寂として身は天外にあるを覺ゆる中に、玲瓏たる玉聲かなた天の一角より拜する心地して、只感涙の下るを如何ともすべからず。合唱隊の紀元二千六百年頌歌齊唱に吾にかへれり。續いて近衛總理大臣の發聲にて萬歳を三唱す、全國隅々までも響けとばかり、誠心そのものの唯高らかに嵩呼しつづけ、國民としての赤誠を傾け盡せり。

萬歳の聲は大内山に衍して轟き渡る。かくて諸員最敬禮のうちに 兩陛下には御機嫌いとも麗しく入御あらせらる。

あゝ、何たる莊嚴なる式典なりしぞ、遠く二千六百年前に、神武天皇橿原宮に於て行はせられし御即位の禮以來の嚴肅なる國家の尊き御儀式を拜するかしこき、百一發の皇禮砲は殷々としてあたりをはらひ、皇國の四方に轟きわたりて國威嚴然として侵すべからざるものあり。

明くれば十一日、昨日につづく日本晴れ、宮城外苑にて行はせらるゝ二千六百年奉祝會に列す。此の日は授與せられし八紘一字を表彰したる記念章を胸間に佩用し、重ねがさねの光榮にひたりつゝ、豫備集会所より式場に入る。

奉祝會より下されし記念品と僕は整然と配置しあり、記念品の一は列聖珠藻と題し皇朝歴代の和歌を謹選したるもの、他の一は聖徳餘光と題し御歴代の中で御著作御撰述にかかるものを選びて其の聖徳を偲び奉るの資とせしもの、僕は紀元二千六百年の聖代を壽ぐ限りなき喜びの裡に、遙に思

ひを戦場の將士の上に馳せ其の奮闘を偲ぶよすがにもと、我が國古來の食物を材料とした軍用携帶食を調へたるものともれ承る。參列者一同其の心盡しに感激せり。全員起立、陸海軍軍隊の君が代表奏樂の内に、天皇皇后兩陛下出御遊ばさる。一同最敬禮、國歌君が代奉唱後、紀元二千六百年奉祝會總裁宮殿下の奉祝詞奏上、次で在本邦外國使臣首席の奉祝詞奏上あり。畏くも聖上陛下より參列者一同に御勅語を賜ふ。有難しとも又かたじけなしとも、只々我れを忘れて感涙に咽ぶ。着席をゆるされし時はハンカチを手にせざるものなかりし。

開宴となるや參列者の恐悦と歡喜が湧き充ち、遙か、聖上を拜することの今更に尊く勿体なく、硬直した手に辛うじて御祝の盃をあげ得しのみ。其の内宮内省樂部の奉祝舞樂、陸海軍軍隊の吹奏樂「大歡喜」「紀元二千六百年頌歌行進曲」「奉祝讚歌」、全國學生代表三千名より成る合唱團の奉祝國民歌「二千六百年」の齊唱あり。次で二千六百年奉祝會總裁代理高松宮殿下の御發聲にて天皇陛下の萬歲奉唱あり、天地も震へと光榮と恐懼の極腹の底からあらん限りの聲をしぼつて和唱し奉る。かくて一同最敬禮、君が代表奏樂の内に、天氣御機嫌御麗しくいとも御滿悦に、兩陛下には入御遊ばされしなり。

悠久二千六百年を壽ぐ君臣和樂の聖紀の饗宴に、終日陽も麗らゝかに晴れ渡りし奉祝日和に恵まれし宮城外苑の大歡喜も、茜さす陽の漸く落ちなんとする頃、滯りなく終を告げ、一同興奮の夢さめやらぬおもちにて式場を引き下れり。

我等は世界史上に燦然たる光輝を放つ、意義深き祝典に列せし、此の無上の光榮を一同に分ち、

共に和衷協力、以つて國艱を排し國威を宣揚して聖慮を安んじ奉る心に燃えて、再び參列列車にて退京せしなり。

北松浦郡大野町長 太田 早苗

畏くも 聖上陛下の御臨幸を仰ぎ奉り、宮城外苑に於て歴史的儀禮たる皇紀二千六百年を奉祝する式典並に祝典を執り行はせらるるに當り、町民代表として參列の光榮に浴したることは、生涯を通じての最大榮譽とするのである。世界は廣く、國家は多きもその中で二千六百年の歴史を持ち、一系連綿然かも隆々として無限に榮え、斯くも意義深き盛儀を行ひ得るは恐らく日本帝國のみ爲し得る行事たることを思へば、只管感激を深刻ならしむるのである。御盛儀當日には、天皇陛下皇后陛下親しく臨御を忝うし、外國使臣及帝國內外五萬三千餘の代表者に、玉音朗々優渥なる勅語を下し賜ひ、盛典の意義を御示しあらせ給ひしことは、一同聖恩無窮恐懼感激に堪へざる所である。斯くも有りがたき盛儀に相會ふことは國民最高の名譽とする所にして、皇恩の彌益々深きことに感銘せず居られないのである。惟ふに其の根源とする所は遠く二千六百年の古に遡り、神武天皇の肇め給ひし建國の大理想精神に基くものにして、歴代の祖宗は代々之を承繼ぎ給ひ、又我等の祖先は此の尊き天業を翼賛し奉り、八紘一宇の精神を體し、常に忠君愛國の本義を全うしたる、赫々たる遺功に依れるものにして、悠久二千六百年の久しきに亘り、我が建國の業績を世界一等國の班列

に引上げられたる皇祖皇宗の不滅の御遺業と、祖先の業績に對し赤心感激の誠を捧げねばならぬ。今や帝國は永遠に亘る生命線を開すべき東亞共榮圈の確立を期する爲、國家の總力を擧げて之れに當り、萬難を排して事業達成に邁進中にして、之が完遂は現代國民に課せられたる大使命にして、其の責務は何人も之を自覺する所である。此の盛典を契機として克く御勅語の趣旨を奉體し、一億一心、益々國民精神の發揚と國力の充實を期し、堅忍持久滅私奉公の精神を強化し、相率ひて聖業翼賛に邁進し、以て聖旨に副ひ奉り、同時に榮ある盛儀の趣旨を徹底し、國家興隆の基礎を確固たらしめねばならぬ。

茲に謹んで聖恩の鴻大無邊なると國體の尊嚴なることに衷心感激し、重大時局御奉公の萬全を果すべき一大覺悟を惹起し、以て式典參列の所感となす。

盛典に列して

太田 傳 三 郎

爰に皇紀二千六百年奉祝の式典を擧げられ、草莽の微臣太田傳三郎縣民を代表して參列し、天皇皇后兩陛下の行幸啓を仰ぎ、上正面に 玉顔を拜し奉り、最も莊嚴なる此盛典を奉祝し 聖壽の萬歳を奉唱するの光榮を忝うしたるは、管に、我一人の榮譽たるのみならず、永く、家門の譽として只管恐懼感激言ふところを知らざる次第であります。

盛典兩日は、早天起床心身を淨め、盛徳を欽仰感佩に堪へなかつたのでありますが、眞に明德光被して、天日共に瑞氣爚き、洋々坦々たる悠久日本の眞姿こそ斯くあるものかと感一層深きものがありました。

私共は、叙慮深き勅語を奉體いたしましたして、此國家非常の秋こそ、方に、國體の精華を世界に宣揚すべき絶好機會の展開なるを看取し、聊の躊躇放逸なく、敢然勇往邁進して、舉國新體制の實を發揮し赤誠を傾注して、内に外に、臣道を實踐窮行し、以て宸襟を安じ奉るの一事を、茲に謹んで銘記宣誓いたすものであります。

盛典に參列して

大 坪 虎 三 郎

世界史上に比類なき、曠古の盛儀たる、皇紀二千六百年奉祝典に長崎縣民總代の一員として、參列を許されたる事は、無上の光榮と存じました。

五萬五千の多數の參列者にも係らず、式場に於ける靜肅さはさこそと思はれました。殊に兩陛下の出御を仰ぎ見ました時は、何とも申し様もなき感に打たれました。あの萬歳を奉唱しました時、一君萬民の我が國體の有り難さ、此聖代に生れたる歡喜は譬へ様もありませんでした。私も今二子を國防の第一線に送つて居りますが、大東亞建設のため、銃後の我等も身命を捨て、

職域奉公をなし、聖旨に副ひ奉らねばならぬと存じます。盡忠報國臣道實踐こそ、日本臣民たるもの、一日も忘るゝ事の出来ない事だと感じて居ります。

九二

紀元二千六百年奉祝式典に参列して

區裁判所監督判事 大野初熊

紀元二千六百年式典及祝典に参列させて頂いて、最も痛切に感じましたことは、金匱無缺の我が國體の尊さ、有難さを如實に感得し奉つたことであります。

當日は、七時から八時までの間に集合する約束になつておりましたので、早起、身を清めて、司法省に集り、一同と共に祝田門から参入いたしましたして所定の席につきました。

前日から氣づかはれてゐた天氣も今日はぬぐつたやうに晴れ渡つて、めづらしい程うらかな奉祝日和となり、大内山には瑞雲棚引き、千代田の森の松の翠も一きわ鮮かに拜されました。日本全國一億の蒼生の、各地各層の代表者が肅然と襟を正して舉式を待つて居りますところに、喇叭たる喇叭の音が鳴りひびきまして、間もなく君が代の奏樂が初まりました。やがて 兩陛下には式場に出御遊ばされ、正面の玉座につかせ給ひました。金屏風を御脊に着座あらせられました神々しくも尊き御英姿、御玉容を遙に拜しました一瞬、有難さに手足も打ちふるう程の感激を覺えました。

式も次第に進み、近衛總理大臣の壽詞奏上後、畏くも優渥なる御勅語を下し賜つたのであります

が、玉音朗々として大空に響き、五萬餘の参列者の心底深く泌み徹つて、皆等しく感涙滂沱たる有様でありました。

翌日の奉祝會は、きのふにも優る好晴で、風鳶ゆるやかに天空に舞ひ、千代田の森は梢も動かすまことにきよらかなよい天氣でありました。此の日、高松宮殿下には、奉祝會總裁宮御代理として奉祝の詞を奏上遊ばされたのでありますが、「臣宣仁謹ミテ言ヌ」と仰せられたお言葉を拜しました時は、我國體の尊嚴、君臣の分、柄として明らかなるものあるに感激し、思はず熱い涙がこみあげてくるのを覺えました。

此の日も重ねて有難き御勅語を下賜あらせられて後、君臣和樂のかたじけなき大饗宴が開かれたのであります。兩陛下の御祝の御膳と同様の酒饌を賜ひ、一同和やかな氣分になつて、大御前に盃を重ねました。仰ぎ拜すれば 陛下にも幾度か盃をとらせ給うた御様子でありました。

かく君臣一様に盃をとる情景は眞に一家の如く、父子の情愛のあふれるやうな靄々たる感じでありました。陛下には我々民草を常に御自らの赤子といつくしみ給ひ、義は則ち君臣、情は則ち父子と仰せられる大御心を拜し、日本固有の大家族的國家たるの所以を目のあたりにまぎ／＼と體得させて頂く事が出来ました、歡喜と感激とは拙い筆ではたうてい申しつくせぬ程であります。

最後に高松宮殿下御發聲のもとに聖壽の萬歳が奉唱されましたが、この歡喜とこの感激を共にこめて、世界の果にもひびけとばかり、腹の底から、力のかぎり唱和いたしましたことでありました。

皇紀二千六百年のこの聖代に生れ合ひ、しかもこの御恩澤に浴することが出来ました光榮は長く

九三

子々孫々につたへて参り度いと思ひます。その昔「御民われ生けるしるしあり」と歌ひ「海ゆかばみづくかばね」と誓つた古人の感激が心から思ひ合はされまして、きはまりなき聖恩の有難さに感泣いたして居る次第であります。

北松浦郡平村長 川 向 勘 十 郎

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會に参列し、親しく 兩陛下の親臨を仰ぎ萬歳を奉唱し、剩へ優詔を拜し得たる感激は、古歌に

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなきに涙こぼるゝ

古歌其儘の感想に有之候

紀元二千六百年式典竝に奉祝會参列の感激

長崎中學校長 春 日 重 泰

昭和十五年十一月八日、紀元二千六百年の式典参列の特別列車に乗り込み、天地も榮ゆる大御代に生れ合ひて、この盛儀に参列する御民吾の光榮に深く心を打たれつゝ、何時しか關門海峡を渡り

山陽道も過ぎ、東海道に入りて、九日の夕方静岡に差しかゝれる頃、車窓より眺むれば黒雲垂れ籠めて靈峰富士の偉容を仰ぐこと能はず、明日の天氣は如何あらんかと心竊かに案じつつ着京せしが翌早朝旅館の二階より、雲翳散じて豊榮昇る朝日の光に映する富士の高嶺を遠望せる時は、嗚呼御稜威の致す所にして又歴代神靈の加護なりと、覺えず口をついて出で、心の躍るを禁する能はざりき。やがて服装を整へて日比谷公園の府縣代表集合所に勢揃をなし、順次隊伍を組み、宮城外苑の式場に向つて蜿蜒長蛇の列を進む。只見る馬場先門は光り目映ゆき劍戟に色鮮かなる長き旛を垂れたるもの林の如く樹ち並び、其下には薫りも高き黃菊白菊を栽ゑ連ねたるに、身も心も清められ引き締めらるる心地して、式場内の座席に着く。見渡せば綠色深き大内山を背景として木の香も高き新殿を前にしつらへ、三方には天幕を張り巡らしたる内に五萬餘の参列諸員は寂として聲なし。全員起立の合圖と共に、君が代の奏樂裡に、兩陛下には出御あらせられ、諸員最敬禮、國歌奉唱。終れば、近衛内閣總理大臣は恭しく御前に進み、聲高らかに壽詞を奏上せられぬ。思へば二千六百年の昔、檀原宮の御即位式に、天つ神の壽詞を奏上したる天種子命は近衛首相の遠祖なり。吾等も亦同じく百代の臣たることを思ふ時、感慨特に深きものあり。壽詞畢れば 聖上陛下には御起立遊ばされ、玉音いとも朗かに勅語を賜ふ。五萬の参列諸員は、首を垂れ片言隻句も聴き洩らすまじと、肅として水を打つたるが如し。次で音楽學校生徒及陸海軍軍樂隊の紀元二千六百年頌歌の後、近衛首相の發聲にて、雙手を舉げて叫べる萬歳の聲は、大内山に木霊して、天を搖がし地も裂けんばかりなり。斯くて 兩陛下は諸員最敬禮の裡に入御あらせらる。かくして千載一遇の式典は嚴肅

無比の中に僅に數十分にして終りぬ。

明くる十一日の奉祝會も昨日に劣らぬ澄み渡りたる秋晴の好天氣なり。午後一時半、諸員最敬禮の裡に、兩陛下臨御あらせらる。諸員一同陸海軍の軍樂隊に合して君が代を奉唱し、次で奉祝會總裁秩父宮殿下に代り高松宮殿下は高らかに祝詞を奏上あらせられ、「臣宣仁謹ミテ言ヌ」と結ばせ給ふ。次で勅語を賜ふ、玉座に在すは一天萬乘の大君なり、大前に額き給ふは、御弟の宮に在し給ふ。兄弟君臣の分を明かにし、悠久二千六百年の寶祚を壽き給ふ、神々しくも亦莊嚴なる光景を目の當り拜したる諸員は感極つて歔歔流涕、暫しは面を上ぐるものなし。次で在本邦外國使臣首席米國大使の明快なる奉祝詞の奏上は時局柄として人々の心を引くものあり。右畢つて野戰料理の開宴、劈頭紀元二千六百年奉祝「悠久」の舞樂は、赤き裝束に黄金作りの太刀佩ける四人の舞人の右に左に前に後に踊り舞ふ様、天日に映じて優雅なること漉りなし。空は淺緑に澄み渡りて雲翳なく、地には君臣歡樂の繪卷物を展開して、順和景明桃源の春の如し。次で起る陸海軍の囀曉たる音樂に續きて、全國學生生徒の代表三千人により高く謳はれたる、紀元二千六百年奉祝歌の齊唱は如何に若人の胸を高鳴らしめしか、彼等は此光榮と感激とを深く心に銘じ、永く盡忠報國の血潮に湧き立つものあるべし。最後に高松宮殿下の御發聲にて萬歳を三唱し奉り、茲に二日間に渡る曠古の式典は芽出度く終りを告げぬ。

思へば聖戰第四年の眞只中に、輝く紀元二千六百年は朝日の光の如くにも差し來りぬ。然して今や我國は世界の檜舞臺に立ち、毅然として建國の大道を進めんとす。宜しく古き皇國の古き歴史を

尙び、新しき御代の新しき使命を自覺し、速に我が肇國の大精神に立ち還り、八紘一字の皇謨に基き、東亞新秩序の建設と東亞共榮圈の確立とに邁進すべきことを諭させ給ふ神慮の深遠なる、洵に恐懼感激の至りに堪へず。茲に參列の光榮を録して之を後昆に傳ふ。

曠古の盛典に列して

片田 江駒 太郎

皇紀二千六百年を壽ぐ、曠古の盛典を行はせらるる聖代に生を享け、而かも此輝しき式典に參列の光榮に浴し、親しく、兩陛下を拜し奉る、眞に日本臣民たるの名譽と幸福とを得し身の只々宏大無邊なる皇恩の有難さに、心の底より感激するのであります。

十一月十日、奉祝二千六百年その感激の佳き日、燦々と降りそそぐ麗日を浴びて、富士の高峯は雪冴へて、肇國の芽出度昔の光を輝かし、翠いや濃き大内山の空高く數百の瑞鳥は此式典を祝するが如く飛翔する中に、宮城外苑に於て、畏くも、兩陛下の行幸啓を拜して、此の曠古の式典は華かにも莊重に舉行せられました。私は此光輝ある式典に參列の光榮に浴し、兩陛下御親臨の尊嚴なる式場に、全國よりの五萬人の參列者の靜肅さと式典の神々しさに打たれて、先づ感涙に咽びました。廳がて式始まるや、「君が代」の齊唱に際し、皇恩の無窮なるに感極まり熱淚滂沱、近衛首相の明朗なる壽詞奏上、次で玉音朗かに勅語を賜はりたる時、一同頭を垂れて、何れも感涙に咽ぶ聲

が聞える。次に首相の萬歳に和唱したる時、日本帝國の一層の力強さを感じ、只々感激の涙禁する事が出来ませんでした。

翌十一日、奉祝會の折も前日同様、大内山のかなた、空高く數百の瑞鳥飛び舞ふ中に、兩陛下を拜し、高松宮殿下が御莊重に奉祝詞を御奏上、「臣宣仁」と力強く御讀上げ遊ばされた時は一層感極つて涙に咽びました。やがて奉祝の宴は開かれ、君臣一堂に會して其樂を共にし、しかも尊き龍顔を拜しながら、御盃を頂きました時は、一入感涙に咽び、愈々報國の念に燃えたのであります。

以上かすかすの感激に身を震はしました事は、私の生涯を通じ、最高最大の感激でありまして、衷心より日本國民たるの光榮に感泣し、只々天壤無窮の皇運を扶翼し奉り、以て臣道實踐を誓ひ、粉骨碎身報國の赤誠を捧げ、大政翼賛の完遂に最善の努力を致したいと思ひます。

參列前、式場、會場、終了後等に於ける感想

大日本傷痍軍人會長崎縣支部長崎市分會長 加藤 九市

皇紀二千六百年の大祝典……八紘一字の大理想を建國の精神とせる、皇國大日本の姿は、天壤無窮に榮えに榮え、皇統は連綿として茲に二千六百年……是ぞ三世を一貫する、久遠悠久の光輝ある發展の途上とは、……オ、何と云ふ驚異、何と云ふ感激であらう。

吾等の祖先は、此の永き年月を、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死ぬめ」と此の大聖業を扶翼顯現すべく滅私奉公の誠を捧げて來たので有ります。然るに私は斯くも名譽ある祖先の血を享けて、かの日露の戦役に參加し、橋頭の戦闘に於て、無念にも敵彈を胸部に受けて再び起つ事を得ず、軍人として其の本分を、完遂し得なかつた身であるにも拘らず、此の曠古の大祝典に參列の光榮に浴せんとは……

夢か、夢にあらず、現か、現にもあらざる此の事實に、私は、謂ひ知れぬ感激に胸打たれて、嬉し涙に暮れたのであります。

爾來十數日の間、只管齋戒沐浴して心身を清め其日の來るのを、御待ち申上げたので有ります。萬邦無比の此の大盛儀は、十一月十日を以て舉行せられました。昨日迄は、曇り勝ちであつた天候が、恰もけふの佳き日を祝ふかの様に、見渡す限り紺碧の天空は、高く廣く晴れ渡り、心身共にすが／＼しくなりました。躍る心を引き締め乍ら、宮城外苑に於ける式場に參列致しました。

聽て殷々と轟く皇禮砲と、唳々と鳴り響く國歌吹奏裡に、天皇 皇后兩陛下に於かせられては各皇族宮殿下を初め奉り、諸員の奉迎をうけさせられつゝ、定めの玉座に着御あらせられました。此時近衛首相は、恭しく御前に進み、全國民を代表致しまして、謹んで壽詞を奏上致しましたところ、陛下には龍顔御麗はしく、優渥なる勅語を賜つたのであります。續いて近衛首相は再び御前に參進し、聖壽萬歳を唱へ奉つたのであります。オ、此の奉唱こそは「ラヂオ」を通じて、全國民に傳へられました。茲に有史以來未曾有の、待ちわびし一億國民の、心からなる歴史的な一大唱和と

なつたのであります。時に午前十一時二十五分でありました。兩陛下には御機嫌殊の外御麗はしく諸員の奉送をうけさせられつゝ、還御遊ばされたのであります。

翌十一日の奉祝會には、前日の如く、兩陛下の行幸を仰ぎ奉り、高松宮殿下御主催の下に茲に國家的一大祝宴が催されました、參列の諸員一同に有難き數々の御賜餐あり、終つて、高松宮殿下には御前に御參進ありて、聖壽萬歳を奉唱遊ばされ、諸員一齊に唱和し奉つたのであります。畏くも、兩陛下には、御機嫌御麗はしく諸員奉送裡に還御遊ばされまして、此の光輝ある紀元二千六百年の大祝典は、芽出度く茲に終りを告げたのであります。

私は此の二日間に亘る舉國的大盛儀に、卑賤微力の身を以て、參列の光榮に浴しました事は、是れ偏に上皇室の宏大無邊なる御仁慈による事は申す迄もなく、同志たる會員各位の御協力と、上司各位の御指導と御援助の賜でありまして、傷痍軍人長崎市分會として、又一家一門の名譽として、只だく、恐懼感激の外はないのであります。爾今益々傷痍軍人として、君國のため、七生報國の臣道實踐に、渾身の努力を盡しまして、上聖恩の萬一に報い奉り、下國民各位の御期待に副ひたいと念願致して居ります。

紀元二千六百年祝典に參列して

亀川 信人

曠古の式典に參列し、親しく、兩陛下の親臨を仰ぎ、皇國二千六百年を奉祝し、聖壽の萬歳と皇運の無窮を奉唱する機會を與へられた事は終世忘れることの出来ない感激であり、光榮とする所である。この榮譽と、この感激は豁然として、今日迄抱懷して來た國民意識を覺醒し、滅私奉公の誓ひを更に一段と強固なものにした。

二重橋前千古の色の漂へる老松の間、瑞雲棚引く宮廷を仰ぎ、非常なる感激を以て奉祝の甘酒に酔ふた全國六萬の代表全部が恐らくこの新しき國民的情熱を喚び起した事と信する。世界無比の光輝ある國體を有する民族的誇りと、苟くも之を失墜してはならぬとする國民的責務は觀念的國體觀の把握に過ぎなかつた。然るに此の度この世紀の盛典に臨み、君の統治と臣の翼賛とが實踐的に一體をなせる我國體の精華を愈々深く體認し、この國に生を享けたる慶福を痛感して、肅然として感涙の湧き出づるを禁じ得なかつた。聖戰央にしてこの盛典を舉げられた事は蓋し意義深いことである。思ふに明治維新の大業は範を「神武創業の始」に仰いだ。今や帝國は外に東亞共榮圈確立の鴻業を進め、内に新體制の革新運動に邁進してゐる。狭少なる視野に依るも明治維新に匹敵すべき大事業たるを知るのである。この大事業貫遂の爲には今更事新しく言ふ迄もないが、一億一心肇國の精神に還つて時艱を克服しなければならぬ。即ち我國民同胞をして我祖國に關する知識と信念とを徹底的に所有せしめ、國家本來の姿の帝國を思ひ浮べ、代々の祖先が祖國に對して爲した眞剣なる努力を翫味し、以て國民としての己が態度を整へなければならぬと信する。我々はこの祝典に參列して祖國の眞の姿を見、國體の尊さを知り、我國の生命の正體を突き留めることが出來た。

我國には三千年の古い傳統があり、民族の血が流れ、特異性がある。近時我が同胞の一部に動もすれば外國を極度に崇拜し、無闇に稱讚する傾向が見受けられるが、之等は祖先以來その生を託し來つたこの帝國の本然の姿を見てゐないのである。謹んで式典當日を回想するに、秋空愈々高く、菊花薫る宮城外苑式場に六萬の代表欣喜肅然として出御を御待ち申せば定刻、畏くも御英姿を玉座に進められ、玉音朗々と優詔を賜り、時局に對處して國民の嚮ふ所を示し給ふた情景は、恐れ多くも明治元年三月十四日 明治天皇が紫宸殿に出御し、群臣を率ゐて天地神明に誓ひ、五ヶ條の國是を示し給うた當時を髣髴せしめた。

時局は愈々重大である。有難き聖旨を奉體して 聖明に應へ奉り、昭和維新の大業達成に邁進すると共に、今この非常時局に際會し、之を打破して國威の宣揚を計る爲に、國民齊しく五ヶ條の御誓文を實踐躬行し、以て大政翼賛の指導精神たる臣道實踐に恪遵しなければならぬ。國家存立の必要條件は國民の融合統一であり、國威發揚の根基は君民一体の顯現にある。

奉祝會當日 天皇 皇后兩陛下出御せられ、畏くも國民代表と相偕に、この皇紀二千六百年を慶祝せられたることは君臣一体、君臣一徳の我國体の精華を中外に宣明せられたものにして、洵に畏き極みである。

大政翼賛運動の綱領について近衛首相は「大政翼賛の臣道實踐と云ふことである」と宣言せられた。王陽明の知行合一説は東洋道徳の粹である。我々はこの盛典の舉行せらるゝに依つて我國体の悠久と尊嚴の新なるを知つた。祝ひは當日で終つたのではない、終生祝ひ續け、終生この甘酒に酔

ひ、常に國民的情熱を燃して働かねばならぬ。信念を堅持し、所信斷行以て職域奉公を期せねばならぬ。かくて萬民翼賛の大道に向つて力強く直進すべきだと考へる。

紀元二千六百年祝典參列の光榮に浴して

唐 津 善 兵 衛

皇國日本臣民として生を享け、茲に連綿不斷の燦たる歴史に築かれた幽遠巨大な躍進日本を祝福し、聖壽の萬歳を壽ぎ奉る、紀元二千六百年祝典を舉行せらるゝ佳き年に遭遇せる事の感激一入なるに、縣民代表として式典參列の光榮に浴するを得たるは、生涯を通じての感激にして、有難さ唯々恐懼の極みでありました。

此の佳き日の莊嚴典雅に想ひを走せ、只管謹慎自制、光榮の日を御待ち申上げる裡に、十一月八日長崎驛集合の時は参りました。

集る者均しく満身之れ緊張、特別列車への乗車に依つて、愈々祝典への感激一入深まるを感じました。

蒼生一億民草の歡喜と感激をこめて迎へる曠古の盛儀、紀元二千六百年式典の日は遂に目前に繰り開かれ、光榮の參列者五萬餘の一員として當日、宮城外苑に設けられた式典場に臨むべく日比谷に集合、いと莊重嚴肅裡に所定の位置に整列す。場内瑞氣溢れ、一天雲なく、遙かに玉座を拜し奉

れば清楚にして而も莊嚴、目に映する所心に觸るゝもの總てが感激あるのみで、悠久二千六百年皇統連綿たる皇國の尊嚴さと、聖戰下に於ける東亞の盟主大日本帝國の微動だになき力強き頼もしさを泌々と感じ、今更皇恩の有難さに胸打たれたのであります。

斯くて午前十時四十八分、威儀整然お待申上ぐれば、陸海軍々樂隊の君が代奏樂の裡に、兩陛下式殿に出御、玉座に就かせられ給ふ、目の邊り、龍顔を拜し奉り、恐懼の極みたる感涙あるのみでした。

やがて近衛首相恭しく式場正面階下に參進して、式典開始の旨を奏上、一同最敬禮、つづいて陸海軍軍樂隊の奏樂に合せて君が代を奉唱致しましたが、感極まり落涙双頬を流れて止める事が出来ませんでした。

次いで近衛首相一億民草を代表しての壽詞を奏上申上げ、引續き建國の頌歌齊唱があり、近衛首相に唱和して、全世界に響けとばかり、聖壽の萬歳を三唱したのであります。

會て幾度が君が代を奉唱し、天皇陛下の萬歳を三唱して來りましたが、龍顔の御前にお唱へ申上ぐる事は空前にして恐らく絶後で、感胸に迫り、此時程聖恩の宏大無邊にして皇國無限の尊嚴さに感極まつた事はありませんでした。斯くして、諸員最敬禮、近衛首相式典終了の旨奏上あつて曠古の盛典は閉ぢられたのでした。

明くれば十一日、奉祝會總裁秩父宮殿下御代理高松宮殿下の奉祝詞奏上に依つて奉祝式舉行せられ、再び、龍顔を拜し奉るの光榮に浴しました。

斯くして、陛下臨御の下に御酒御饌を戴く、思ふだに勿体なく、我等微臣にして麗はしき龍顔を拜しつゝ祝典に列す、何時の日にか、又かかる感激がありませう。

聖典二日の感激は語るだに恐懼の極みで、總べてが感涙あるのみで、此の千載一遇の盛典に列し只管帝國の使命と吾人の處すべき途を痛感させられたのであります。

今や聖戰下にあつて八紘一字の肇國精神の顯現に邁進しつゝあり、國を擧げて、外に大東亞共榮圈の確立世界新秩序の建設を目指し、内に新体制を整へ大政を翼賛し奉るの一億民協力奉公の時に遭遇して居るのであります。此の盛典に列したる光榮を深く肝に銘じ、子々孫々に相傳へ、皇祚の無窮を祈り奉ると共に、粉骨碎身一意奉公の誠を盡さん事を堅く御誓ひ申上げた次第であります。

紀元二千六百年奉祝式典參列の光榮に浴せし感想

川 内 宗 八

紀元二千六百年奉祝式典參列の光榮に浴せしことは終生忘るる能はざる一身の感激たるのみならず、子孫相傳へて無上の光榮とする所たらん。地球上有史以來幾多の國をなすあるも、興亡隆替常なきを思ひ、悠久二千六百年を既に經過し、將來天壤と共に窮りなかるべき吾帝國に生を享けたる矜持、百年唯一回舉行せられん佳歲に生れ合はせし幸福、殊に、至尊の臨御を仰ぎ奉り、奉祝の御宴に奉侍することを得たる歡喜は、唯々感激の外なく、知らず識らずの裡に熱涙の浮ぶを知らざ

りし次第にして、拙き筆を以て吾感情を表現するに由なきを憾む次第なり。

一〇六

感想

河野武翁

- 一、悠久二千六百年の天業を讃へ、この偉大なる歴史に、はぐくまれたる國民の誇りをかざして、晴れの式典に末席を汚す。
- 一、選ばれたる幾萬の會衆が嚴肅なる態度と共に、まづかの莊嚴を極めし、式典道場の光景は、皇國日本の眞の姿として襟を正さしめられた。たゞあの場合驚歎感激のみにて、心からなるよろこびも、更に表現すべき言葉が出ない。
- 一、躍進日本の現階段に於ける、この聖紀の盛典こそは、應て完遂さるべき新東亞の盟主國たる貫録を示すもの、眞に國民は全幅の信頼を捧ぐる。

感想

小値賀町長 川口恵吉郎

紀元二千六百年には上京しよう、先づ二重橋から宮城を遙拜して、オリンピックなども見たいと

考へたのは、今から五年前のことである。まもなく事變が起り、オリンピックも取止めになつたが戦争は日一日と大きくなるのみである。老境に入つた私、隱居の氣持で暮したいと思つてゐたが、だんだんと國民精神總動員の鐘の響きが津々浦々に迄傳はつて來た。老境に入つたと云ふても健康である限り、火鉢を抱へて吞氣で過ごすことがどうしても濟まない感じがだん／＼と強くなつて來た。昭和十三年の暮に、郷土の町長に迎へらるゝことになつたのは何よりの幸であつた。さあ滅私奉公、微力ながら餘生を郷土に捧げて見ようと決心して、銃後の第一線に立働いてゐると、今回はからずも紀元二千六百年式典參列の光榮に浴したのである。汽車は式典參列者の爲めに特に臨時列車が仕立てられる。十日の式典十一日の奉祝會共に、兩陛下の行幸啓を忝うすることゝなり、親しく龍顔を拜し奉ることを得たのは私に無上の光榮と云ふ言葉を之れを以て當て填める事に確定した、大きな仕合せとなつたのであるから感激せざるを得ない。平素筆無性の身で一本の葉書も容易に書かない性質であるが、十一日の奉祝日が終はると、先づ東京の繪葉書を買つて町會議員全部と知己家庭等總計三十六本、簡單ながら兩日の状況と感想を東京から通信したのであるが、如何に私を感激させたかを物語るに充分だと思ふ。今一應兩日の主なる感想を述べて見ると、氣遣はれた天候も雲一つ見ぬなごやかな秋空となり、式場は五萬何千と云ふ參列者と云ふに一条亂れぬ秩序整然さである。式場には刻々と擴聲機が一般參列者に注意を與へて呉れる。まもなく

兩陛下の御臨幸が報ぜられ、一同起立、滿場水を打つたる静けさで御到着を御待ち申上げた。應て兩陛下行幸啓となり玉座に着かせられ賜ふ。恐れ多くも龍顔を拜し奉りたる時、唯々有難いと

一〇七

云ふ感激が胸一ぱいである。

第一日の式典には近衛首相 兩陛下の御前に恭しく壽詞を奏上し、首相の發聲にて 兩陛下の萬歳を三唱す。第二日の奉祝會に於ては高松宮殿下奉祝詞奏上の後、畏くも勅語を賜ふ、誠に有難き極みである。再び高松宮殿下の御發聲にて萬歳を三唱す。此の兩日大御前に國歌を奉唱した時の緊張味と萬歳奉唱の絶叫が壯絶であつたことは生涯忘るゝことは出来まい。第二日の祝宴に於て、御前奏演の悠久の舞の莊嚴であつたことも今に眼に映るやうである。

五萬何千の參列者中、市町村長の數が一番多數であつたこと、思はるゝが、之れは皆市町村民の代表として參列したもので、此の光榮は私の責任の重きを加へたのであつて、私は爰に堅い誓を立てねばならぬことを痛感するものである。今や新體制は着々と町村の下部組織に及び、大政翼賛に専念せねばならぬ時、近く町常會を通じ一般町民に此の感激と誓を物語り得る機會を待つものである。

紀元二千六百年式典に參列し感じたるまゝ、

北 島 綱 一

菊薫る昭和十五年十一月十日、十一日、永久に記念すべき輝かしき佳き日、皇紀二千六百年記念式典奉祝の日、我長崎縣百三十萬縣民總代として、知事閣下以下各界の代表四百餘名參列の光榮を

荷ひ、不肖又其の末席に列するの幸福を得、聖恩の辱なき、家門の榮譽とし、眞に感激の極み、一億の民草が祈念したる式典日、氣づかはれたる天候も國土津々浦々に至る迄、碧空一天雲なく麗朗たる日本晴、

畏くも 天皇皇后兩陛下には各皇族方を初め奉り、朝野の重臣を召させ給ひ、式殿に着御あらせらる。參列の光榮に浴したる全國五萬二千の代表、神々しき御英姿を伏し拜み恐懼措く處を知らず。さしにも廣き宮城外苑式場内、咳一つなく左ながら水をうちたるが如く、崇高なる狀景其の莊嚴さ、近衛總理大臣恭しく御前に參進、壽詞を奏上し奉る。畏くも 兩陛下には國歌奉唱壽詞奏上の度毎に立御遊ばされ給ふ。大御心の忝なきを拜し奉り、只だく、恐懼感涙に胸迫り、參列の衆庶眼を瞬き、寂として聲なし、何たる無上の光榮ぞ、此の光景歐米諸國の民主國民等に我日本帝國の眞の姿を知らしめたく思ひし事切なり。

殊に筆にするだに畏れ多いことながら、十一日の奉祝日に、 兩陛下には二時間餘の御永きにわたり出御あらせられ、君臣和樂の盛宴を偕にせさせ給ふ、尊き御聖慮を拜し、億兆の臣民に斯くばかり宏大無邊の御慈しみを垂れさせ給ふ。皇恩の無疆に恐懼感激極りなく、誰か忠誠の念を誓はざらん。確と長崎縣下百三十萬縣民に御傳へする。

吾々縣民は現下の非常時局を克服し、東亞新秩序建設に邁進、世界の平和を齎らすべく、各自其の職域に奮勵努力、報國の道に邁進し、以つて國防國家の基礎を築き、一日も早く 叡慮を安んじ奉らむことを肝に銘じて期したき次第。

悠久二千六百年の光輝ある歴史を有し、上に萬世一系の皇室を戴く、一億の赤子世界に比類なき大日本帝國に生を享け、千載一遇の盛典に際會した、吾等國民の責務として、國體の尊嚴、國威發揚、國力の充實を子々孫々に傳へ、皇國の進展を誓はしめたい。

紀元二千六百年式典參列の光榮に浴して

木 藤 克 己

私は昭和五年春官を罷めて、南山手町に閑居し、昨年二月町内會長に就任し、老骨に鞭つて働いてをりますが、本年八月市役所より、町内の正五位勳四等以下の有位有勳者の氏名と叙勳の年月日を調査して出せと云ふ達示がありましたので、該當者の氏名と共に私自身の分を末尾に記入して届出しておきました。ところが九月の初、市の秘書課から電話で、私をば紀元二千六百年式典參列の代表者の中に加へるべく推薦の豫定だが、往く意思があるかとのお尋ねがありました。私は話半ば聞かぬ中から、氣昂り胸躍り、わく／＼しながら、向ふの話しが終るか終らぬ中に、有難うございませ、無論參列させて頂きます、して東京でせうか、宮崎でせうかと反問しましたら、多分宮崎でせうとの答へでした。私はこの思ひ掛けなき光榮に浴する以上、東京とか宮崎とか擇ぶ所ではないとは思ひながらも、心の何處かには矢張り東京ならナアと云ふ懇望のはのめきがあつたことを自白します。

此の話をしました時の家内中の喜びは如何でしたらう。就中子供等の喜びがあまりにも感激的でありましたので、私はつい嬉し泣きに泣かされたのでした。然るに九月十七日に至り、近衛内閣總理大臣からと近衛奉祝會長からとの二通の封書が到着したのを見ますと、之れは亦何としたことか、私を勳四等功四級以下帶勳者總代として、宮城外苑に於ける式典と奉祝會への參列案内状ではありませんか、之を見た時の私の歡喜感激は申すもおろか、子供等の喜と申したら、筆や言葉には迎も表されません。

愈々十一月八日、一同出發の日までは、私も昔の子供に立返つた様で、明暮れ其日を待ち焦れてゐました。

偕而愈々十日の朝になりますと、私は心計りでも齋戒沐浴して、服裝を更め、通常禮服に勳章を佩用し、出来る限りの禮儀を整へて、同班の方々と共に、日比谷の集合所へ向ひました。此時の私の心持は、私は嘗て日露戦争より凱旋の後第四軍司令官野津將軍以下司令部員一同と共に、明治天皇陛下に拜謁を賜はりたる感激深き記念を持つてゐるが、今日圖らずも此の大典に參列し、畏くも今上陛下を式殿上に拜し奉ることは、微臣の分として實に何たる光榮ぞ、同時に私としては恐らく之れが最後の機會にして最も意義深き場合なれば、最善の心構へと至誠とを盡して、陛下の御前に跪かんと一念の外、何物もなかつたのです。

愈々日比谷の集合所を立ちて、外苑の式場前に到りし時、參列者の中に左右より人に助けられつゝ辛ふじて歩を運ぶ二老人を發見しました時、私はさても御互に一生一代の晴れの大典に浴する身

なればこそ、如何なる無理があつてもと御本人達も左右の方々も念するところは唯一つ、陛下の御前に跪かんと何もかも忘れて参入されし其の心中を推察して、轉た感慨に堪へなかつたのです。之れこそは洵に我等日本國民の眞の姿です。大君の御前に出づることはいとも懐しき御親の前に出る心持です。

やがて式場に参入して、六萬に近き代表者が一堂に集りながら、咳拂ひ一つ聞えず、心から敬虔の意を表し奉る森嚴其もの中に、兩陛下の臨御を仰ぎ奉り、萬口一音に、君が代を奉唱し、又高松宮殿下の御發聲に奉和して、天皇陛下の萬歳をば大内山も搖げよと計りに三唱したる時の感激と、聖上御親らの御勅語を拜聴したる時の感激とは到底筆舌の盡すところにあらず、我と我が耳を疑ひ、唯だ恍惚として、夢幻の中に在るを感じたのです。

此の式場には外國の使臣も多數居たことですが、此の崇高にして謹嚴、しかも極めて親和的なる君民一如の光榮が如何に彼等の眼に映じたこととせうか、此事計りは獨り、我が國民のみが専有する矜持であつて、歐米人等の到底眞似も出來ず、研究しても到達し得ないところの全く神秘的な現象としか感ぜられなかつたこととせうが、我々日本人に取りては、何等飾り氣のなき、自然の表れにして、君民一如の日本精神を此處に其儘顯現したるに過ぎず、眞に一億一心の姿が此の場面であると私は信ずるものであります。

翌十一日、奉祝會場に於て、開宴の號令と共に、畏れ多くも兩陛下のみそなはず「浦安の舞」をば遙かに拜しつゝ、御神酒の杯を戴きし時は、嗚呼我れ生れて茲に滿七十年、此の空前の光榮に

浴す、我こそは眞に陛下の赤子なり、何時までも何時までも生きながらへて、生命の續かん限りは、壯健に元氣に盡忠報國の至誠を捧げてこそ、此の鴻大無邊なる皇恩の萬一に報ゆる所以なりと自ら湧き出づる無限の感激を禁ずることは出來なかつたのです。

私は十三日午前十一時、之迄光榮の行を共にしたる同班の諸賢と東京驛頭にて袂を分ちたるが、所用を果たし、二十五日帝都を辭するに當つて、二重橋前に到り、謹みて皇居を拜しつゝ、畏れ多くも御暇乞を申し上げたる所、洵に僭越なる申分ながら、何となく御名残り惜しくして去るに忍びざるものあり、徘徊願望、須臾にして、後徐々に歩を東京驛に運び、歸崎の後も唯感激の中に日を送つてをります。

楠 本 源 市

去る十一月十日十一日の兩日に亘り

天皇皇后兩陛下の行幸行啓を仰ぎ奉り、紀元二千六百年式典並に奉祝會が舉行せらるるに當りまして、不肖斗らすも内閣總理大臣兼奉祝會長たる公爵近衛文麿閣下の有り難き御案内狀に接し、覺えず胸を躍らせ、非常なる感激に打たれたのであります。

「人生の五十路の坂をあとに見て皇紀輝く参列の旅」

愈々十一月八日午後四時十五分長崎驛發の特別臨時列車に乗り込み参列の途についたのであります。

すが、長崎縣下參列者の一行は七班に分たれ、各班毎に定められた場所におさまり、更に各班は四組から五組に分かれ、各班に縣廳側から班長一名副班長二名づつ選ばれ、各組には一般參列者の中から組長各一名が選ばれまして隣組との聯絡を保ち、一團一心となり、相互扶助の精神が十分に發揮せられ、茲にも新体制の氣分が漲つて居ることを力強く思ひました。列車は特別急行列車の速度で、九日の午後七時十五分には早くも東京驛に到着、直ちに定められた宿舎に分宿したのでありますが、明日の式典參列の事が氣になつて中々眠れなかつた位でありました。長い間待ち詫びて居た第一日の式典當日は參りました。朝五時過ぎには思ひ思ひ寢床を離れ、先づ身心を淨化し、天候を氣づかひつつ空を仰げば、一點雲なき煌煌たる星の光りに一同喜色満面、朝食を濟ませ、六時宿舎を出發、七時日比谷公園に集合の上、各府縣より參集の五萬餘の參列者は各府縣毎に隊伍を整へ、宮城外苑の式場へ向つたのであります。

一系無窮の寶祚を承け給ひて、ここに二千六百年、舉國この佳年を壽ぎ奉る、曠古の式典の時刻は刻々と迫つて參りまして、程なく囁々たる君が代のラッパを聞きながら、五萬餘の參列者は全く水を打つた様な静けさに返り、天皇皇后兩陛下の臨御を今か今かと御待受け申上げたのであります。

此の日畏くも面り 兩陛下の神々しい御姿を拜し奉るの光榮に浴することが出來たばかりでなく優渥なる勅語を下し賜りましたことは、誠に恐懼感激の極であります。

十一月十一日の奉祝會場は前日の姿を一變し、五萬餘の參列者の白木の卓上には、此日を記念す

る奉祝會からの記念品が白布に包まれて並べられ、酒饌も備へられてありました。當日の參列者は午後一時半頃迄に大体の入場を終へ、天皇皇后兩陛下には午後一時四十八分宮城御出門會場へ行幸啓あらせられ、再び優渥なる勅語を下し賜り、一億蒼生の捧げまつる佳き年の壽ぎをうけさせられたのであります。十日の式典に續いて再び 兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉りました五萬餘の參列者の感激は譬へやうもなかつたのであります。天皇皇后兩陛下には同三時五分諸員奉送裡に會場發御天機並に御機嫌麗しく還幸啓あらせられ、茲に二日間に亘る曠古の祝典は舉國慶祝のうちに目出度く終了したのであります。

式典の前日九日の天候は次第に險惡となり、奉祝會の翌十二日は早朝から午前中蕭然な雨が降り續いたに拘らず、祝典の二日間には共に日本晴で、萬事豫定通り、盛大裡に終了を告げたことは、是れ一重に 天皇陛下の御稜威に依ることは勿論であります。天佑も又預つて力ありしことを思ふとき、實に吾が日本帝國は神々の守護し賜ふ神國であることを直感し、敬神崇祖の念を一層強化したわけであります。

更に此度の祝典に參列の光榮に浴した一般參列者は何れも社會各階級及び分野に於ける代表的の人々を以て充たされ、全く一億國民の縮圖とも云ふべく、新体制の實現であることを深く感じたわけでありまして、此の參列者が更に一億國民に呼びかけることに依つて、全國民が聖旨を奉体し、一億一心一体となつて、國家國力の總力を十二分に發揮し、以て世界の新秩序を建設してゆくことは敢て難事でないことを確信すると同時に、一段の力強さを感じたわけであります。

今や聖戰四年の久しきに亘り、國家は超非常時局に直面し、一億國民一丸となつて、新体制下に世界新秩序の建設達成に其の總力を發揮しつつあるの秋であります。此時に當り、光輝く悠久二千六百年の式典並に奉祝會が舉行せられまして、斗らずも參列の光榮に浴することが出来ましたことは、不肖一人の光榮に止まらず、一家一門の譽れとして、子々孫々に至るまで、此の光榮を頌つと共に、深く心に銘じて益々滅私奉公の念慮を固くし、聖恩の萬分の一にも酬い奉らんことを誓ふものであります。

終りに此度の參列に際し縣御當局の終始一貫したる、周到なる御計劃と御懇切なる御指導とに依りまして、何等の故障なく、無滞參列を終へ無事歸縣出来ましたことに對し、深甚の謝意と敬意を表して此の稿を終ります。

紀元二千六百年の式典に列して

早岐町長 口石 敬義 謹述

今回の紀元二千六百年の式典に參列して私の尤も感激したことは、十日の式典當日並に十一日の奉祝會當日二回とも、畏くも 兩陛下の出御を拜し奉りましたことで、その第一日の式典には第一回の君が代表樂裡に 皇后陛下には金光拓相の御先導にて、各宮妃殿下を隨へさせられ、玉座後の金屏風右側に出御、續いて第二回の君が代表樂の裡に 天皇陛下には各宮殿下を隨へさせられ、近

衛首相の御先導にて、御英姿も神々しく出御、玉座に着かせらる。恐る恐る仰ぎ見れば、玉座に向つて左側には御奥から高松宮、閑院宮、伏見宮、久邇宮、梨本宮、久邇宮家彦王、朝香宮、東久邇宮、竹田宮、閑院若宮、李王、李健公、李綱公各殿下御十三方が、又玉座御右側御奥から秩父宮妃高松宮妃、東伏見宮妃、伏見宮故博義王妃、賀陽宮妃、久邇宮妃、閑院若宮妃、李王妃、李健公妃各殿下御十三方が御一列に、玉座を中心に御席に着かせられ、莊嚴極りなき光景を拜して、私は只々感激に咽ぶの外はなかつた。扱て又近衛首相が鞠躬如として御前に進み、壽詞を奉讀せらるるや畏くも 陛下は立御之を聞こし召され、優渥なる勅語を下し玉ひ、畏れおほきことながら、私はその御力強き玉音を遙か末座よりありありと拜し奉ることを得たのは何と云ふ有りがたきことか、只々感謝感激と云ふ外に之を現はすべき詞すら知らぬ次第である。

翌十一日の奉祝會當日には五万四千の參列者と共に 兩陛下の御前において祝盃を擧ぐるの光榮に浴し、遙かの末席から玉座を仰ぎ奉れば、畏くも 陛下にはこの曠古の大典に、臣庶と共に野戰料理の供饌に御箸を着けさせ給ひ、又幾度か玉杯を御手に取らせらるる様をも拜し、和氣霽々君民和樂の饗宴に暫し時を移させ給ふ、昭代の聖恩の有りがたき尊ふさに、知らず誠らず感泣せずには居られなかつた。

次ぎに私の大なる感激に打たれたことは、十日の近衛首相の壽詞と十一日の高松宮殿下の奉祝の御詞である。畏れおほいことながら殿下は聖徳をたたへて、普天率土手を額にし聲を同ふして此盛事を謳歌せざるはなしと仰せられ、又近衛首相は聖徳の廣大無邊なるを頌して、威烈の光被する所

昭明の化普率に浴く、億兆皆雨露の惠澤に浴すと奏上せられたことである。元來この普天の下王土にあらざるはなく、率士の濱王民にあらざるはなしと云ふ詞は、明治の初年には王政復古の餘波を受けて、忠君愛國の志氣を鼓舞する爲、この詞が盛に用ひられたものである。然るに明治二十二年に憲法が發布され、翌二十三年に帝國議會が開かれ、自由民權とか權利義務とか云ふ詞が盛に流行して、何時の間にか普天率士の詞は影を潜むるに至つたので、私は此事を非常に遺憾に思つて居つたのである。然るに此節の大典に於て然かも莊重なる祝詞の中に之を御用ゐになつたのを拜聴致しまして、恰も空谷に梵音を聞くの思ひを致したのである。

今日我國に於ては、大政翼賛運動澎湃として起り、一君萬民の聲が高唱せられて居る。此の際普天率士の詞を拜聴し得たことは、特に意義深いことと思ひ、誠に以て欣懐に堪へぬ次第である。尙私は町長として參列の光榮に浴したことを深く心に銘じ、今後は粉骨碎身地方自治の發達に努力し誓つて皇恩の萬一に報い奉らんことを堅く固く期するものであります。

紀元二千六百年式典及奉祝會に於ける感想

長崎醫科大學名譽教授 國 友 鼎

昭和十五年秋十一月八日午后四時、長崎驛發特別列車にて、一行と共に東京宮城外苑に於て舉行せられる、紀元二千六百年式典並奉祝會參列の爲め、上京することを得るは身に餘る光榮である。

九日午後七時無事東京驛に着し、直にホテルの客となり、明日の日和を祈る。

明くれば十日、秋晴の好天氣、式場受付は午前八時に開始せられ、私は北入口文部省受付より式典參列證と引替へに青色徽章を受け場内に入る。式場は紅白の天幕にて張り廻され、内に五萬三千余の席を有する、八千坪の雄大なる庭地である。指定せられたる區に至り自席を選ぶ、フト眼を前方に移せば、豊かなる式殿、ア、是れだ、豫て胸に描いたものは、と暫く無言で見守つた。無限の蒼穹を頂く御殿の屋根はヒワダ葺、廻廊の欄間には、白の菊花御紋章を染めぬきの紫の幔幕もて廻らし、中央に三段となり玉座が設けられ、青地のテーブル掛、其後方に蒔繪の御椅子、背後には一双の大金屏風が立てられ、それよりすと右側に 皇后陛下の御座が設けられ、又玉座の兩翼は皇族、重臣顯官外國大使等昇殿者の席が設けられ、式殿の兩側大地に立てられた大旗小旗、鉾數十が並び、微風になびき、清楚と優雅の匂たゞよひ、瑞祥の氣溢れ、拜する者皆襟を正した。間もなくマイクを通じて色々參列者に注意があつた。其言葉は一言一句鄭重亦謙讓である。私共田舎者に、平素公衆會合の場所にて使用する言葉使ひに就き、良き教訓と反省を與へられた感があつた。

午前十時四十八分、大内山の奥にかすかに喇叭の響き、次で儀仗兵の吹奏する囀曉たる喇叭、席上より左手の小高き宮城のかなたに略式自動車輜障が翠緑の樹木の間にくく動く、遠くより次第に近づく指揮將校の號令の聲、マイクより全員起立と報ず、五萬餘の參列者咳一つ起らず深山幽谷の静けさである。忽にして起る陸海軍軍樂隊の君が代の奉奏、この時 皇后陛下には紫紺の御洋装も

神々しく金光首席閣僚の御先導にて出御、最後に 天皇陛下には近衛首相の御先導にて陸軍御軍装大勲位副章各種勳章御佩用あらせられ、皇族殿下、松平宮相、木戸内府、百武侍従長等を従へさせられ出御、龍顔麗はしく、式殿中央の一段高き玉座の御椅子につかせ給ふ。この一刻風なく樹静まり、天空にかかる太陽も雲を拂ひ、霞を拭ひ、昭々として明光を垂れる。

諸員最敬禮、今や五萬三千參列者の君が代の齊唱である。我等はこゝに 至尊の御姿を咫尺に拜し奉り、恐懼感激措く能はず、落涙禁じ難く、眼鏡を取て涙を拭ふ。

次で近衛首相が明快莊重に壽詞を奏上し、無窮の皇運を讃へ奉つた。

天皇陛下にはこの時御満足氣な御微笑さへたたへさせられ、百武侍従長の捧持する勅語書を御手にせられ、玉音朗々優渥なる御勅語を下し賜ふ。五萬餘人の參列者再び感涙に咽ぶ。

近衛首相は式殿より庭地に降り正面に起立、萬歳を三唱し、全員之れに唱和し、億兆の臣民に代りて奉祝、以て寶祚の無窮を祈り奉つた。

感激と興奮の内に莊重華麗なる曠古の式典は幕を閉ぢ、皇禮砲の鳴りひびく内に、お召自動車は紫煙る二重橋から宮城に入らせられた、誠に芽出度限りである。

十一月十一日奉祝會

昨日にも優さる今日の日和、快晴眞に日本晴れである。この天候こそは、正義のものに與へられた神の暗示であり、我皇室の瑞兆である。午前十一時入場開始せられ、例に依て自席を選ぶ。昨日の式殿は姿を一變して、華かなる會場となり、慶祝一色に染められ、御殿の前は多彩の旗、廻廊の

幔幕は紅白の縦縞、玉座には赤地錦のテーブル掛、又正面庭地には前夜の中に設置された朱塗勾欄の奉祝舞臺が言ひ知れぬ優雅なる姿を見せ、昨日の莊嚴は今日の莊麗と變り、晩秋の爽氣轉た身に浸む。

午後一時四十八分花火の爆音は外苑の上空に響く、宮城御出門である。昨日と同様の順序にて間もなく全員起立、寂として聲なく、奏樂の内に高松宮殿下の御先導にて、今日もまた 龍顔麗しく出御、全員最敬禮、この時近衛會長は 陛下の御前に參進して奉祝會開始を奏上、祝賀の盛儀が開かれた。陛下立御され給ひ、忽ち起る五萬三千の參列者の君が代の合唱、次で高松宮殿下より御聲さわやかに淀みなく流れる奉祝の御詞が奏上あらせられた、後ちグルー米國大使外國使臣を代表して祝詞奏上、こゝに又再度優渥なる御勅語を下し賜つた。

雄渾窮りなき玉音は乾き切つた秋の空氣に傳へられ朗々として、伏し拜む吾等赤子の耳に徹す、畏き限りである。申すも畏れ多きことながら、御勅語中「平和ノ日ナラズ恢復セラレンコト」と一段高く強く拜聽するに至り、宏大無邊の聖恩に恐懼感泣し、暫し首を上げ得ざりし。

次でマイクを通じて開宴が報ぜられた。白木の卓上に數々の御下賜品あり、何れも戦地にある勇士の糧食を偲ばせたものである。殿上の 兩陛下には主膳監より奉る御酒御膳は一般參列者に御下賜のものと全く同一なるものにて參列者と今日の慶びを偕にせさせ賜ふ大御心は恐懼の限りである。我等も主僕其他を國に土産とし、恭しく副饌と御酒を此の場で頂き大御世を壽ぎ奉る。兩陛下には數十分に亘り玉座にあらせられ、民と宴を共にし、正面舞臺に於ける餘興、悠久と題す

る奈良朝武人に装束せる、さらびやかなる四人の舞踊と、之れを調標付ける神秘優雅の古代奏樂に御興じあらせられ、其他數々の奏樂、力強き小國民の頌歌に奉祝氣分は高潮に達した。

最後に高松宮殿下の御發聲にて萬歳を三唱、全員之れに和す、其聲大地を搖かし、大空も裂けんばかり、是ぞ陛下の赤子一億國民の共鳴する力強き五萬餘の代表者の叫びである。今や奉祝會は終りを告げ、兩陛下御機嫌麗しく皇禮砲股々と轟く内に宮城に還御遊ばされた。

祝典後の感想と祈、

國礎の悠久にして國體の幽玄なる萬邦無比の聖代に生を享け、加之百年に一度の世紀的祝典に列するを得たるは無上の光榮と感泣し、此千古未曾有の世界的轉換期に際會したるを幸とし、滅私奉國の誠を致し、億兆心を一にし協心戮力、以て此の鴻恩に應へ奉り、天佑神護の皇國の上に彌増し豊かならんことを祈つて止まざるものである。

久 和 清

私の如きものが紀元二千六百年の盛典に參列の光榮に浴し、あの莊嚴嚴肅なる式場に於て、龍顔を拜し奉り、御前に於て、君が代を奉唱し、恐れ多くも勅語を賜はり、記念品饌祝盃を戴き、恐懼感激の極み、流れ出づる涙をどうすることも出來ず、我を忘れたる有様でした。

十日の式典には總理大臣、十一日の祝典には高松宮殿下の御發聲で、聖壽の萬歳を奉唱しました

ことは、表現するだに恐れ多い感にうたれつつあります。私は此の千載一遇の盛儀に列し得た身の幸福を深く深く心に銘じ、茲に格段の決意を固め、一身を捧げて臣道を完ふし度く、覺悟して居る次第であります。

臣道を宣揚して萬古に傳へん

佐世保日々新聞主筆 興 梶 菊 四 郎 謹 記

恭しく惟るに、

天孫統を垂れ、皇祖國を肇め、天壤無窮の神勅を顯現し給ひし以降、列聖相承け相傳へまして、茲に二千六百年、八紘一字の皇謨は、今上の御稜威と、國民一致の翼賛とにより、今や着々成就されんとするのである。此秋に際して、遠く皇祖の宏猷を仰ぎ、尙ほ後昆に傳へんため、畏くも聖駕臨幸、百司衆庶と其慶を共にし其歡を同くし給はんと、時維れ昭和十五年十一月十、十一日の兩日を以て、地を宮城外苑に卜し、式典を舉行せらる。私は長崎縣民代表として、近衛内閣總理大臣並に近衛紀元二千六百年奉祝會長の名を以て、參列すべき光榮を荷つたのである。

熟々按ずるに、九重雲深く警門高くして、私の如き草莽一介の布衣が、如何にあこがれたればとて、此の晴れの盛典に列し得られようなどは、到底思ひも及ばない處であつて、九月十八日案内狀を手にした私は、夢かと斗り狂喜し、而して後ち靜かに思うて、只管聖恩の廣大なるに感泣し、

聖世に生れたのを歡喜すると共に、過去を追想し、幾多の世相變遷裡に處して、よくぞ今日まで生きて來たものと、轉た皇天の惠澤に感謝したのであつた。

願れば、私が初めて宸宮に參入の光榮に浴したのは、過る日露大戰後の明治四十年四月であつたと記憶する。當時東京で内國勸業博覽會が開かれ、之を機として、全國新聞記者大會が開催され、私も出席して居たが、時の東京府知事千家尊福男の肝煮で、宮中參入を許され、坂下御門から一同參入し、岡澤侍從武官長に引率され、宮城御車寄より、鳳凰間、千種間、皇族方御控間、振天府、賢所參拜、紅葉山を拜觀、芝濱離宮、新宿御苑を拜觀し、終りの新宿御苑に於ては、西園寺首相が聖旨により、宮内省献立の御料理、和洋酒を饗せられ、御紋章入り御菓子を受して退下したのであつた。當時洩れ承れば、此御優遇は、日露役の功勞により、新聞社に對し、金銀の賜盃があつたが、記者としては從軍記者は別として、普通であつた處から、思召により特に此御沙汰があつたものと申すことであつた。一同は仄かに聖旨のあり難さに感激し奉り、私は一生の榮譽として思出として、之を以て終生の恩命として感激したものであるが、今回は公式に、曠古の盛典に、然かも一億民衆の代表者として、天顏に咫尺し奉り、親しく優詔を拜し、賜餐の光榮を拜するのみか、勅令を以て公式制定の記念章まで下賜せらる、何等の榮譽ぞ。全く天恩の廣大無邊なるに感佩し、此榮譽は以て子々孫々に傳へ、一家一門にのこすべき絶大の記念と申すべきである。

今更ら事新しく申すまでもなく、我國は既に神代より君臣の分定りて、代々世々時に隆替ありしと雖、此分限は毫も渝る處なく、以て國体の尊嚴を保維し、而して此嚴乎たる君臣の大義存すると

雖、所謂「義は君臣なれど情は父子の誼」ありて、恐れ多くも、一天萬乗の 天皇陛下は、現人神の尊きにましませども、一面に於ては、吾々臣民の情にては、一家の家長におはしますのである。故に申すも恐れ多いことながら十一日大饗宴のみぎり、 天皇后兩陛下を御同列にて玉座遙かに仰ぎまつり、參列員一同萬歳を唱へ奉り、親しく玉杯を舉げ給ふを拜する時、私は大家族の家長としての感を捧げて壽を献するの親みを思ひ、君臣和樂の靄然たるを泌々と心の奥底深く秘めて御供の品々私達と同一のものを召さるゝを拜し、有りがたしとも忝なしとも、申すに申されぬ心地を痛感すると共に、一家團樂の和樂、今此時よとばかりに敬虔の裡に和やかさを拜し、此光景こそ眞に大日本帝國の國民のみこそ獨り味へる辱けなきであるを誇つたのである。

私は日向國高千穂郷に生れ、幼時から幾多の神跡に親炙し、常に古史に思ひを走せ、其感化を受けたものである。今茲に曠古の大典に參列し、親しく 天顏に咫尺して優詔を拜す。上古吾等の祖先が皇祖神武天皇に扈從しまるせたる古をしのび、身は式場に在りて心は東征の軍に在るの思ひを禁ぜず、今は八紘一字の大精神に對へ奉らんことを誓つたのである。

謹奉賦陪紀元二千六百年祝典賜宴

悠久二千六百年

八紘一字命遵天

子來民賀皇祚壽

臣道宣揚萬古傳

大典に尾して、臣民としての奉對の言葉尙ほ盡きぬものあれど、字數に制限されて盡すを得ざるを憾むも、聊か所懐を述べて、縣時局課の需めに應ず。只だ文中非禮に涉るなきやを恐る、文責すべて私の負ふ處たるを明かにす。

聖典に列して

佐世保市長 小 浦 總 平

一系無窮の寶祚を承け給ひて悠久二千六百年、晴れの式典は 天皇、皇后兩陛下の臨御のもと、一億蒼生の限りなき慶祝をこめて宮城外苑の式場に於て執り行はせられた。寔に君臣一體の慶典、曠古の盛觀である。私も此の大式典に參列するの光榮に浴したことは感激の至りである。

此の日九天一翳をとどめず、万里一碧、晩秋の爽氣身に沁みて淨らかなる此の朝、宮城外苑の式典場は限りなき感激をこめて日本の津々浦々から馳せ集まつた五萬數千の參列者を呑んで、大内山の翠綠のなかに静まつてゐる。

天皇、皇后兩陛下には略式自動車鹵簿にて二重橋正門より式場に行幸啓あらせられた。儀仗喇叭「君が代」吹奏裡に 兩陛下には式場御車寄着御。近衛首相の御先導により便殿に入御あらせられやがて近衛首相の御先導にて御英姿も神々しく出御、玉座に着かせ給ひ、 皇后陛下にも御座に着御あらせられた。式場は肅として水を打った様である。式典開始せらるゝや、近衛首相は式殿正面

南階段を降り玉砂利を踏んで正面中央階段前に參進、式典開始の旨を奏し奉る。 兩陛下には長くも立御、參列諸員最敬禮の後、一同君が代を奉唱し終りて、近衛首相は正面八段の階を昇り、御前に參進「壽詞」を奏し奉った。其の莊重なる一言一言は、一億國民の壽きを代表して奏上せられたのである。次で百武侍從長勅語書を捧じて、 天皇陛下に捧呈、 陛下には玉音朗々として優渥なる勅語を賜った。今 龍顔のいよいよ麗しく玉體のますます御壯んなるを奉拜し、玉の御聲を親しく耳にし奉り、實に身も痺れるばかりの感激を覺ゆると共に、熱き報國の誓ひが自づと湧き上るのを禁じ得なかつたのである。思へば今より二千六百年前、神武天皇の御即位の式に列した私等の祖先も、今日の私等と同じやうな感激を抱いたであらうと思ふとき、萬古不易、宇内に冠絶する國體の尊さ有難さに對し、自づと眼がしらが熱くなるのであつた。間もなく近衛首相は恭しく「天皇陛下萬歲」を發聲すれば、御民我今生けるしありて享けたる世紀の歡びを思ひつゝ、八絃に響けよとばかり聖壽の萬歲を奉唱し、殷々たる皇禮砲の響きと共に式はめでたく閉ぢられ 兩陛下には天機殊の外に御麗しく還幸啓あらせられた。

翌十一日の奉祝會には參列者一同 兩陛下の御前にて盃を擧ぐるの一生末代の光榮に浴し、和氣霽々として華やかに秋陽に映ゆる舞樂臺で演奏される奉祝舞樂を拜觀した。此の君臣和樂の有様は我國に於てのみ見得ること、今更の如く生を皇國に享けた慶福を感銘したのである。惟ふに世界は今や未曾有の轉換期に立つてゐる。日本は總力を擧げて東亞共榮圈の確立に邁進しつゝある秋、紀元二千六百年を迎へたことは國運の前途に光輝ある示唆を與へたるものと謂ふべく、茲に我々は

神武天皇御創業の理想を追慕し、一億一心となり宏大無邊なる皇謨を扶翼し奉らなければならぬと深く心に銘じた次第である。

紀元二千六百年聖典記念録

南松浦郡濱ノ浦村長 古賀 範 之

昭和十五年十一月十日十一日の二日間、莊重一色の宮城外苑の紀元二千六百年式典會場に參入するの光榮に浴したる老村長、私の感懷は何とも申し上げられない歡喜の至りであります。誠に邊僻の一村長たる私にまで、一國の宰相近衛總理大臣閣下は帝國臣民一億の代表者の一分として、鄭重なる御招請の書留郵便を賜はり、引續き十一月八日には特に參列者の爲に長崎市より東京までの列車を繰り合せて差立てられ、同月十三日は又東京より長崎市まで歸りの列車を差立てらるる等、前例なき特待を蒙りたる一行の満足と感謝とは、筆紙には綴りがたい程である。今會場に於ける有様を申し述べんに、此の紀元二千六百年式典及奉祝會の兩日は天佑と申すべきか、秋晴れの好天氣にて「澄みわたりたる大空の清きをおのか心ともかな」の御聖歌をも想ひ出さるるほどの清明たる日和なりしは、參入者一同は言ふに及ばず、一億國民の齊しく歡喜せし所なり。式場に參入して、一同兩陛下の臨御を仰ぎ待つや、五萬有餘の臣民代表者は誠に靜肅にして敬虔の至情溢れ、參入の外國使臣をして驚嘆せしめ、國民一致總和の實際を目撃せしめたるは愉快に堪へざる所なり。私は

兩陛下の臨御の後、參入者一同君が代を奉唱せし時及び 陛下の萬歳を唱和せし時、期せずして聲を共にし曲を齊しくせし時の感懷禁じ難きものあり。想起すること目眩熱くなるものあるを覺ゆるなり。之等こそ眞に臣民たるものの至情にして、皇室の御繁榮と國運の隆昌は天壤無窮たることを祈念して止まざるものなり。老村長私の感激に堪へざるものは、同奉祝會の席上多數の配列品を戴き、兩陛下の御前に於て御酒を頂きたる時は手は戦き唇は振ひしも、君民共樂の至上は何とも申し上げ様なく、感涙に咽ぶの外なく、あの拜戴したる「聖徳餘光」「列聖珠藻」二部の珍籍は當時の感懷を詳述し、永く家寶として子孫に貽し、皇恩の深厚を感謝せしめ、皇室の御隆昌と國運の長久を祈り奉らしめんことを期せしめんとす。

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會參列感想

長崎縣遠洋底曳網水産組合長 後藤 義一郎

振古未曾有萬邦無比の聖典に參列を許されたる感激は、拙き筆もて、言ひ現はすべき術を知らず。唯此有難き世に、生き存へたる幸福を身に染みて覺ゆるのみ。

式、祝兩日共、秋天澄み渡り一點の雲も無く、天亦此日を祝する如く見ゆ。五萬五千の參列者些の混雜も無く、一糸紊れず整然として、式場に參入せし有様は、此人々の均しき想ひが等しき動作となりて、表はれたるものと見るの外無かりき。兩日共、式場にて開式を待つ間、千代田の森高く

一羽の鳶の翼も徐かに旋回せるを見たるは、洵に不思議のことにして、遠き紀元の昔の金鷄再び來りて、此聖典を祝するが如く、神秘的の目出度さに、身の緊るを覺えたり。

親しく大御前に立ち、聖姿を仰ぎて奉唱せし君が代は、心から其歌詞を奏上する心地し、又萬歳を壽ぎ上げ奉りたる際は、感激胸に迫り、亂れんとする聲を有らん限り御前に届けかしと、張り上げたるにてありき。嗚呼紀元二千六百年、皇統連綿、天壤と極り無き皇室の御榮えを仰ぐ時、誰か此大和の國に生れたるを慶ばざるものあらん。

謹みて

菊かざる奉祝二千六百年

畏くも勅語を拜したる時、左しにも廣き式場、寂として針の落つる音さへ聞ゆる如く、全員總身の感覺を耳に蒐め、之を拜したるは、所謂一億一心を茲に具現し、八紘一字は之を式場の光景に示され、我等は此心此想を以て、新体制に即應すべき訓へを受け、臣道實踐は此感激を確と身に引き緊めて、其職域に邁進すべき覺悟を固め得たるは眞に貴き賜なりき。謹みて誌す。

西彼杵郡崎戸町長 近藤 要 輔

恭しく惟みるに、神武天皇皇祖の御神勅を奉じて、天壤無窮の寶祚を踐み給ひてより、悠久二千六百年、一億國民が赤誠を捧げる奉祝の式典は、畏くも天皇、皇后兩陛下の親臨を仰ぎ奉つて、

瑞雲飄舞く宮城外苑の廣場に於て、いとも壯嚴に執り行はせられました。不肖圖らずも、此の意義深き曠古の聖典に參列するの光榮に浴しましたことは、家門の譽、又終生の光榮として、感激する所であります。其の日は一億の赤子が火線銃後を不問、歡喜と感激を籠めて、連綿として窮まり無き、皇紀二千六百年を奉祝し、聖壽の萬歳を壽ぎ奉る、千載一遇の慶びの日でありました。前日より氣遣はれた天氣もがらりと晴れて、中天一片の雲なく、全く眞の日本晴で、當日は午前九時半迄に、各団体毎に式場に參入することになつて居りましたので、先づ吾々は定められた日比谷の假集會所で序列を整へ、福岡佐賀宮崎等の隣縣団体と相前後して、菊花薫る馬場先門參入口より參入して所定の位置につきました。各廳府縣の代表者で、此の歴史的な光榮に輝く參列者は、五萬三千に餘ることである。時が移るに連れて、式場は肅然として恰も水の如き静けさであります。正面の式殿には、重臣顯官外國使臣等有資格者が所定の位置に整列して、兩陛下の親臨を御待ち申上げて居り、左方の前線には、儀仗兵の堵列も終る。やがて午前十時四十八分、森として静まりかへつた二重橋の方面に、啾啾たる君が代の喇叭の音が響き渡りました。今ぞ、兩陛下の親臨を仰ぎ奉るのであります。兩陛下には御自動車にて儀仗隊の捧げ銃の禮を受けさせられ、肅々と式殿御車寄に着御、やがて軍樂隊の君が代の奏樂のうちに、兩陛下天機いと麗しく式殿の玉座に着御遊ばされました。仰げば咫尺の間に、尊嚴極まりなき、兩陛下の颯爽たる御英姿を拜しましたときしみみ君臣一体の我が國體の有難さに恐懼感激の極み、涙に咽びました。盛儀は順次進行せられました。近衛首相の開式奏上に始まり、一同最敬禮を申上げ、軍樂隊の吹奏する君が代の奏樂に

和して、参列者全員心から奉唱致しました。次いで近衛首相は一億臣民を代表し、赤誠籠めて壽詞を恭しく奏上せられました。首相の感激に満ちた、然も至情の籠つた音聲は、森として式場の隅々迄響き渡り、参列者をして一層感激を深からしめました。畏くも、兩陛下に於かせられましても此の捧げまつる赤誠にいと御満足げに拜し奉りました。此の時、聖上御自ら玉音朗々優渥なる大詔を下し、國民の嚮ふ所を明示し給ひしときは、只皇恩の有難さに感泣するのみでありました。此の息づまる感激の裡に、近衛首相は式殿正面に参進して威容を正しました。愈々萬歳の奉唱であります。参列者全員の視線も皆首相に集まつた様です。やがて午前十一時二十五分、近衛首相の發聲にて、天地も搖げとばかり、天皇陛下の萬歳を奉唱致しましたが、時を同ふして、海陸呼應して發射する皇禮砲の殷々たる砲聲は、一齊に式場に轟き渡り、大内山の翠松の中より、群り立つた群鳥の一群二群が此の聖典を壽ぎ申上ぐるが如くに、式殿の左右上空を暫くは去りもやらず、舞集ふ様は筆舌に盡し難き瑞祥でありました。感激は獨り参列者ばかりでなく、全國津々浦々に至る迄、ラヂオを通じて、近衛首相の發聲に和して、一齊に萬歳を奉唱した一億同胞の感激の一瞬である事を思ふ時、一入胸を打たれるものがありました。かくて全員最敬禮のうちに、近衛首相謹んで式典終了の趣き奏上、兩陛下にはいと御機嫌麗はしく入御あらせられまして、第一日の式典は國民歡喜の裡に莊嚴に終了致したのであります。

翌日の奉祝の御宴にも参列致しました。名もなき微臣に至るまで御鄭重なる御宴を賜はり、至尊の御前に於て、祝杯を舉げて聖壽の萬歳を壽ぎ奉るの光榮に浴しましたことは、つくづく昭代に生を享けたるものの有難さを痛感致し、皇恩に感謝し奉る次第であります。今や皇國は内に諸般の体制を整へ、國力を充實し、外は獨伊の兩國と盟約を結び、世界の動向を推進指導し、大東亞共榮圈の確立に邁進するの極めて重大の時局に立つて居るのであります。此の國歩艱難の秋、吾々國民は一億一心、更に覺悟を新にして、御奉公の誠を致し、聖旨に副ひ奉らねばならぬことを、胸中深く銘じました次第であります。

紀元二千六百年式典奉祝會参列の光榮に浴すべく、十一月八日午後四時十五分、長崎驛發にて東上、九日午後七時指定の旅館に投宿せり。氣がかりなりしは天氣なりしが、十日早朝起き出て見ると一天雲なく快晴の秋日和なり。日比谷公園に集合し、整列して式場へ参入す。式殿が宮城の松の緑を背景にして嚴かに浮び出て居る様は、不滅の傳統的國粹精神を其儘現したる如く、幽邃森嚴なる氣に充ち小鳥が高く低く飛び交ふを見たる時、私は更にしみじみと皇國の隆昌を感じたり。十日の式典には私は後方の席より玉座を拜し、申すも畏き朗々たる玉音をかすかに拜聞したるときは、胸迫り五體ふるへて感激の涙出でたり。十一日の奉祝會にも後方の席より、玉座を拜して麗しき龍顔を拜し奉り、奉祝の酒饌副饌を戴き、日本に生れたる有難さに感泣したり。又高松宮殿下奉祝の御詞を奉られたる、御力強い御聲に並居る五萬五千人の人が水を打つたる如く静まり返り、

只々感激せしものと思ひたり。此の一生一代の光榮を胸に刻んで一層職務に勉勵し、皇恩の萬分の
一に報い奉る覺悟を固くせり。

長崎縣廳醫系係 坂 田 佐 八

圖らずも近衛首相より、紀元二千六百年式典參列につき、御鄭重なる御案内の恩命に浴して以來
只管攝生謹身光榮の日を待ち祈つたのである。

十月下旬、富田内閣祝典委員長より祝典次第及參列者心得、鐵道乗車券等を送付せられて、愈々
光榮の日の迫れるを覺え、心身共に清淨を持し、愈々十一月八日草屋一同の者に見送られ、午后四
時十五分式典參列列車に便乗、長崎驛を出發、感激と喜色に溢るゝ車内の光景は殆んど常の旅には
見られぬものがあり、快走實に二十有餘時、九日午后七時東京着。祝典氣分濃かなる帝都の雰圍氣
に觸れつゝ、指定の世田ヶ谷、旭莊に向ふ。實に全國五萬餘の參列者は夫々市内各旅館に分宿配置
せられ、我等も莊主の案内にて、同縣二十餘名は氣樂に旅舎に入るを得た。

愈々明日式典參列の喜びを胸一杯秘めたる心境は同宿の者の相等しき感慨であらう。

式 典

十一月十日、悠久なるかな二千六百年、皇國一億の赤子が待ちに待つたる曠古の盛儀、天此の情
を汲みてか晴朗、絶好なる式典日和である。早曉に離床、齋戒沐浴、身装を整へ、拜受の參列徽章

を佩用、午前七時半日比谷に設けられたる指定の豫備集合所に參集、順次式典場に向ふ。

兩側の人道には奉祝者雲集して、雑沓の中にも拘らず、秩序ある交通整理を感謝しつゝ、馬場先
御門より靜肅に入場することを得たのである。仰ぎ見れば清澄にして爽涼たる晩秋の空、瑞雲大内
山にたなびきわたり。伏して式場を見渡せば、滿場謹嚴に滿ち、夫々赤誠を面に浮べたる參列者相
並び、洵に天地相和し、式典の神々しくも尊きを思はしむるものがある。

聽て式の開かるゝや、君が代の樂、莊重に奏せられて、天皇 皇后兩陛下嚴かに出御あらせら
る。一同の感激は實に茲に最高潮に達したのである。

國歌奉唱に次いで、近衛總理大臣は昇殿咫尺に 陛下を拜しつゝ、一億民草を代表して壽詞を奏
上し奉る。その聲擴聲器を通じて流れ出で、場内くまなく響きわたり、殊に「臣等更ニ遠ク心ヲ肇
國ノ淵源ニ馳セ思ヲ創業ノ雄圖ニ致シ感激益々深シ」と音吐朗々奏し奉るや、萬感交々起り、不思
感激の涙禁じ難きものがあつた。

畏くも 天皇陛下には玉音いとも朗かに優渥なる勅語を賜ふ。滿場寂として聲なく、靜かに頭を
下げて恭しく玉音を拜し奉る。畏れ多き極み、實に國民として萬世不滅の感激であつた。

此の間心身共に硬直を覺え、生を此の世に享けて此の盛儀を拜するの感激、歡喜之を何物に譬へ
何を以てか表現することが出來よう。

近衛首相發聲の下に聖壽の萬歳を三唱し奉り、聽て皇禮砲轟く内に還御を奉送し奉り、式は目出
度くこゝに閉ぢられたのである。

翌十一日は奉祝會日、相變らず最上の奉祝日とて一天雲なき秋空、宛然神國の有難さに一入感激しつゝ、夫々記念章を佩用、前日同様の順序を以て入場することを得たのである。

聽て 天皇 皇后兩陛下出御あらせらるゝや一同國歌奉唱、次いで高松宮殿下には玉座の御前に御參進、奉祝詞をいとも崇高赤誠、朗々奏上あらせられたる、殊に御祝詞の御中「臣、宣仁謹ミテ言ヌ」と拜す、眞に我が一君萬民の大義を昭示し給ひたる、今更ながら萬邦無比なる國體の尊嚴さを、ひしと胸に刻み、只々恐懼感激の極みであつた。

この日、畏くも再び有難き勅語を下し賜ひ、重ねて玉音を拜す。聖慮の廣大無邊なるに感激更に新なるものがあつた。

畏くも 天皇 皇后兩陛下には天機並に御機嫌いとも御麗しく一億蒼生の赤誠溢るゝ奉祝を嘉せられ、終始御満悦の御様子を拜したるは、忝じけなくも尊く、この感激亦到底筆紙に盡し難きものがある。

剩へ祝典の御饌は 天皇 皇后兩陛下の召させらるものと同じ野戰料理と拜聞するだに恐れ多く恭しく饌を開き盃をいたゞくの光榮、何ものか之に比すべきものがあらう。これこそ世界各國其の例なき所、正に萬世に傳ふべき君民和樂の盛宴である。宴彌々盛に至れば、悠久の樂、浦安の舞、續いて陸海軍樂隊の吹奏、全國中等學校生徒の齊唱等々、何れも神夢をも覺まささんばかりの盛儀、宛然感激の坩堝と化するのである。聽て高松宮殿下の御發聲により滿場天地も割けんばかり、聖壽の

萬歳を三唱して式は閉ぢられたのである。

私かに拜聞するに、翌十二日畏くも 皇太后陛下には宮城御參内の御途次、御車を晴の式殿に托げさせられ、親しく式典の後を御巡覽、分けても祝典事務局長に委曲式典の御模様を御下聞遊ばされ、野戰料理により五萬の參列者悉く歸郷の上その喜びを頌つことを得たるを一入御満悦の御由に洩れ承りたるだに畏れ多き極みである。

かくて曠古の盛典に參列の光榮に浴し、感激肝に銘じ、十三日午前十一時帝都發歸郷致したのであるが、今や我國に世界平和の礎石として未曾有の難局に立ち、上御一人の御稜威の下、外に聖師の果敢なる働き、内に一億一心天業の恢宏に邁進しつゝあるとき、恰も悠久二千六百年を迎へ、この惠澤に浴する、眞に聖恩の遍きに感激の辭を知らず、只管天壤と與に無窮なるを祈念して止まぬ次第である。縱令式典參列の恩命に浴せざる者とても、全國に電波或は新聞其の他により之を傳へられ、一億の民草その感を同じうする所にして、之實に我國一大飛躍の瑞祥とも思ほへて感謝、感激發奮奉公の念は一層振起せられたのである。

茲に感ずることの万分の一も筆に現し得ざるもその一端を敘して所感となすものである。

紀元二千六百年式典參列の感想

陸軍少佐 佐々野 達

千代かけて汚きさらまし 身の譽れ

選ひ召されし 神武紀元を

再度の微傷に、生死榮辱を借にせし部下を戦線に残して、後送の悲運に遭ひ、郷土同胞に對しても面目なく、何を以て之れを償はむかと寧日なく苦慮せる所なりき。然るに不圖も進級の恩命に浴し、今又郷土有勳者の代表として、皇威輝く紀元二千六百年の式典に參列するの光榮に浴す。家門の名譽、身の光榮として、唯々感激あるのみ。此の上は、一層粉骨碎身、臣道を実踐して、奉公の誠を致す可く、堅き信念を附與せられたり。

千早ふる 神代なからの 富士か峯

遮きる雲に 心とさして

久方ぶりに富士の英姿を仰ぐべく、車窓より望めば、黒雲に包まれて其の姿を見せず、思ひは明日の式典場に馳せて、不安の念を禁じ得ざりき。

天晴れて 輝き亘る 一億の民

富士見町の高臺より遠く西方を眺むれば、昨日に變り富士の英姿は既に頂上に白雪を戴き、毅然として其の姿を現はし、一點の雲なく、眞の日本晴れの天氣に心は躍り血は滾りぬ。

尊さと莊嚴に滿つる宮城を仰ぎ、整正肅然として莊嚴なる玉座を正面に設けられたる式場では神前に額きし心境となり、陛下を奉迎奉送の嚙曉たる君が代の奏樂の音、勅語を賜ふ玉音に恐懼感激、心身は仲天に在りて唯是れ空、頬に流るゝ何物かを感じ、肺腑より叫び出る萬歳の聲と共に「聖澤雲天何以報臣心鐵石未全衰」と腦裏に刻みこみたるのみ。

奉祝會當日十一月十一日夕刻より降雨となる。噫神國なるかな大日本帝國。尊しや神威の加護、幸福なるかな皇國一億の臣民。滅私奉公一死以て 皇道を翼賛し奉らむ。

鎮西の郷土國民に一言す。玉座否神前の臣下としての禮儀作法は平素心得置くと共に實行す可きものなる事を痛感せり。

紀元二千六百年聖典に參列して

帶勳者代表 佐藤 清吉

紀元二千六百年を慶祝する曠古の一大聖典に、縣民總代として參列の御沙汰を拜せし時、餘りの面目と最大の歡喜とで、感激其の言ふ所を知らなかつたと同時に、其の參列の光榮に浴する迄は身に恙なきやうにと専ら是れ祈り、自肅自戒只管其の日の來たるを待つのみであつた。

十一月八日午後四時十五分特別列車に乗込み、汽笛一聲長崎驛發東上する、此の身此の心は譬へやうない感激に充たされた。

十一月十日。今日を紀元二千六百年奉祝式典だ。私共は豫備集合所日比谷公園より列を正して、宮城外苑東入口馬場先御門より會場に進む。場内の古風神さびたる清楚の飾には自づと襟を正さしめられつゝ、五萬有餘の參列者が悠揚威儀を正して式場に入るの光景は、之れが又聖戰四ヶ年前古未曾有の受難の國と、誰が想像だになし得べき、殊に海外同胞が眞の故國の姿を見て、歡喜して意氣昂く入場するを目撃するに及んでは、流石東亞の盟主國と國威の隆々たるに血湧き肉躍るを覺え御稜威の下 皇恩の有難さに先づ胸打たれ、皇國に生を享けし身の幸福を染々と感銘した。而して悠久二千六百年の聖紀を壽ぐ今日の佳き日は、菊花の清香地に満ち、一天雲もなくして澄み渡り、瑞氣爽涼の氣満てる日本晴に莊重典雅の裝飾を施し、松も綠濃き宮城外苑の聖地の式場内に在る參列者は時刻と共に肅々として直立し、場内寂として咳聲一つたになく、莊嚴の氣式場一杯に流れる。斯かる中に陸海軍々樂隊の君が代の奏樂裡に、兩陛下式殿に臨御在らせ給ふ。此の間目の邊り龍顔を拜せし事の忝けなき。畏くも勅語を賜れば、式場全体は針一つ落ちても聞えるほど嚴肅な静けさに包まれて、玉の御聲を拜聽せし事の勿体なきよ。君が代を奉唱し、近衛首相に唱和して天にも響けと聖壽の萬歳を三唱せし時の有難さ。嗚呼微臣私の如きが此の光榮に浴す、只々天恩の宏大無邊に、感激に咽ぶ涙は次ぎより次へととめどもなく双頬を傳つて流れる。仰ぎ見る大内山の樹々の上には、祝砲と共に一群又一群と千百の小禽が天に舞上つた、恰も天壤無窮の皇運を壽ぐがやうに。實に此の時こそ、萬象は此の莊嚴境に歸一せられてしまつたのである。萬邦無比の國體、金甌無缺の國體、今更の如く痛感せしめられた。斯くして閉式散會となつて始めて吾と吾が心を取戻したのである。

たのである。

翌十一日は昨日にも優る澄空一碧で、常に見る吾が國の神秘的天佑を偲びつゝ、絢爛華麗な飾りの奉祝會場にて、紀元二千六百年記念章を胸にして 龍顔を重ねて奉拜するの光榮に感激す。此の日奉祝會總裁秩父宮殿下御代理高松宮殿下奉祝詞を奏上し奉る。「紀元二千六百年奉祝會總裁代理臣宣仁」と御聲いと清らかに又嚴かに擴聲機に乗つて透徹したる時の忝けなき。そして何かしら骨の髓までもしみ通り落涙禁じ得ず、一君萬民の吾が國體の尊さに益々感銘を深く新たにす。開宴に當りては 陛下臨御の下に御酒御饌を戴く。龍顔いとも麗はしく、參列者に賜りしと同じ神酒食饌で御手づから取らせ給ふを奉拜するに至つては、恐懼感激御仁慈の餘りに高大なるに涙又しても溢れる。更に金枝玉葉の御身にして嘗て前例なしと承る高松宮殿下の御發聲に唱和して 聖壽萬歳を奉唱して、君民一体の精華を顯揚せしは又無い感激の浪だ。

嗚呼此の盛典二日の感激は、皇國に生を享けて、宏大無邊の皇恩に浴せる吾々日本人のみが眞に感得し得る誇りである。そして餘りにも大きい此の感激は胸一杯で、吾等の拙きを以てしては、筆や口もて表はし得べきもので無く、

御民われ生ける驗あり天地の

榮ゆる時に會へらくおもへは

の感激である。

實に此の盛儀に浴せし私の全身全靈は全く淨化せられ、只「有難い勿体ない」で埋められて、

龍顔の奉拜も、玉の御聲の拜聴も、君が代の奉唱も、聖壽の萬歳も、其の淨化せられし純一無雜只赤誠の感激の結晶より出でしものであつた。そして又此の感激こそ、私の生涯を通じて忘れ得られない所である。

今皇國は大東亞共榮圈の確立と日獨伊三國同盟に依る世界新秩序を建設して、世界恒久平和を期圖しつゝあるが、これは正しく吾が建國の御遺訓八紘一字の顯現である。茲に於て此の崇高な使命達成の爲には、吾等は悠久二千六百年を貫く歴史の精華と力強い民族の傳統に培はれた底力とを今こそ精一杯發揮すべきである。想ふて茲に至る、私は此の盛典に列して無上の感激に心わななき、只此の上は益々精根の限りを盡して臣道實踐、以て聖恩の萬分の一に報ぜん事を固く心に誓ふ次第である。尙ほ「聖徳餘光」「列聖珠藻」は永く家寶として子々孫々に傳ふべきを期す。

澤山精八郎

今回はからずも我國曠古の聖典、紀元二千六百年奉祝會に參列致しまして、私のつまらない生涯の中、これ程感謝感激の念に打たれたことはありません。此日宮城前廣場の松の緑りの色深き處、總員五萬五千人の榮ある民草が、周圍を帷舎でかこまれた廣大なる式場に集まつて、正面昔其儘の式殿に、畏くも 兩陛下の尊き御姿を拜し奉つた時の恐懼感激、高松宮殿下が朗々たる御聲を以て祝詞を御奏上遊ばされた時の力強き有難さ、満場唯森嚴と云ふべきか、靜寂と稱すべきか、何とも云へない勿體なきの極みの内にあつて、感涙にむせぶだけでありました。要するに、私は此生來初めて的光榮と感激を終世忘るゝことなく、臣道完遂に向つて一家と一族を擧げて邁進せんことを思ふのみであります。

紀元二千六百年奉祝式典參列の感想

東彼杵郡江上村長 志方進

皇紀二千六百年式典並に奉祝會の輝く盛儀に參列するの光榮に浴することを得ましたことは、私の終生忘れ得ざる感激で御座いました。

畏くも 天皇 皇后兩陛下の尊い御姿を拜し奉り、優渥なる御勅語を賜り、剩へ御鄭重なる記念品並に御酒饌を戴きました時、只々恐懼感激が胸に迫り、皇恩の忝さに涙の溢るゝを禁じ得なかつたのであります。

時恰も日支事變の眞最中、斯くも盛大なる式典が舉行せらるゝを思ひました時、この悠長な底力のある皇國に生を享けた幸福を、我ながら感激致し、此後この光榮、この感激を腦裡に深く刻み、一層聖旨を奉体し、至誠奉公以て、皇謨を翼賛し奉る事を堅く御誓ひ申しました次第で御座います。

紀元二千六百年奉祝會に參列して

縣社温泉神社司 志 岐 島 根

歡喜に溢れ待ちに待つた皇紀二千六百年式典十一月十日、壽ぐ世紀の日が我等參列者五萬參千の上に燦たる榮光と共に齎された。仰ぎ見る大空に一點の雲もなく、晴爽の氣に満ち、心も晴れすがくしき朝であつた。

青空は朗らかに晴れて天津日の大御光ぞ輝きにけり

私等一同は齋戒沐浴襟を正して、日比谷公園に整列し、神武天皇肇國の昔を偲び奉つた。

動きなき國の基を建てまし、神の御稜威を仰ぐ諸人

午前八時三十分より入場、先づ馬場先門に立てられたる雲つくばかりの綠門、燦然と輝く長旗、根元に植ゑられたる黄菊白菊の薫りもゆかし。

菊の花千代田の門を照りはへて今日の御式やかしこかりけり

聖域に設けられたる式場に參入し、正面の式殿が翠綠彌深き千代田城を背景にして立てられたる莊重さ、玉殿の兩側に八本宛正立せる萬歳旗を拜して

大君の御稜威輝く萬歳の旗の光を仰ぐ尊とさ

午前十時四十八分、忘れぬ時間である。儀仗隊の吹きならす喇叭「君が代」の吹奏裡に、天皇皇后兩陛下の出御を仰ぐ參列者の胸奥にはたゞ赤心奉公の念湧くのみ、

吹きならすものゝ音聞ゆ大君の行幸畏こみ拜みまつる

石屋戸を神出てまし、はかくはかりかしこかりけん昔思ほゆ

畏き御英姿を拜して身心自ら引緊る、參列者五萬、一心ひたすら盡忠報國の血燃ゆる。

今日の式典に近衛總理大臣の壽詞奏上、音律朗々心底に響く、一同寂として水打つたるが如し、此の時である、生れて始めて拜する玉音畏き 陛下の勅語である。朝夕神祇奉仕の神職として特に感じ入りしは、

我ガ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアランコトヲ期セヨと誠に忝き極みである。

十一月十一日、愈々今日の良き日は君民一體和樂の有難い日である。喜の一色に飾られたる式場に、高松宮殿下の奉祝詞を拜して、聲力明朗元氣潑刺たる、實に心強き思ひを深くす。野戰料理と奉祝神酒を戴きて、

大君の御徳あまねし千萬の青人草にかゝる御惠

大君のみもとまちかにくむ神酒のかたしけなきに涙こぼるゝ

此の日宮内省樂部謹作の悠久神樂舞のおくゆかしさ、陸海軍々樂隊の奏する壯麗なるリズム、全國より選拔されし學生若人の奉唱せし國民奉祝歌「今こそ祝へ」の心根を打込んだ明朗譜は一節又一節、天をもゆらく意氣に溢れ、感激此の上もなし、參列者一同力の限り萬歳を三唱して、國民の萬代呼ばふ諸聲を君も嬉しと聞こしめすらむ

祝ひつゝゑらきとよもす國民を御心強くみそなはすらむ

二日に渡る曠古の一大式典に參列して萬感胸に迫り古歌の

み民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる御代にあへらく思へは

の感じを深く心魂に徹する事の出來たのは又なき高き榮譽であつた。

橿原の杜に輝やく金の鵝光は國の榮えなるらむ

二千まり六百代祝ふ御式こそ千代田の宮の榮えとそなれ

感想

佐世保市會議長 篠崎 縁吉

神武天皇橿原の宮に即位の大典を擧げさせられてより、悠久こゝに二千六百年、一系の皇統は連綿として萬世に渝ることなく、金匱無缺の國體は燦として萬邦に輝き、一億國民の限りなき誇と歡喜とを以て迎へられた、歴史的盛典は菊花馥郁と薫る十一月、式典は十日に奉祝會は十一日に行はせられた。此の日秋空一碧の肇國晴れ、瑞雲靄々として天に棚引き、金鵝は空に舞ひ、和氣は洋々として禁苑の外に溢る。これこそ眞に神國日本の瑞祥といふべきである。

此の曠古の盛典に、私も五萬數千の參列者と共に參列し、龍顏を奉拜するの光榮に浴し、優渥なる勅語を賜はり、又陛下の御前に於て、祝盃を乾して大御代を壽ぎ奉りしことは、天平の昔、

聖恩の宏大無邊に感泣したる萬葉歌人の「御民われ生ける驗あり天地の榮ゆるときに遇へらく思へは」との古歌も思ひ出されて、生涯忘るゝことのできない感激にうたれ、昭代に生を受けたる幸福と有難さに胸迫ると共に、皇國の興隆を祈りて止まぬ至情の熱烈たるを禁じ得なかつたのである。

惟ふに、今や帝國が盟邦と携へて、萬邦協和の世界新秩序の建設に邁進し、神武天皇創業の理想たる八紘一字の聖業完遂に努めつゝあることは、寔に曠古の偉業と謂ふべく、之を紀元二千五百年當時の日本が鎖國主義に依り、時勢の進運を覺らず、徒に桃源の夢に耽り、内に幕政漸く衰へ、外邊境の防備急を告ぐるの狀態なりしに比較し、其の異常なる躍進振こそ、世界史上の驚異と謂ふべきである。然りといへども我々が更に百年後の日本の姿を豫想し、八紘一字の聖業を完遂せんが爲には、尙幾多の怒濤艱難の横はるものありて、蔣政權は四川の一角に餘喘を保ち、英米は援蔣敵性を發揮し、日本國力の消耗を企圖し、歐洲情勢は複雑怪奇を極め、盟邦獨伊亦國運を賭して敢闘しつゝありといへども、其の動向は逆賭すべからざるものありて、皇國日本はまさに古今未曾有の民族的大試鍊に際會しつゝあるのである。思をこゝに致す時、我等國民は紀元の佳歳を慶祝するこの榮光ある盛典に當り、捧ぐべきはたゞに奉祝と感激の誠意に留まらず、この歳の有つ深き意義を感得し、肇國の大理想を完遂し、萬代不易の國礎を確立すべく、一段の覺悟を新にすべきであつて、これこそ我々一億の民とその子孫に負荷せられたる重責たりと痛感するのである。即ち我々國民はこの非常の世局に際し、御聖勅を奉戴して、神慮八紘一字の精神に基く世界新秩序建設と東亞共榮圈確立の爲、内にありては諸般の體制を整へて國力の充實を圖り、外にありては世界の動向を指導

推進し、一億一心となつて臣道を實踐し、高度國防國家體制の完成を期すべき秋であつて、これ實に臣民我等の崇高なる責務、最高なる名譽にして、而して又宏大無邊なる聖恩に對へ奉る所以である。斯くして舉國一致蹇々匪躬の忠節を竭したる百年後、即ち紀元二千七百年の盛典に於て、皇國日本が國威を八紘に光被し、世界に於ける雄麗壯嚴の姿こそ、御稜威によるはいはずもがな、一億國民と其の子孫が神武天皇の創業に思を馳せ、皇國の宏遠にして皇謨の雄深なるを念ひまゐらせ、世界新秩序の指導者として和衷戮力、忠節を盡したる結晶といふべきであつて、この覺悟こそ眞にこの盛典に當り、大和民族として、祖宗の神靈に對へ奉る所以なりと確信するものである。こゝに謹んで參列の感想を述べ、慶祝の誠意を捧げ奉る。

榮ある式典並に奉祝會に參列して

女子師範學校書記 柴 田 末 吉

參列前の某日、内閣總理大臣、紀元二千六百年奉祝會長公爵近衛文麿閣下の名を以て不肖宛速達書留郵便が到着しました。何と考へても心當が御座いませぬ。然し宛名人に相違ないので開封拜見して見ると、式典と奉祝會の御召狀でありました。天皇 皇后兩陛下の行幸行啓を仰ぎ奉り宮城外苑に於て舉行せらるゝ曠古の盛典に、夢想だになかつた判任官待遇總代として召さるゝ光榮に浴しましたことは家門の譽と、今更ながら榮光燦たる國土に生れた喜びを、心の底から感謝致しま

した。直ちに全書類を校長先生の一覽に供し、賜暇の許可を得て參列したき旨を報告しました處、參列證、參列者心得、大村——東京間乗車證等の關係書類を折返し送附して戴きましたので、自肅自戒専ら健康に留意し、ひたすら出發の日を待ちました。愈々出發すべき十一月八日は來り、午後諫早驛にて待つうち、臨時列車が來ました。見ると客車の外側に式典參列者専用長崎縣第何號との貼紙あるを見て、一層感激しつゝ乗車、參列者に伍し、係員へ届出で、五時二分諫早を出發致しました。下關よりは本縣の次に佐賀縣の參列列車が接續されてゐました。翌九日車中にて十五日迄有効の東京市電の無料乗車券を配布され重ねくの優遇に感謝しました。又旅館の割當がありました。午後七時三十五分東京驛下車、出迎の愚娘と共に宮城遙拜の後、指定の世田ヶ谷區上馬町勝明館に投宿致しました。明くれば十日好天氣に恵れ、式典に參列すべき全國代表の豫備集合所たる日比谷公園の廣場に參集し、係員の誘導に隨ひ式場に向ひました。途中馬場先門入口の奉祝塔の崇高なること、尖端の鋒、目ばゆき計り輝き、錦の御旗翩翩と翻へり、土臺の菊花馥郁と薫り、瑞光漲る中を進みました。式場を見れば周圍は天幕並に淺黄に白の幔幕を張繞らされ、記念マーク入りの旗無數林立し、其廣大さに驚きつゝ參入すれば、式殿には玉座御座を設け、背後に金屏風燦然と輝き、正面には萬歳の大額を掲げ、菊花御紋章燦たる幔幕を張り繞らし、前には日月、八咫鏡、金鶏桐花等の紅旛左右に八本宛立てられ、其莊嚴さは筆舌につくされません。其中に設けられたる席に拙なき私も五萬五千の代表參列者の一人として參列させて戴いたかと思へば、誠に有難くて、感涙を止めることが出来ませんでした。定刻となれば、陛下の行幸を擴聲機にて報ぜられました。

起立の號令にて一同起立、儀仗隊の喇叭の音、陸海軍々樂隊「君が代」奏樂中、畏れ多くも天皇 皇后兩陛下龍顏麗はしく式殿に出御遊ばされました。最敬禮の號令にて敬禮をし、生れて始めて御前にて「君が代」を齊唱、次いで近衛内閣總理大臣 玉座の前に進まれ、明朗なる音聲にて赤誠溢る、聖紀の壽詞を奏し奉られました。其後で、畏れ多くも優渥なる勅語を賜はりました。その時滿場寂として聲なく、皆感極つて有難涙に咽びました。次に東京音樂學校生徒並に陸海軍々樂隊の紀元二千六百年頌歌齊唱、續いて内閣總理大臣の發聲にて、天皇陛下萬歳を天地も響けと計り赤心籠めて唱和しました。場外には陸海軍の皇禮砲轟き渡り、其の嚴肅莊重なることは拙い言葉では盡くされませんでした。

式終了後、在京の愚娘に案内せられ、明治神宮、東郷神社、靖國神社に參拜、各所にて旗行列に出會ひました。事變以來始めての御祭騒の由にて、御輿を擔ぎ練り廻る處あり、旗行列あり、夜は提灯行列あり、流石に帝都のこととて人出の多いのに驚きました。翌十一日の奉祝會には今回御下賜の記念徽章を佩用し、市政會館階段にて記念撮影の後、前日同様、豫備集合所より係員の誘導にて會場に行けば、あの廣き式場の淺黄に白の幔幕は全部紅白の幔幕と取替へられ、五萬數千の机の上には記念品(列聖殊藻、聖徳餘光一部)饌(御酒、祝餅、御飯、御肴、口取、御汁)副饌(栗、肉蒲鉾、乾魚肉、其他)御酒、盃、果物、興亞パン、風呂敷等の數々が整頓されてゐました。やがて起立の號令にて一同起立、陸海軍々樂隊の「君が代」奏樂中に 兩陛下の出御を仰ぎ奉りました。最敬禮の後、高松宮殿下恭しく 陛下の正面に進ませ給ひ、明瞭なる音聲にて奉祝詞を奏上遊ばさ

れ、「臣宣仁」と御讀遊はされし時は、思はず感涙に咽びました。次に米國大使の明快なる祝詞終了まで、畏れ多くも 兩陛下の立御遊ばされしは恐懼感激の極みで御座いました。ここに、畏れ多くも 兩陛下の御前に於て祝盃を戴き、君臣和樂の饗宴が開かれました。開宴劈頭奉祝舞樂中黒色の冠、赤色の服裝にて男裝の四人の舞人舞臺に現はれ、抜劍にて「悠久の舞」を 天覽に供し奉るを俱に拜觀、陸海軍軍樂隊に引續き、全國學生代表の奉祝國民歌齊唱の後、高松宮殿下の御發聲に唱和し、誠心から聖壽萬歳を奉唱し、無事兩日の式典を終了しました。此の聖恩の宏大無邊なるに應へ奉る道は、赤心以て粉骨碎身、與へられたる職域に邁進し、滅私奉公の誠を致し、皇恩の萬分の一に報い奉り、又御下賜の數々の記念品は永遠に子孫に傳へ、以て一家の無上の光榮と致し保存致す覺悟で御座います。

感想

清水 水作 兵衛

私は去る十一月十日十一日の兩日宮城外苑で舉行せられた、紀元二千六百年奉祝式典並に奉祝會に縣民總代として參列するの光榮に浴し、一代の名譽、家門の譽として、恐懼感激致した次第であります。途中は團体列車に乗込むので、何時もの團体旅行と同じく喧騒と混雜で終始はせぬかと思つて居ました所、實に意外にも皆が靜肅に行儀よく坐臥して居る場面を見たのであります。之れ

も時局の反映とでも申しますか、縣民代表諸氏の心構へが大分従前と變つて居るのではないかと力強く感じた次第であります。之れは參列前、式場、會場等に於ても全般的に見られた情景でした。

第一日の式典は畏れ多くも 天皇 皇后兩陛下の御親臨を辱ふし、最も嚴肅莊嚴裡に終り、有難い極みでありましたが、第二日目の奉祝會は、私が最も感激した日でありました。即ち奉祝詞奏上に當り、奉祝會總裁秩父宮殿下の御代理として高松宮殿下が奉祝詞を御奏上になりましたが、その時の力強いお聲、判然と分り、「臣宣仁」と申された時には實に涙が零れました。苟くも御兄弟の御身で在しながら臣下としての御言葉、 天皇の尊さ有難さを染々と感じた次第であります。要するに私は式場、會場に於ける全國五萬五千の參列者の感激と緊張さを目の邊りに見て、日本の前途を心強く感じました。

此上は君國のため粉骨碎身、職域奉公の誠を致し、臣道實踐に邁進したいと存じます。

清水治代

世紀の感激であつた。大内山の綠濃き聖域、國民的感激の最高潮に達した。陛下勅語御朗讀の一時、熱い感激の涙がボタ／＼と双頬に傳つた。皇國は、日本は、東亞共榮圈の確立に、ひたむきの飛躍をつゞけつゝあるのだ。支那大陸へ、佛印へ、蘭印へ、鵬翼は大空をかけつて、大きく、はゞたいてゐる。

私は、聖典參列の光榮を、一門一族の光榮とのみは考へてゐない。この限りなき光榮を、この涯しなき感激をひろく郷黨に語り傳へ、昭和維新の力強い推進力となつて、聖恩に應へ奉るの一端にも資したい。(昭和一五、一二、七、渡支途上、上海丸船中にて)

皇紀二千六百年奉祝式典に參列して

南松浦郡奈留島村長 宿 輪 靜 磨

皇紀二千六百年の盛典に參列し、感激興奮の裡に、聖壽の萬歳を奉唱の瞬間、泌々と皇國に生を享けたる伴を感じました。殊に異域から光榮の御召を蒙つた第二世が、物語りとして聞く母國の眞の姿、現實の力強さを感得してゐる、あの風景を見た時、悠久二千六百年淀みなき國運進展が思はれて、自分も亦強く赤子の一人として、此の光榮と幸福に感奮、臣道實踐に邁進して、愈々八紘一字の皇運を扶翼し奉らねばならぬと、堅く心に誓つた次第であります。

神 宮 長 見

世界史上に比類なき紀元二千六百年奉祝式典並に奉祝會を宮城外苑に於て舉行せらるゝに當り、一億國民中より、五萬二千餘人の參列者の内に選ばれて、長崎縣民總代として參列するを得たるは

實に千載一遇、家門の名譽光榮限りなき次第で御座いました。

莊嚴なる式場に列し、畏くも 天皇后兩陛下の 龍顏を拜し奉り、誠に優渥なる御勅語を玉音朗々と御降し賜はり、恐れ多くも 兩陛下の御前に於て君臣和樂の御祝宴に酒饌を戴きたるは、洵に恐懼感激措く所を知らず、君が代の國歌奉唱、 聖壽萬歳を奉唱したる時は實に涙が溢れ出ました。全く此の有り難き御代に皇國の國民として生れ合せ、此の御聖典に參列するを得ました光榮、誠に有り難き極みで御座います。此の上は 皇國臣民として 聖旨に副ひ奉り、粉骨碎身御奉公申上度いと覺悟を固めて居ります。

紀元二千六百年記念式典に參列して

白 戸 喜 美 子

十一月十日感激を胸いつばいにたゞえて私も縣民代表として參列させて頂きました。ほんたうによき年よき日に生れ合せた事をしみじみと幸福に感じました。あの莊嚴なる君が代の奏樂裡に、兩陛下の尊くも畏き御姿を遙かに仰ぎ奉るさへ胸いつばいの感激にて、視野も曇りがちでございました。綠濃き大内山の常綠木も永久に聖壽萬歳をことほぐが如く毅然とそびえ たゞく日本國民と生れし事の有難く、一生を通じて忘れる事の出来ない喜びを、いつまでもく忘れず、新体制下の國民として滅私奉公、以つて皇恩の萬分の一にも報い奉らん固き心持つて式場を退きました。

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會に參列して

川南工業香燒島造船所運搬工組長

末 永 汐 吉

遠く肇國の昔、神武天皇様が橿原宮に於て御即位あらせられて以來、萬世一系の天皇を戴く我國は皇威隆々として、此處に悠久二千六百年を迎へました。昭和十五年十一月十日十一日兩日、天皇后兩陛下の親臨を仰ぎ、光輝ある曠古の盛典二千六百年奉祝式典並奉祝會を舉行せられました事は、我等國民にとつて最も忘れる事の出来ない有難い感激の至りであります。この光輝ある盛典に、不肖私は長崎縣産業報國會より工員六萬餘名の代表として指名せられ、參列するの光榮を與へられました。

この光輝ある式典に參列し 兩陛下親臨の尊嚴なる會場に立ちまして、全國より集まりし五萬五千餘の人々の靜肅さと、式典の神々しさに打たれて、知らずく感涙にむせんだ次第であります。私の如き一勞働者でさへ、日本帝國の光輝ある歴史と國體の尊嚴、萬邦唯一の神國の有難さに感激し、皇恩の光浴に心から坐伏しました。

二千六百年前、神武天皇の御宇に輝き出した日本帝國の光が今將に其の數千倍數萬倍となりて輝きつゝあることを充分に感知せしめられたのであります。出來ますれば、この光輝ある式典並に奉

祝會に五萬餘名はおろか、全國民を參列せしめられて、この感激を味つて戴きたいものだといふべく感じました。然も 兩陛下におかせられましたは、我等參列者に對し、いや全國民に對して有難き御勅語を賜りたる上、御厚志溢れる貴き御品々と御酒迄御下賜遊ばされたのであります。この大御心の臣民に對する尊厚なる御心情に、有難く勿体なく、唯々感激一杯で、何か心中に湧き出づるものを感じずには居られませんでした。

私はこの光輝ある盛典に、工員代表として參列するの大任を無事果して、感激と歡喜に満ち／＼て歸郷したのであります。故郷に在つて私の東上を案じて居てくれました妻を初め、父母兄弟はもとより先輩知人の皆様迄無事に大任を果して歸つた私の姿を見て、非常に悦んでくれました。私は何ももの取あへず、當日の模様を皆に話して聞かせましたところ、皆も同じく、兩陛下の大御心に有難く感激して泣いて悦んでくれました。私は御下賜の御酒肴を父母を初め親戚知人三十有餘名の人達へ分ちて、拜飲拜喰させたのであります。年老いた父母は、特に細くなつた眼に涙を一杯ためて、有難い事だ／＼と口ぐせの様に言つて泣いて呉れました。

私は皇紀二千六百年奉祝式典並奉祝會に參列の光榮に浴しまして、又此處にも我帝國にのみ見る美しい君臣の情を新に感知せしめられたのであります。

最後に臨み、あまり感激が大きいので、式典當日の模様及び感想を充分に書現はす事が出来ないのが残念であります。悠久二千六百年を期とし、愈々我が大日本帝國の光が全世界に輝きつゝある事を確書してペンを止めます。

二千六百年を迎へし日の本の

光を仰く宮の外苑

秋空に光輝く皇國の

御姿榮ゆる今日の盛典

歸郷の夜一家揃つて大君の

大御心に泣かされて暮る

紀元二千六百年盛典參列の光榮に浴して

早岐町方面常務委員 瀬 戸 政 吉

熱涙に萬歳の聲潤ひて

胸に迫りて兩手舉げ得ず

御應へを如何にせばやと胸せまり

涙にぬれし面あげ得ず

何と云ふ光榮、何と云ふ有難さ、唯々御仁慈の極みに感激する思は筆舌に盡し得ません。唯愈々滅私奉公の一筋に光明を求めて、皇恩の萬分の一にも奉じたいと念する次第であります。

感想

地方事務官 田中唯重

一五八

悠久二千六百年の光輝ある歴史を讀へて、紀元二千六百年式典が、今や擧げられんとして居る。昨日迄雨又は曇りの空が、今日は全く晴れて、選ばれて式典に參列する五萬餘の人々を、こよなき歡喜に包擁して居る様に見受けられる。この聖代に生を享け、而もこの聖典に列するを得た、私の欣びは譬へ様もなきもので、只感激するのみである。

國家の興隆は國民の繁榮である。國家なき民族の如何に悲惨なるかは歴史が教へて居る。我々は凡ゆる困難試練に耐えて、大いなる國家目的達成に奉仕しなければならぬ。明治大正年代を経て、我國民は餘りに自由主義的に、餘りに私益追及に走りはしなかつたらうか、省りみて國家目的遂行の難澁を豫想する時、國民は翻然として民族の本性に立歸らなければならぬことを痛感するものである。この盛儀に列して、誰もが斯うした強い感情に打たれたことであらう。

時刻は刻々に進んで、重臣高官、外國使臣等多數上殿して、愈々開式の晴やかな雰囲気が増る。静寂そのもの、様な宮城外廣場に、玉砂利に軋る御車の音が傳はると、五萬餘の參列者は肅然として襟を正し、最敬禮を行ひて、兩陛下の出御をお迎へ申上げたのである。御麗はしき 龍顔を拜して、一同の感激は一入深いものがあつた。式典はいとも嚴肅に進められて居る。

この式典に 畏くも御勅語を賜はつて、一億同胞の進むべき途が明示せられたことは、誠に恐懼

感激に堪へない次第である。

この情景に浸つて、誰か皇國の爲に滅私奉公を誓はざるものあらうや、感極まりて倒れたものをも見受けた、さもあらう。

歴史は永久にこの盛儀を傳へるであらう、そして我等はこの感激とこの奉公の赤誠を民族の精神に残さなければならぬ。

永遠に保てこの感激を、そして率先して臣道を實踐し萬民翼賛の實を擧ぐるこそ、我等に與へられた奉公の途であると思ふ。終り。

平 房 子

曠古の盛典に參列させて戴きましたことは、私の終生の光榮とし、感激とする處で御座います。日支事變の眞只中に、斯くも盛大な式典が擧行せらるると思ひまするとき、皇國日本に生を享けた幸福感で一杯でございました。咫尺に至尊の御姿を仰ぎ、聖壽の萬歳を奉唱致しましたときは、自ら湧きいづる感涙を如何とも致し難い氣持で御座いました。

奉祝會場に於きまして、高松宮殿下の御聲を拜し、畏れ多いことではありますが、躍進日本の底力とでも申しませうか、神秘的偉大さに觸れた有難さを沁々と感じまして、一億國民の至誠は必ず天に通ずるものと確信致しました。

一五九

今後は一層「聖旨を奉戴し、自己の本分を盡す」この一語を深くふかく守らなければならぬと存じました。

一六〇

紀元二千六百年式典に参列して

長崎縣立聾啞學校長 多比良義雄

九月中旬、紀元二千六百年式典、奉祝會参列の御案内を忝うす。數ならぬ身、その謂れなきに、これ偏に盲聾啞學校長たるの故なることを知る。聖恩の治き畏き極みである。それより朝夕身心を清め只管光榮の日を待つのであつた。

十一月八日出發の日は來た。早くも人々は驛前に詰めかけてゐる。晴々しき顔、皆ちつとしてはをれない風である。そこに宮川翁ニコやかに、「今生のお土産に参列させて頂きます」「お目出度いことです、お体をおいとひになつて」思はず目頭が熱くなる。八十余の老翁にして斯の通りだ。見送る人、送られる人、歡喜に満ちたホームの光景である。四百餘の代表は係の方の指圖に依り班を分ち夫々車内に落ちつく。第二班の第一班が自分の所屬、刑事課長の原旗さんが組長、梅ヶ崎署長の富永さん、香燒造船所長の篠崎さん、日日の大森主筆、南山手の木藤さんと異り種揃ひ、平素はいかめしいお歴々も旅行に出掛ける子供のやうに楽しさうである。愈々發車、どよめく歡聲、歡びを乗せた列車は一路参列の途に上つた。車内の和やかさ、長途の退屈も吹き飛ばしての談笑、車中

の夜は明けて帝都に近づく、品川に降りるもの、東京驛に下車するもの、三々五々定めぬ宿に分れ行く。吾々は世田ヶ谷の奥、野澤町、宿の人達が同縣人であるのも何かの奇縁である。木藤さんと枕を並べてやすむ。

十日未明、空を仰げば一天碧空風も無く慶びの朝はほのくと明けた。用意を整へ勢揃へも早く差し廻しの電車にて日比谷豫備集合所に急ぐ。市政會館前の廣場は早くも参列の人々で埋つてゐる。やがて長き堵列を爲し馬場先御門へと進む。沿道人の垣、旗の波、次々と参入する。

仰ぎ見れば宮居の空は高く澄み、群れ鳩舞ひ、正殿旭日に映え、松は千年の翠を湛へ、瑞氣場に満つ。萬歳額、菊花御紋の幔幕、日月金鶏の萬歳旛、菊花の配置、簡素にして偉然たる参列席の廣がり、かゝる折有職顯官徐ろに所定に位置し、五萬數千の各代表つゝましく控へたる様、目出度くもかしこし。

午前十時四十八分、大内山の彼方より喇叭の吹奏響き渡る。今ぞ 兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉るのである。更に起る君が代の奏樂、一双の金屏風を背に着御、仰ぎ見る 至尊、民草肅然として靜にひかふ。近衛首相進みて式典開始の旨奏上、一同最敬禮、君が代奉唱、莊重の旋律千代田の森に響す。首相再び参進、神武の昔樞原の御即位の庭に、天神の壽詞を奏せし天兒屋根命百代の子孫と聞く近衛公、二千六百年後の今日の佳き日、同じく御前に壽詞を奏上す、その聲清く強し。

陛下御起立の上優渥なる勅語を賜ふ。次いで起る紀元二千六百年頌歌、「遠うすめろきのかしこくも はしめ給ひしおほ大和」感極り涙溢れ落つ。首相三度進み出で、熱誠至情の聲高く「天皇陛下

萬歳」を奉唱、全員唱和、その聲天に冲す。この歡呼の轟きは全國津々浦々に傳はり、怒濤の如く大陸に響き、餘韻全世界を被ひしことと思ふ。時に三宅坂とおぼしきあたりに殷々たる皇禮砲轟き、首相式典終了の旨奏上、奏樂裡に還御あらせられ盛典第一日の儀終る。

翌十一日、昨日にまさる快晴瑞氣彌が上に濃く、參入者の胸間には拜受の徽章煌き堵列の中に入りて人垣の中を行くも晴々し。午後二時近く、至尊の御姿を再び拜し感激愈々深し。首相奉祝會開始の旨奏上、一同最敬禮、君が代奉唱、高松宮殿下清々しき御聲にて御祝詞を奏上せられ、米國大使外國使臣を代表して奉祝詞奏上、陛下重ねて勅語を賜はる、感銘無限。かくて祝宴に入り、兩陛下長くも草莽の臣等と共に御饌御酒を召さる。嗚呼この御恩寵、思はず杯を押し戴き感涙に咽ぶ。悠久の舞樂、大歡喜、二千六百年頌歌行進曲、奉祝讚歌、しばしは君民和樂の歡びに浸る。次いで全國學生代表三千名の赤誠こめたる「奉祝國民歌」の奉唱、高松宮殿下の御發聲にて、陛下の萬歳奉唱、首相奉祝會終了の旨奏上、午後三時すぎ還御。爰に二日間に亘る曠古の御盛儀全く終了を告ぐ。

見よ、參列を了りて式場を下り行く人々を、「御民われ」の歡びその顔に輝き、「生けるしるし」その身に溢るゝを。御饌と御酒はそのまゝ持し歸り同僚や近くの人々に分たん。拜受の御本は家寶として永く傳へん。この御恩寵餘りに尊く、この感激餘りに太し。至尊の御姿、玉の御聲、首相の壽詞、宮様の清き聲音、奉祝の合唱、萬歳の轟き、ありありと甦り浮ぶ。

「瑞雲靄々トシテ宸闕ノ上ヲ繞リ和氣洋々トシテ禁苑ノ外ニ溢ル、普天率土手ヲ額ニシ聲ヲ同ウシテ此ノ盛事ヲ謳歌セサルナシ」とは殿下の祝詞、「今次ノ盛典ハ大日本帝國ノ光輝アル歴史ト傳統ノ悠久性ヲ象徴シテ之ヲ四海ニ昂揚スルモノナリ」とはグルー大使の奉祝の詞。實に皇國の宏遠、皇謨の雄深極まる所無し。無限の御稜威、無量の聖恩、數ならぬ身にも愈々深く愈々厚きを覺ゆ。此の上は只管魯鈍に鞭ち、日夕臣道の實踐に邁進するのみである。

多 田 吉 彌

私は、東京在住の弟と共に、此度舉行せられたる紀元二千六百年記念祝典に參列するの光榮を得たる者であります。私及弟は、司法官として、多年朝鮮に在住し、今は孰れも退職の身と成り、私は島原に、弟は東京に在りて、餘生を送り居りますが、終身官とは申せ、退職後も、共に勅任の末班に加へられ、殊遇を賜はり、光榮に存じて居る處であります。此度も、是れが爲に、參列する事を得たるものにして、聖恩の高大無邊なる、感激の至りであります。

式場にては、兩日共、私等は最前列近くにありて、優詔を拜するを得、洵に恐懼感激感涙に咽ぶのみでありました。私等兄弟が、斯く打揃ひて、斯の如き光榮に浴したるは、家門の榮譽是に過ぐるものはありません。私等の感激の一層大なるは是れが爲であります。私は歸郷後直に兩親の墓前に此光榮を告げ、親族知己にも是れを語り、今後益々滅私奉公の誠を盡さん事を相共に誓ひたる次第であります。

参列の記

長崎控訴院書記 田 中 秀 吉

一六四

われ／＼一億民草の歡喜と感激を以て、悠久二千六百年を壽ぐ曠古の盛典は、昭和十五年十一月十日、十一日の兩日に亘り、秋清涼の宮城外苑、古式床しく新装なつた式典場に於て、畏くも天皇陛下 皇后陛下の行幸啓を仰ぎ奉り、盛大且嚴肅に執り行はせられ、私も司法部職員の一代表として、参列の光榮に浴したのであつた。

十一月十日。紀元二千六百年式典の日である。前夜來の天候は、何となく案じられたのであつたが、明くれば奇しくも、一點の雲さへなき澄み渡りたる秋晴となつた。朝まだき歡喜に胸ふるはせつゝ豫定の時刻に、式典場に参入したが、わが長崎控訴院同管内職員代表は司法部第一班として最前方に配列せしめられたのは、誠に幸であつた。

青空の下、麗かなる陽光は大内山の翠に照り映えて、光芒を放つて立てる銀色の鉾、翻へる華麗な朱色の長旗、奉祝の歡喜を孕む幔幕、香り床しき黃菊白菊、式殿中央には、金色輝く屏風の前に玉座を拜し、掃き清められたる玉砂利、神代のやうな清淨の氣が漂ふて居る。かくて五萬五千の民草が襟を正して、御待ち申上げる中に、莊重なるラッパの音はかすかに響いて、われ／＼の瞳は凝つて崇高さに胸つまるやうな一瞬。御軍裝御凜々しき 天皇陛下、御洋裝神々しき 皇后陛下、今、目のあたり仰ぎまつる、大君の尊さに感激は刻々と高まつて行き、軍樂隊の國歌奏樂裡に、

兩陛下は式殿に出御、靜かに玉座並に御座に着かせ給うた。諸員最敬禮の後、一同聲高らかに「君が代」を奉唱した。まことに五萬五千のただ一に和する莊嚴なる調べであつた。参列者の誰もが感激の涙を以て奉唱し、ともすれば聲さへ嘎れんとしたのであつた。終つて、近衛首相は御前に参進、全國民の奉祝の赤誠をこめて、莊重なる壽詞を奏し奉つた。

天皇陛下には壽詞を受けさせられ、畏くも玉音朗々として、優渥なる勅語を賜はつた。私は微賤にして、初めて玉音を拜聴したので、たゞありがたさに、胸迫る感激に身も心もふるへたのであつた。満場寂として聲なく渾然たる感動の融和。息をこらした私たちは、胸裡に深く至誠奉公を固く誓つたのである。

次に軍樂隊、學生生徒の紀元二千六百年頌歌の齊唱があつたが、その歌詞の一つ一つにも胸迫るものがあつて、たび／＼眼がしらが熱くなるのを感じたのである。終つて、正面階段前に参進し威儀を正した近衛首相が、天にも通れと奉唱する聲、「天皇陛下萬歲」、つひに感激の波は堰を押切つた。之に和する一億の進る熱誠に、聖壽無窮を壽ぎまつる萬歳の聲は、大内山に轟き渡り、一億進軍の雄叫びのやうな世紀の凱歌であつた。

壯んなる大日本の姿哉

十一月十一日。この日は前日の式典に引續き晴れの紀元二千六百年奉祝會である。今日も亦惠まれたる紺碧の快晴で、大内山の木立の中には小鳥が嬉々として戯れて居る。ここに再び、兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉ることとなり、参列者の感激は譬へやうもない。會場は奉祝一色に染め替

一六五

へられて、式殿前を飾る旗は多彩な五色旗となり、幔幕は紅白の縦縞、玉座並に御座は、華かなテーブル掛に取替へられ、前方には華麗なる舞樂舞台を設け、参列者の卓上には、この日を記念する記念品などが備へられてあつた。

午後二時十分頃 兩陛下は、前日と御同様御軍装並に御洋装を召させられ式殿に出御あらせられた。近衛會長は御前に参進、奉祝會開會の旨を奏上して元に復し、稍々あつて、奉祝會總裁宮殿下御代理高松宮殿下には、陛下の御前に御参進、莊重嚴肅なる奉祝の詞を奏上遊ばされた。畏き御聲はマイクを通じ、場内隅なく拜聴することを得て、一同の感激はまた一入であつた。

次にグルー米國大使が奉祝詞を奏上し、陛下はこれを聴召されて、再び優渥なる勅語を賜つた。畏くも御雄渾極りなき玉音は、ひれ伏す民草の上に御力強く拜し、参列者の胸は感激に高鳴り、日の本の國に生を享けたる大きな歡喜を今更ながら銘記したのである。

かくて 兩陛下御椅子に着御、御膳並に御酒を奉つて開宴となつた。奉つた供御は、國民と慶びを俱にせさせ給ふ思召から、参列者と御同様の野戰食であつたとのことを漏れ承つた。誠に畏き極みである。開宴と同時に始つた莊重典雅な舞樂「悠久」や軍樂隊の「大歡喜」、行進曲、奉祝頌歌、學生生徒の奉祝國民歌など、いづれも耳目に残つて印象深く、長い時間に亘つて、君臣和樂の美しくもまたありがたい情景であつた。

宴終つて高松宮殿下は、舞樂舞台上に昇られ、御力強く 天皇陛下萬歳を御發聲、諸員また天地に響けと高らかに唱和し奉つた。かくして近衛會長奉祝會終了の旨を奏上し 兩陛下には午後三時

頃御機嫌麗しく還幸啓遊ばされ、ここに世紀の祝典は滞りなく終つたのである。

君臣の和樂ゆたけき御代の宴

兩日に亘るこの感激、感銘の中にわれ／＼は、皇國の眞の姿を感得し比類なきわが國體の尊嚴を體認し、生を聖代に享けてこの盛事に際會したる光榮は、子々孫々に傳ふべきものであるのみならず、各その職分に應じ、いよく粉骨碎身以て奉公の誠を致すべく誓つた次第である。

感想

田 中 秀 次

十一月十日、十一日の兩日、紀元二千六百年奉祝式典並に奉祝會に、参列の榮譽を忝うし、天皇 皇后兩陛下を拜し奉り、優渥なる勅語を賜りました時は、只だ日本國民たるの光榮と感謝の念が胸にこみ上り、大君の御爲めに身命を捧げむ氣持で一杯でありました。

高松宮殿下の御力強き萬歳の御奉唱に唱和し奉りたる感激は、私共日本人のみの持つ大なる誇りで、外國人などの逆も想像出來ない嚴肅其のものでありました。此の盛世に際會したる私共は何たる幸福であります。同時に臣道實踐の責務を深く痛感致します。

大君に捧けまつらむ 己か身は

戦のにはに 果つへかりしを

あま照す御代に生れし 民くさの
一心築く 東亞の礎

一六八

田原春吉

皇紀二千六百年十一月十日十一日と九月十七日、此の三日は私の一生を通じて忘るゝ事の出来ぬ無上の光榮であり喜びの日であり、而して粉骨碎身滅私奉公を心中深く強く誓ひ、自己は勿論一家一族と共に喜んで一命を君國に捧ぐ可く決心した日であつた。更に思ひを參列者五萬有餘の上に及して想像する時、感謝感激に多少の差こそあれ、歸着する所は皆同一ならんと思ふ時、今回の式典程國民の思想善導上有益であつたものは他に其比を見ない事を感じたのであります。以下私の感想そのまゝを列記せん。

九月十七日午前九時速達書留郵便が來た。受取つて見ると、内閣總理大臣と奉祝會長である公爵近衛文麿閣下より、式典參列の案内状であつたので、夢ではないかと思ふ程の喜びであつた。此の喜びこそ、縣下より參列した四百五十二名中、何人よりも自分の喜びの多かつたものと思ふ時、更に喜びと感謝は増すのであつた。

他の參列者以外の喜と謂ふのは、私の祖先を祀る本家の相續者である兄の一人息子の瀧雄と、昭和十二年七月末〇〇部隊の營庭で別れたのが最後となり、十三年八月三十一日中支廬山の激戦の際

通信班長として奮戦中敵弾に斃れたのが、本年十月中旬に靖國神社の神靈に合祀せらるゝので、是非參詣して、邦家の爲に克く戦死して呉れた、家門の譽れであると挨拶をしてやりたいと思ふて居たので、此の名譽ある式典に參列して、其序に參詣すれば、甥の靈魂も定めし喜ぶ事と思ふ喜があつたから、他の何人よりも私の喜びが多いと思ふたのです。

夫れで十一月十日十一日の兩日の來るのを、眞に一日千秋の思ひで待つ中、十月三十日には縣下の參列者名簿の送附があり、開いて見ると第六班副班長とあり、是又光榮と喜びの中に上京して式典に參列して大内山を仰ぎ、莊嚴なる式場に列し、兩陛下御同列を拜し、勅語を拜聽し、又翌日は本縣代表の先頭に列したる爲、兩陛下の御英姿を拜する事が出来、玉音迄拜聽する事を得、更に陛下の御前にて祝杯を擧ぐる事を得たる時、萬感胸に迫り、唯々恐懼感激、實に勿体ないと感涙に咽ぶの外なく、此の感想こそ筆舌に盡す事は出来ぬが、強いて一言にして申せば、前述した様に、自己は勿論、近親共に一命を陛下へ捧ぐ可き決心が從來より一層強く感じたと思ふ外ないのである。然らば是迄は滅私奉公の心が稀薄であつたかと申せば、決して左にあらず、是迄とても人後に落ちて居ない心算である。其實例を列記すれば、自家廣告の様であるが、幼少の頃より、我祖先は九州の名族大友氏の重臣田原近江守近賢の末流なれば、忠君愛國の心だけは人後に落ちぬ様にと父から教育せられて居たので、近親一黨と共に此の點には注意して子弟の教育にも務めて來た。實例を申せば、私の兄が一人息子を戦死させ、相續者を失ひ居る時、私は國家未曾有の重大時局に直面して居る時とて、師範學校出身の息子に申つけ、進んで徴兵検査を受けさせた處幸にも甲種合格と

一六九

なつた。親の目から見ても立派な体軀を持つ者が、安閑と教育をして居る時でない、當時始めて制度の開けた幹部候補生を志願して、君國の爲に一命を捧ぐべき時だと申せば、息子も喜び勇んで志願を爲し、昭和十四年五月には見習士官で小隊長に選ばれ、荒木部隊に屬して北支山西の第一線に立ち奮闘中、同年十二月七日兩頬に貫通銃傷を負ひたるも、九死に一生を得て、今は全快致し奉公中である。戦傷當時の状況は、十二月十八日より二十七日迄の大朝、福日、長日、島原、長民等の各新聞紙に三段抜乃至五段抜の大見出にて掲載して居たので御承知の人もあらんと思ふが、福日の全國版に掲載せしものを摘記すれば、

「軍刀を揮つて飛込む、沈黙せぬ敵のトーチカ内、勇敢なる田原弘之少尉」と題し、

荒木部隊田原弘之少尉は灣山村附近の戦闘で、單身敵のトーチカ陣へ躍り込み、敵兵數名を叩き切り、敵地を占領したが、遂に敵弾にて顔面に負傷したと、掲載してあり、事實又然りである位にて滅私奉公の心は決して人後に落ちぬ様にと心がけて來たのである。實兄は既に相續者である一人息子を御國の爲に捧げ、弟の私も一人息子が勇敢に奮戦して呉れて、今もなほ御奉公中であるので聊か自ら慰めてゐたのであるが、今回式典に參列し、十日十一日の兩日（龍顔を拜し、更に戦死して靖國の神となりし甥の身の上を思ふ時、死して餘榮あり、一死奉公これが我一族の向ふべき所だ、父の教への通り、粉骨碎身滅私奉公の誠を捧げたいと感ずると同時に、此の式典に參列せし五萬有餘の人の心は皆一つなりと思ふ時、今回の式典程國民の思想善導上有効なりしものは他に其比を見ざるものと信ぜし者なり。

神なから國の姿を其まゝに

年を迎へて二千六百

ともすればをくれかちなるわかこゝろ

ひきしまりたる今日のうれしさ

紀元二千六百年聖典に參列して

檀 上 謙 爾

御民吾れ生ける驗ありと壽ぎ奉る紀元二千六百年の記念式典及奉祝會が十一月十日、十一日の兩日、宮城外苑の大廣場に於て舉行せられ、私も縣民代表の一人として參列するを得て、永久に子孫に傳ふべき感激を受けました。

今回參列の榮を荷うたものは約六萬人であつて、此人たちは國民各階層よりの代表であつて、皆千載一遇の光榮に浴することの歡喜に興奮して居つた。殊に長年間母國を離れて、國威を中外に發揚して居る在外同胞が、世界の隅々から馳せ參じて居つて、全く文字通りの舉國的式典であつた。兩日とも天氣は晴朗で全く風なき佳日であつて、天神の加護に喜び合つた。我國は建國以來神助に恵まれたる國柄であるが、今さらながら神國の有難さを泌々と感ぜざるを得なかつた。

兩日とも長くも 兩陛下の行幸啓を仰ぎ、龍顔を重ね重ね奉拜するの光榮に浴し、感涙を浮べ

ざるを得なかつた。殊に奉祝會當日には君臣和樂の饗宴が一時間も繰り展げられ、其際 兩陛下に捧げられた御食膳は參列者と全く御同様のものと承り、畏き極みであつた。參列者一同は聖代の有難さを痛感しながら、夫々祝杯をあげて大御代を壽ぎ奉つたのであつた。

式典日長くも 陛下には玉音朗々と有難い勅語を賜ひ、此一瞬忝さに心打たれ、頭は自ら垂れ、深い感涙に咽んだ。宏大なる大御稜威の下に誓つて大御訓を服膺し、聖恩の萬分の一に應へ奉らんと深き決意を固めた。二日目重ねて再び優渥なる勅語を賜はり、唯々感激と有難さにと胸迫るのみであつた。

式典中近衛首相は恭しく御前に進まれて、感激の壽詞を高らかに奏し奉られた。其聲は式場の隅々に響き渡り、皇國民の聲をこだませた。首相の發聲の下に歡喜にふるふ萬歳を三度唱和し、悠久無限の皇運を高鳴る胸一杯に御慶祝申上げた。其瞬間皇禮砲は發射され、其音響は天地に轟き、正に一億同胞の世界進軍譜の如く感ぜしめられ、自ら嚴肅の氣に打たれた。次の日には高松宮殿下が奉祝詞を奏上遊ばされたが、其の祝詞の中に「臣宣仁」と申されてあつて、一君萬民の我國体の御表現を拜察申上げて、思はず身内の引き緊るを覺えた次第である。饗宴の感激高まる時に、殿下には式殿前の舞台中央に御起立遊ばされ、御双手をあげさせられて力強く「天皇陛下萬歳」を御發聲、諸員は天にも届けと、感激を籠めて高らかに唱和し奉つたのである。皇族殿下の御發聲によつて參列者一同が萬歳を奉唱することは全く前例なき由であつて、意義殊に深き世紀の此祝典に當つて 天皇陛下の御弟宮にあらせられます殿下の御發聲で、國民代表一同が 聖壽の彌榮を讃へまつ

つたことは、上下和親、君臣一体の精華を如實に顯現せるものと謂ふべく、正に此時感激の最頂點に達し、肉も心もをのゝく許りであつた。

奉祝會當日開宴となるや、樂師達は朱塗の勾欄美しく輝く舞台に立ち並び、太刀を抜きて、雄々しくも華麗に奉祝舞樂「悠久」を舞ふ。參列者一同はしばしが程其妙技に酔ふたのであつた。此舞樂は文武兩道の我が武士道の眞髓をもつて、永遠に我國体を護り、皇運の無限を壽ぐ意を寓する演舞である由で、萬の國に優れた我國の精華を彌々發揮せねばならぬことの感を愈々深めた。

次に全國各種學校總代三千餘人の齊唱團により今こそ祝へと高唱された國民奉祝歌は、長く長く餘韻を引いて大内山の綠に融けて行き感涙を催した。此光榮に選ばれた彼等の喜びは如何許りであつたか想像に餘りあるものがあつた。彼等は決して今日の光榮と感激を永遠に忘れず、御國の彌榮に貢献せんことを心竊かに囑望した。

私は記念品「聖徳餘光」「列聖殊藻」を拜受して式場を出づれば、國民歡喜の波は宮城を廻りて動いて居り、旭日旗は殊の外に麗はしく榮光に映えて居る。天地は盡く聖代を壽ぐ奉祝の一色に塗りつくされて居るが如くであつて、感激は愈々深きを覺えた。我國ながら尊かりけりの矜持はすくなくと身内より湧き出で、感喜をおさへる事が出来なかつた。

世界の前史將に終らんとする前古未曾有の世界動亂期に際し、我國は皇統連綿洵に世界に於ける最も古き國として、八紘一宇の精神に於て最も新しき國として、茲に皇紀二千六百年奉祝の日を迎へ、私共は感激に感激、全く感激の連続に浸りきつたが、此感激の中に靜に心境を澄し現狀を凝視

すれば、今や我國は神武天皇の御東征に比すべき八紘一字の一段階、所謂東亞共榮圈の確立を大陸に、更に南方諸國に、萬歳の固きに置かんとして居るのである。是の如く建國以來始めての雄渾森嚴なる舞臺に立てる折柄、私共は内外一切の艱難困苦を克服して、此神聖なる任務を果さねばならぬことを痛感した次第である。

警務課長 富 樫 總 一

遙かなる二千六百年の昔、皇祖 神武天皇が橿原宮に御即位の盛儀に、日向御出發以來實に十數年、戰場生残りの勇士が、即ち吾等の先祖が歴戰艱苦の刻も深き双頬に感激の涙を流して列した感慨はどんなであつたか。星霜二千六百年の今日、草莽の一微臣何んたる光榮ぞ、龍顔を咫尺に拜し奉り、あまつさへ 聖躬御自ら玉音朗々優渥なる大詔を降し賜ふ、感懷や、げに現實を超越す。強ひて文字に現さば恐懼の二字あるのみ。歲月二千六百年の昔と今日、御前に拜するは萬世一系の天皇陛下、式場に感泣するは聖慮に育くまれたる日本帝國臣民なり。橿原の宮にむせびし涙と、二千六百年後の今、此式場に滂沱たる涙は、これ不變悠久の日本魂にして、今や皇國は世界未曾有の變局に際會し、大東亞共榮圈確立の途上にあり。吾また光榮ある帝國臣民の一員として、歴史の大原則に遵ひ、國家の中心たる皇室に歸一し奉り、一死奉公以つて天壤とともに窮りなき皇運翼賛に挺身の覺悟を鞏めし事今更言ふ可くもないであらう。

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會に參列して

梅香崎警察署長 富 永 伊 之 亟

畏くも 天皇 皇后兩陛下の親臨を仰ぎ奉り、輝しき聖紀二千六百年式典並祝賀會を擧げらるゝに當りまして、草莽の一微臣にして參列の光榮に浴し、新に御建設になりました古風式殿の正面に兩陛下の尊き御姿を拜し、其の上優渥なる勅語を賜り、玉の御聲を拜聽し、感激に身をふるはせ乍ら、陛下の萬歳を奉唱致しました事は、洵に畏れ多い極みながら、私の生涯を通じての最高最大の感激であり、末代家門の譽でありまして、皇恩の宏大無邊なるに切々と感佩致し、今更ながら

御民われ生けるしあり天地の

榮ゆる時にあへらく思へは

と云ふ辱けなき有難さ勿体なきを泌々と体得し、衷心から悠久なる我が皇室の御彌榮と帝國の發展を祈念し奉り、微力また萬民翼賛の臣道實踐を固く御誓ひ申上げ、陛下の警察官として益々銃後治安維持の完璧をめざして粉骨碎身奉公の誠を捧げ、皇恩の萬分の一にも應へ奉らん事を更に胸中深く刻みました。

北松浦郡今福町警防團長

富

永

一

萬邦に比ひなきわが聖紀を祝福し奉る紀元二千六百年の式典に、警防團長として、參列の光榮を擔ひ、聖上の鴻恩に感泣すると共に、竹の園生の彌榮を壽ぎ奉り、一死以て警防報國の精神を堅持せんことを誓ひ奉るものなり。

盛儀に參列して

壹岐郡田河村長

長

島

重

治

今や世界は一大戰場と化し去らむとし、我國も亦東亞永遠の平和確立の爲聖戰遂行第四年に際會するの秋、ゆくりなくも皇國は悠久紀元二千六百年を迎へ、記念の盛典と奉祝の式典を舉行せらる。斯る大事變遂行の眞唯中に此の盛儀を行はる、此の事それ自體が、我が國力が如何に綽々として餘裕あるかを思はしめ、國民として眞に力強さを覺えたのである。而も身微賤なれども、六千村民の代表の意味に於て、此の盛儀に參列の光榮を擔ふ。感激新たなるものがあつたのは申す迄もありません。

式場は瑞雲たなびく神聖にして靜雅なる宮城外苑の境域、假御殿を始め凡ての裝飾設備は純乎たる日本式を思はしめ欣快の情限りなし。式典は 天皇皇后兩陛下臨御の下、第一日は嚴肅莊嚴に、

第二日は和樂歡呼の裡に執り行はれたと申すべきであります。わきて高松宮宣仁親王殿下の御祝詞は御音吐朗々、尊くも力強く、更に萬歳の御發聲にいたりては、彌が上にも力強く、感激の涙と共に御唱和申上げた次第であります。私共の位置は 玉座より遙かに遠く 陛下の下し給ひたる勅語の玉音は惜しくも拜聽することが出来ませんでした。後に

「我カ維新ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアランコトヲ期セヨ」
「今ヤ一大世變ニ際會スルモ平和ノ日ナラスシテ恢復セラレ萬邦ト俱ニ其ノ慶ニ賴ラムコトヲ望ム」

との御旨なりしを拜讀して、陛下が、八紘一字の肇國の大理想と平和を如何に愛好し給ふかといふ大御心を昭示し給ひたるを得得し、「世界の人々よ、此の高遠なる御理想と仁愛の大御心を仰ぎ見よ」と心の中で絶叫したのであります。

實に壹千二百年前萬葉歌人の歌へる

み民われ生けるしるしあり天地の

榮ゆる時にあへらく思へは

私の感激は此の歌につきてをります。思へば町村は國策を實踐する第一線でありまして、町村の充實振興なくして國家の總力を發揮する事は絶對不可能であります。私は滅私奉公、餘生を君國に獻ぐべく、私の職場に斃れて後止むの覺悟を堅うした次第であります。

津吉郵便局長 長 島 英 雄

我が國の歴史上に燦として輝く紀元二千六百年、萬民赤誠を捧げて、この佳き年を慶祝し、天壤無窮の皇運を壽ぎ奉る曠古の盛典に、熊本遞信局管内三等郵便局代表として、參列の光榮に浴せしことは、眞に千載一遇感謝感激の極みで御座いました。熟々想ひまするに、草莽の微臣にして忝けなくも、龍顏を咫尺に拜し奉り、玉音朗かに勅語を賜はり、剩さへ永代の家寶たるべき記念の書籍並に御祝酒、饌を戴き、御前に於て君臣和樂の祝宴の光榮に浴したのであります。誰か洪大無邊なる皇恩に感泣せざるものが御座いませうか、私は眞に此の有難き感激が滿身に溢れたので御座います。さうして此の感激の中に、明治神宮、靖國神社、桃山御陵、皇大神宮、橿原神宮等に詣で皇國日本に生を享けたる御民吾れとしての眞の喜びと感激を心より感謝し、滅私奉公職域に邁進せんことを祈誓致しました。

曠古の盛典に參列して

長 島 増 次 郎

神武天皇肇國御創業の大典を擧げさせ給ひてより、悠久ここに二千六百年。誰かこの崇高尊嚴なる國體に稽へ、一系無窮彌榮えまます、皇室の萬歳を奉祝し、歡喜し感激せぬ者があらうか。況して

や、この佳年を祝福すべき、曠古の記念式典並奉祝會に、參列の光榮に浴したる者に於ておやである。布衣の微臣たる私も、參列員の一人として、千載一遇の有難き光榮に浴し、洵に恐懼感激の至りであつた。

先づ、往復とも無賃の臨時列車を以て、私達參列員を輸送する、一糸亂れざる陣容を、整へられてあつたことには、全く聖代の有難さと、世紀の文化また新なることに、大きい感謝を捧げなければならぬ。

式典當日は、一點の曇なき日本晴。午前七時半、豫備集合所たる日比谷公園に集合して見ると、參列者一同は、搖がぬ御代に生ひ立つた感謝に火の様に燃え、報國の血に勇みきつて、威儀を正し肅然として、只今日の光榮と感激に、うち震つて定めめの位置につく。時刻いたつていよいよ參進、馬場先門に差しかかれば、清楚にして森嚴なる裝飾、邊りを壓して、參列者自ら頭をたれ、足竝も靜かに嚴かに入場着席。式殿を拜すれば、御紋章づきの紫色の幕が高く張りめぐらされ、左右には奉祝紀元二千六百年の文字鮮かなる錦旗が飾られ、正面には萬歳の大額が掲げられて、大奥には、仄かに光る金屏風を背にして、玉座 御座を設け、晴れの臨御を御待ち申上げてあり、何とも名狀のし難い神々しいよそほひである。

やがて奏でらるる「國のしづめ」の喇叭の音につれて、さつと銀光ひらめく儀仗兵の捧げ銃。一同最敬禮のうちに、御軍裝御凜々しき 天皇陛下、清楚なる御洋裝の 皇后陛下御座所に着御あらせられました。此の時五萬幾千の參列者一同、龍顏を咫尺に拜し奉り、その畏くも忝じけなきに

感泣し并躍したのである。次で開式、委員長近衛内閣總理大臣の壽詞奏上、つゞいて 天皇陛下
龍顔いとも御麗しく、玉音朗々勅語を賜はり、曠古の佳年に處する國民の嚮ふべき所を昭示し給ひ
ました。私達は眞に感激の極に達し、刻一刻と身も心も、をのくばかりであつた。然して國歌齊
唱、萬歳奉唱のときこそ、まことに此の日の感激の絶頂であつた。五萬幾千の參列者が、異口同音
に「君が代は千代に八千代に……」と靜かに歌ひ出した一瞬、目頭がジーツと熱くなつて、胸が
自然に高鳴りきたり、今こそ、我が聲——歡喜溢るる此の聲——を咫尺に拜する 兩陛下の御許に
達せしめたい、「萬歳」との聲が 陛下の御玉體までとどけよかし、との氣分にかられながら、謹み
て唱ひ奉つたことは蓋し私の終生忘れることの出来ない感激である。

翌十一日の奉祝會當日も前日に劣らざる晴空。午前十時半、豫備集合所なる日比谷公園に參集し
て、榮ある記念章を拜受、一同これを佩用して、身も心も朗らかに前日と同じき經路を以て參進、
會場に着席す。やがて、畏くも 兩陛下臨御遊ばされ開會となる。先づ、高松宮殿下奉祝詞奏上、
つゞいて優渥なる勅語を降し給はつたので、聖慮深遠なるに又宏大無邊の皇恩に、只管感泣したの
である。次で祝賀の饗宴には、此の聖代を壽ぎ奉る限りなき喜びの裡にも、遙かに思を前線將兵に
馳せ、其の奮闘を偲ぶべき野戰料理の食饌と家寶として子々孫々に傳ふべき、記念叢書（列聖珠藻
聖徳餘光）をいたゞき、恐れ多くも 兩陛下の御前に於て、寶祚の無窮を祝つて、盃をあげまつり、
天地も搖げよと、聖壽萬歳を三唱する光榮を身に受けたのには、只々感激の外はなかつた。此の饗
宴に於て所謂、君臣和樂の情景、君民一體唇齒輔車の關係そのものの我國獨特の誇りの實体に、浸

り得たる喜びと感激とは又私達の夢寐にも忘れようとして忘れることの出来ないことである。

此の兩日の盛儀に於て、受けたる非常なる感激は、私の終生忘れ得ざる所であるのみならず、家
門の榮譽とする所であつて、益々減私奉公、臣道實踐の臍を固め、以て聖恩の萬分の一に報い奉ら
んことを期する次第である。

今や我國運益々隆昌にして、建國以來未曾有の國威伸張の機に臨んで居ると雖、隣邦支那に聖戰
を聞きてより正に五年、内外まことに多事多難。高度國防國家建設への國內體制整備には勿論、大
東亞共榮圈の確立より世界新秩序建設への大理想完遂の責任は、一に吾等一億國民の双肩にかかつ
て居る。吾等は此のめでたき年を慶祝し感激するに方り、時局重大なるに深く思を致し、益々協心
戮力、我國所期の目的達成の爲に、誓つて新なる意氣と力とを示すべきである。

紀元二千六百年式典參列の浴榮謹想

佐世保健所長 永 田 梅 男

一億民の歡喜と感激を以て紀元二千六百年の佳き年を壽ぐ曠古の盛典、その式典は
天皇陛下御即位の佳き日の記念日たる昭和十五年十一月十日午前十一時より宮城外苑の式典式場に
天皇皇后陛下の行幸行啓を仰ぎて盛大且嚴肅に舉行せられたり。

本年紀元節の祝日、畏くも優渥なる詔書を渙發せられ、内外重大時局に際し萬民翼賛の道を昭示